
魔法少女リリカルなのは～蒼銀の護り手～

天叢雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは蒼銀の護り手

【Nコード】

N1880N

【作者名】

天叢雲

【あらすじ】

ある日突然『穴』に落とされた俺は、神の暇潰しに付き合わされるハメに。飛ばされる先は——『リリカルなのは』の世界だった！
？そして原作介入をする事になった俺を待ち受ける運命とは……
？

プロローグ（前書き）

こんにちは。天叢雲です。

処女作の方がだいぶ進み、区切りもよかったので第2作に着手してみました。

といっても相変わらずメインはあちらですので、こちらの更新は気長に待っていただけるとありがたいです。

それでは、本編をどうぞ！

ブローグ

ある日道を歩いていた俺の足元に、突然穴が開いた。

コイツ頭おかしいんじゃないの？と思うかもしれないが、事実である。

そして、俺は為す術もなく穴の底へと落ちていく。

．．．．父さん、母さん。先立つ不をどうかお許してください。

ああ、死んだな．．．．。瞬間的にそう悟った俺は、心の中で両親に謝罪していた。

どこまで落ちたのか、周りは闇に覆われていてわからない。
しかし俺の落ちた穴が全く見えないという事は、だいぶ深いところ
なんだろう。

「っていうか、なんだったんだあの穴は……」

思わず1人ごちる。

「はっはっは！あれは俺が仕掛けたのさ」

どこから豪快な笑い声と共にそんな声が聞こえてきた。

「だ、誰だ！？」

反射的に辺りを見回すが、闇の中で見えるはずもない。

「悪い悪い。今姿を見せてやるよ」

声がそう言った瞬間、強烈なフラッシュがたかれて視界が白く染まる。

「うわっ、まぶしっ！？」

急に開けた視界にだんだん目が慣れていくと、そこには――

「ようっ」

軽い調子で片手を上げる美男子イケメンがいた。

「……って、誰だよ！？」

俺にはこんな知り合いはいないぞ！？

「ああ。そういえばまずは自己紹介をしないとな。俺はゼウスだ」

「……は？」

「おい。なんてアホ面してるんだ。聞こえなかったのか？」

「あ、いや、大丈夫だ。聞こえてはいる。……だが本当なのか？」

「いや、ここで嘔吐いてもしょうがないだろ」

「……それもそうか」

若干納得はしかねるが。というか、ゼウスってジジイじゃなかったのか？

「おい、失礼な事を考えるな。俺達神には年齢という概念はない。だから姿形は好きなように変えられる」

うお！？まさか俺の心を読んだのか！？

「正解だ。なんせ神だからな。それくらいはできて当然だ」

ああそうかい。

「で、ギリシア神話の最高神たるゼウス様が一体俺に何の用で？」

「む。随分落ち着くのが早いな。もうちょっと騒いでもいいだろうに」

「騒いだところでこの状況がどうなるわけでもないだろう？だって騒ぐだけ無駄だ」

「それじゃ俺がつまらんだろ」

ヒデエ神様だな。

「で、用件は何だ」

「俺の暇潰しに付き合ってもらおうと思ってな」

「断る」

神の暇潰しだと？そんなのどうせロクでもない事に決まってる。

「ちなみに拒否権はないぞ？」

「なっ!？」

「当然だ。それに、お前はもう元の世界には帰れない」

「どういう事だ」

「穴に落とすと同時に、あの世界から『——』という存在の記憶を消したからな」

「ふざけるな!」

「いいねいいね。熱くなってくれて大いに結構。やっぱこうじゃないと」

「くっ……」

既に俺はヤツの掌の上、というわけか……

「まあ、もちろんただ付き合わせるのも悪いからそれなりの『特

典』は用意するよ?。」

「『特典』?何だそれは」

「それはこの話を受けてくれたら教えるよ」

受けてくれたら、などと言っているが、実質俺には選択肢など存在しない。

「……わかった。引き受ける」

「ふふつ。そうこなくっちゃ」

そう言って笑う神に、俺は苦い表情をするしかなかった。

第1話 『説明を受けたら能力設定って、どこのRPGだよっ!』 (前書き)

申し遅れましたが、この作品はオリ主（弱チート）ものとなっております。

ですので、そういう設定が苦手な方はお気をつけください。

それでは、本編スタート！

第1話 『説明を受けたら能力設定って、どこのRPGだよっ!』

「で、『特典』とやらは結局何なんだ?」

腹を括った俺は、ゼウスに問い掛ける。

「それはね」

「……勿体つけずにさっさと話せ。」

「おお怖っ! はいはい、言いますよ。『特典』は何でも7個まで希望を叶えてあげる事。後付けもオツケーだよ」

テンプレだな。

「そこ! 余計な事は言わない!」

はいはい。

「……なんか俺の扱い軽くなってないか?」

ゼウス（笑）

「ってコラーっ! 神の名前に（笑）とかつけるなーっ!」

「いい加減心を読むのを止めろ」

——スパアーン!

「いったあーっ！ツッコんだね！親父にもツッコまれた事ないのに！」

何故そのネタを知ってるんだ？

「当然だ！なんせ人間界の娯楽（特にアニメや漫画）は天界や地獄でも大人気だからな！」

「だから心を読むな」

——スパアーン！

「……そういえば、俺はいつハリセンを持ったんだ？」

はて？全く身に覚えがない。

「ここは願望を実現する空間だからな。お前のツッコみたいという思いに反応して現れたんだよ……」

後頭部をさすりながら、ゼウスが答える。

「へえ。面白いな」

「……これ以上変な事はしないでくれよ?」

チツ…………

「舌打ちするな！何かする気だったのか！？」

「別に何も」

しかし、いいオモチャだな。

「この期に及んで神をオモチャ扱い！？」

「いい加減本題に戻るぞ」

「――グスン」

あ、無視されていじけやがった。面倒くさいヤツ。

「悪かった。流石にイジリ過ぎたよ」

「本当に悪かったと思ってるのか……？」

「ああ」

「……わかった」

何とか立ち直ったゼウス。こんなのが神話の最高神でいいんだろっか？

「まずは何をすればいいのか教えろ」

「お前には『ある世界』に行ってもらっ

「『ある世界』？どこだそれは」

「『魔法少女リリカルなのは』の世界だよ」

——ズコッ

．．．．．思わずコケてしまった。『リリなのは』の世界だって！？

「この世界は無数の平行世界が連なってできているんだ。『リリなのは』の世界があっても何ら不思議はない」

「いやいやいや。不思議すぎるわ！あれは創作の世界じゃないのか？」

「だがあるものはあるんだよ。で、お前はその世界でなのは達に介入しろ」

「は？」

「だから、原作介入しろって言ったんだよ」

「いや……いいのか？」

こちらの世界の原作に影響が出たりとかはしないんだろうか？

「別に問題はない。俺はお前というイレギュラーが入る事で物語がどう変わるか、あるいはお前自身がどう変えるか見てみたいんだよ」

「……わかった」

「じゃあ、『特典』はどうする？」

「そうだな……よし。そういう事なら、

1・身体能力・魔力・気力の向上

2・専用のデバイス（インテリジェントとユニゾン）

3・使い魔的な存在

4・魔法技術に関するあらゆる知識

5・召喚魔法を使用可能

6・古今東西のあらゆる武術を使用可能（アニメや漫画に登場するものも含む）

7・未定

で頼む」

「いいぜ。それくらいなら特に問題もない。じゃあ——いつてこいや」

ゼウスがそう言った瞬間、また俺の足元に穴が開いた。

「……ってまた落ちるのかよっ!？」

俺の異世界生活、スタート!……ってこんな始まりはイヤじやあああああっ!!

第1話 『説明を受けたら能力設定って、どこのRPGだよっ!』 (後書き)

あとがき

作者 「はい!というわけで『リリなの〰蒼銀の護り手〰』スタートしました!」

?? 「『スタートしました!』じゃないだろ!俺の名前とか1回も出てきてないし!」

作者 「……あれ?そうだった?」

?? 「忘れてたんかい!」

作者 「いや、ごめんマジで。じゃあ次回はそこら辺の設定を公開しよう!」

?? 「はあ……。頼むぞまったく……」

作者 「それでは次回は主人公設定についてお送りします!」

?? 「また見てくれよな!」

主人公設定

作者 「という事で、予告通り今日は主人公のイロイロを紹介します」

?? 「まずは基本情報からだな」

作者 「それでは、どうぞ！ちなみに、身長・体重は無印スタート（9歳）時点のものです」

名前：氷護ひもり
龍姫たつき

性別：男

身長：125センチ

体重：30キロ

性格：以前は大人しい性格で、ヲタクだった。（主にリリなの、ガンダム、遊戯王etc.）

しかし転生してからは、明るく活発な性格になった。
ただし、時折年齢に不相応な落ち着きを見せる。

また、一度やると決めたことは必ず最後まで成し遂げようと

する。ある意味頑固。

『大切なものを守る』ということに強いこだわりを持っている。

龍姫 「……おい」

作者 「なんだよ」

龍姫 「何で俺は男なのに、名前が龍『姫』なんだ！」

作者 「それについては次の説明を参照してくれ」

龍姫 「どれどれ……」

容姿：蒼銀の髪を腰のあたりまで伸ばしている。瞳の色は澄んだ蒼。どこからどう見ても女の子にしか見えない愛らしい容姿。これを見た母親がせめて名前だけは、と譲らなかつた為あの名前に。

身体の線は細いが、鍛えているので筋肉がついている。

龍姫 「……………」

作者 「理解したか？」

龍姫 「……理解はした。納得はできないが」

作者 「それで結構。では次にスペックと保有スキルの紹介を某運命のゲーム風に」

【主人公スペック】（ ）は最終到達点

筋力：B（S）

魔力：A A A +（EX）

気力：A A A -（EX）

耐久：A（SS）

敏捷：B +（S +）

幸運：B（B）

(ランク 高 EX>SSS}E 低)

【保有スキル】

護りの力：EX

龍姫の先天技能。

防御及び治癒系統の魔法は、その習得難度やランクに関わらず全て使用できる。

死者の蘇生すらも可能だが、それにはリスクが伴う。

武術の心得：B

龍姫がゼウスに頼んだ願いの1つ。

古今東西、現実から非現実まで、ありとあらゆる武術を使うことができる。

鍛錬次第でランクは上がっていく。

魔法技術の知識：S

龍姫がゼウスに頼んだ願いの1つ。

『リリなの』世界のものだけでなく、龍姫が知っている『魔法』全てを含む。

龍召喚：A

龍姫がゼウスに頼んだ願いの1つ。

龍姫の知っている『龍』を喚び出す事ができる。

今はリミッターがかかっているが、最終的になくなる予定。

龍姫 「……チートだな」

作者 「だが、残念ながら最強ではない」

龍姫 「確かにそうかもしれないが、破格であることに違いはない」

作者 「だってそういう作品なもの」

龍姫 「これ以外は？」

作者 「また出てきた時に随時紹介していこうと思う」

龍姫 「そうか」

作者 「次回は、いよいよ龍姫が『リリなの』世界に殴り込みをかけます！」

龍姫 「おい！物騒な言い方をするな！」

作者 「というわけで、

次回、第2話『コレ、普通は転生って言わないか！？（仮）』

を、
「

作&龍 「「「よろしく願います（よろしくな）！」「」

第2話 『なあ、コレ普通は転生って言わないか?』 (前書き)

第2話です。すみません。短めですがご容赦ください。

それでは、本編スタート！

第2話 『なあ、コレ普通は転生って言わないか?』

例の如く穴に落とされた俺が次に意識を覚醒させた時、そこは病院の中だった。

「おお、目を開けたぞ」

「まあ、可愛い」

可愛いだつて? 誰が?

「そういえば、まだ名前をつけていなかったな」

「ねえ、あなた。この子、男の子なのよね?」

「そうだが?」

「私にはこの子は将来凄く可愛い女の子のような子に育つと思つものだから——」

誰が女の子だつて? 俺はれっきとした男だぞ!

「……いや、それはどうなんだ?」

「イヤ。これだけは譲れないわ」

「……わかった。それならこの子の名前は龍姫^{たつき}だ。龍のように雄雄しく、しかし優しい子に育つようにな」

「ええ、そうね」

ん？どうして俺は持ち上げられて・・・って、何いつ！？

「おぎゃああああ！！（何じゃこりゃああああ！？）」

病院の窓に映った俺は、何故か赤ん坊の姿をしていた。

「（アー、アー。テスト。聞こえているか？）」

突如、頭の中に直接声が響いてきた。この声は——ゼウスか！？

「（おお、正解だ。どうだ、新たな人生を踏み出した今の気分は？）」

「（ゼウス！お前こうなることがわかって黙ってただろう！）」

「（はて？何の事だか？）」

アイツ・・・散々イジリ倒したのを根に持ってやがったな！

「（それより現状を確認するぞ？今は原作開始9年前。なのは達が生まれた年だ）」

「（……そうか）」

「（で、お前は今両親から新たに名を贈られた。氷護ひもり龍姫たつき。それが今日からお前の名だ）」

「（氷護龍姫……わかった）」

「（おお、そうだ。ずっと見てるのも面倒だから、これから時間の加速を行う。何年後まで行きたい？）」

「（面倒だから時間を跳ばす、っていい加減な……とりあえず5年後にしてくれ）」

「（了解！それじゃ、またな）」

「（あっ）」

そして、本当に5年の月日が『あっ』という間に過ぎた。断じて『あっ』という間』ではない。

「たっちゃん。今日はコレを着てね」

「うん！わかったよ、母さん」

はあ……。表面上は愛想良く、しかし隠れて溜め息を吐く俺。最近になって、母さんがやたらと俺に女装をさせるようになった。似合わないければこんな事にはならなかったんだろうが、今の俺には何故かメチャクチャ似合う。

「（おい、ゼウス！なんでこんな容姿にしたんだ！）」

「（プツ……クククツ……ハハッ……）」

「（……キサマ、いつか必ずクロス……!）」

「（いや、最高だよ龍姫。実に素晴らしい）」

「（人の不幸で楽しむなんて最悪だな。それでも神かよ）」

「（そうだが?）」

そこで全く悪びれないあたりは流石だ。

「（ところで、この時期の原作関係の事は覚えてるか?）」

「（覚えてるよ。なのはがちょうど家で孤立してる時期だろ?）」

「（正解だ。で、お前は どうする?）」

「（もちろん、助けに行くさ。この頃の出来事は、なのはの心に大きな傷を残してたからな）」

そう。なのはが5歳の時、父である士郎さんの入院をきっかけに、なのはは家で孤立していた。これがもとで、彼女は周りに見捨てられないようにと必要以上の無茶をするようになった。そうした無茶の積み重ねが後の事故に繋がるのだから、止めないわけにはいい。

「そうと決まれば行動開始、だな」

確か、なのはは公園にいるんだったよな……

「うつうつう……」

公園に着いた俺は、早速聞こえてきた子供の泣き声の方へと足を開ける。

「あれか……」

しばらく歩くと、しゃがみこんで泣いているなのは姿を見つけた。ずっとこうして一人で泣いてたのか……。その背中は見えていないくらい弱弱しかった。

「こんにちは」

「ふえ？」

なのはがこっちを見る。俺は笑顔で話しかける。

「どうして泣いてるの？」

そのまま隣に座ると、なのははこっちをチラチラと見ながら口を開いた。

「あのね、おとうさんがけがをしちゃって、おかあさんもおねえちゃんもいそがしいの。だから、なのはひとりなの」

「そっか……だったら、僕と遊ぼうよ！あ、僕は氷護龍姫って言うんだけど」

「いいの？」

「もちろんだよ！ところで、君の名前も教えてくれない？」

「あ、うん！なのはは高町なのはなの！」

「なのはちゃん、だね。よし、なら今から僕達は友達だ！」

「友達？」

「そうだよ。お互いの名前を交換したら、その時から友達なんだ」

「わかったなの！なのはとたつきちゃんはお友達なの！」

「．．．．ん？何か致命的な相違が発生したような．．．．気のせいか？」

そのまま2人して走り回ったりブランコに乗ったりして遊んだ。夕方近くになって、なのはがヘトヘトになったところでお開きという事になり、なのはを家まで送ることにした。

「ただいまー！」

「おかえりなさい、なのは。．．．．そっちの可愛い子は誰かしら？」

「なのはのお友達の龍姫ちゃんなの！」

「あら、お友達だったのね。こんばんは、なのはの母の高町桃子です」

うわゝ、生桃子さんだよ……ほんとに若いな。っと、呆ける場合じゃなかった。

「えっと、今日なのはちゃんと友達になった氷護龍姫です」

「龍姫ちゃん、か。可愛い《女の子》ね」

はっ！？俺が女の子だって！？

「ちょ、ちょっと待ってください！僕は《男》です！」

「「え？」」

あれ？どうしてなのはまで驚いてるんだ？……まさか！？

「なのはちゃん、もしかして僕の事《女の子》だと思ってた？」

「う、うん。だってこんな可愛いお洋服着てるし……」

洋服？

そこで、俺は初めて自分の服に目を落とした。

……やってもうたああっ！？

そう。今俺が着ているのは、母さんに着せられた女の子用の服。俺はその事を今の今まで忘れていたのだ。

「あらあら。ごめんなさいね。私もてっきり《女の子》だと……」

あの、桃子さん？何故か俺を見る目が獲物を狙うソレなんですが。
.....

「あ、えつと、それでは今日はこれで失礼します！なのはちゃん、明日も公園で遊ぼうね！」

三十六計逃げるに如かず。このままここには何か危険！咄嗟にそう判断した俺は、明日もなのはと遊ぶ約束をして脱兎の如く高町家を後にした。

「あ、う、うん。バイバイ龍姫ちゃん」

「あらあら、元気のいい子ね。……残念、せっかくいいモデルが見つかったのに……」

聞こえない、聞こえないぞ！扉を閉める間際に聞こえた桃子さんの呟きは聞こえなかったぞ！

第2話 『なあ、コレ普通は転生って言わないか?』（後書き）

あとがき

作者 「というわけで、高町なのはとの邂逅でした」

龍姫 「……まさかのミスだ……」

作者 「いや、流石だったな」

龍姫 「マズいだろ！まさか初対面で《女》と間違われるなんて……」

作者 「大丈夫だ！ちゃんとリカバリーしてやるって」

龍姫 「本当か!？」

作者 「まあ任せておけて!」

龍姫 「頼む、本当に頼む……」

作者 「……必死だな」

龍姫 「……これはコンプレックスになりそうだ……」

作者 「（い、言えない！これからもネタにし続けるなんて言えない！）」

龍姫 「急に黙り込んでどうした？」

作者 「い、いや何でもない」

龍姫 「そうか？」

作者 「ああ。さて、それじゃ次回予告いくぞ！

次回、第3話『新たな仲間登場！（仮）』

を、
」

作&龍 「「お楽しみに」（楽しみに待っててくれ）！」「

第3話 『新たな仲間、登場!』

あの初邂逅以来、俺は毎日なのはと一緒に遊んでいた。おかげで彼女は俺にすっかり懐いている。

「たつくん、次はあれなの!」

「ブランコだね?」

「うん!」

なのはは俺が男であるときちゃんと認識してくれたようで、最初の『龍姫ちゃん』から『たつくん』に呼び方を変えてくれた。

しかしなのはとは逆に、あれ以来桃子さんは事ある毎に俺に女装を勧めてくるようになったんだが、何とかならないものか……相変わらず『龍姫ちゃん』と呼んでくるし。

そういえばこの前なのはに誘われて、母さんと喫茶『翠屋』にお邪魔した時は本当に大変だった。母さんと桃子さんが俺の女装について意気投合してしまい、その後数時間に渡って着せ替え人形にされたのだ。

……俺の消してしまいたい黒歴史No.1である。(現時点で)

ちなみに、喫茶『翠屋』というのは高町士郎・桃子夫妻の営む喫茶店である。料理にケーキ、コーヒーに紅茶、どれも美味しくてかなり人気がある。

まあ、現在店主の高町士郎氏は入院中とのことだったが。

そんなこんなで2週間が経とうとしていた頃に、『ソレ』は突然やって来た。

——ピンポーン

「はい」

母さんが買い物に行き、家で留守番をしていたらインターホンが鳴った。

出て行くと、ドアの先には見知らぬ女性が立っていた。……誰だ？

「貴方が——」

俺が首を傾げていると、突然女性が口を開いた。

「——貴方が、氷護龍姫さまですか？」

「え？」

……何故、目の前の女性は俺の名前を知っています？ますます俺の頭は混乱した。

「貴方が、氷護龍姫さまですか？」

何も答えない俺に対して、女性が再び問い掛けてくる。

「は、はい。確かに僕が氷護龍姫ですけど……」

心なしか語気の強くなった女性に、慌てて答える俺。

「そうですか……」

すると女性は穏やかな微笑を浮かべて、

「はじめまして。私はお父様から貴方のサポートを任せました、アテナです」

そんな事をのたまった。

「は？……はああああ！？」

俺はただただ驚きの声を上げるしかなかった……

しばらくして復活した俺は、現在アテナとリビングで向き合っていた。

「……つまり、アテナは俺の『使い魔的な存在が欲しい』という願いに因ってここにいてるって事か？」

「ええ。そうね」

アテナが俺の言葉に頷く。

「……それにしてもゼウスのヤツ、そんな理由で自分の娘を寄越してよかったのか？大切な娘なんじゃないか？」

「ああ、その点はご心配なく。むしろ私から志願させてもらったから」

「……やっぱりアテナも心が読めるんだな」

「ええ。一応私も神様だからね。まあ今は頭に元、が付くけど」

「そうなのか？」

「この世界に来る時に、一時的に神の座から外されたの」

「……って事は、今のアテナは人間なのか？」

「完全にそうとも言えないわ。身体能力や魔力なんかは神であった頃と同じなもの」

「へえ……やっぱりチートなのか？」

「龍姫ほどじゃないわよ」

「……そうか。で、自分から志願したって言ってたな。どういう事だ？」

「そうね。私が龍姫に興味を惹かれたから、よ。お父様は泣いて引き止めたけど、無視してきたわ」

．．．ゼウス、哀れだな。もちろん同情なんてしないが。

「そういう事ならこれからよろしくな、アテナ」

そう言つて、手を差し出す。

「こつちこそよろしく、龍姫」

その手をアテナが握ってくる。お互い顔は笑顔だ。

「それから、父さんと母さんにも紹介しないとな。——っと、こんな感じで話を合わせてくれ」

「わかったわ。……そういえば、コレを」

そう言つて、今度はアテナが手を差し出してきた。ただし、その手の上には蒼い宝石のついた腕輪が載っていた。

「……何だコレ？」

「龍姫のデバイスよ。インテリジェント、だっけ？そっちの方が完成したから一緒に持ってきたの」

「ありがとう。……で、ユニゾンデバイスの方は？」

「まだしばらくかかるって」

む、それは残念。

「名前から何から全て白紙の状態だから、まずは登録をしてね」

「わかった。今からだと途中で母さんが帰ってくると思うから、明日の早朝にするよ」

「そう」

『たっちゃくん、ただいま〜！』

と、噂をすれば何とやら。母さんが帰ってきたようだ。

アテナの事は、外国から来ていて以前道で倒れているところを助け、もし行く当てがなくなったら家を訪ねるように言っていたのだと説明した。

そんなアテナの境遇を聞いた両親は快く我が家への滞在を許可してくれた。結果として2人を騙した事は申し訳なく思うが、本当の事を話すわけにもいかなから仕方ない。もちろん、いつかは打ち明けるつもりだが。

ちなみに、アテナには後で日本国籍を取ってもらった。もちろん非合法な方法で。

そして翌日の早朝。

俺はデバイスの起動試験をする為、いつもなのはと遊んでいる公園へと来ていた。もちろんアテナ同伴だ。

「それじゃ龍姫。よろしくね」

「ああ。——よし」

一度深呼吸して気合を入れ、起動を始める。

「マスター認証、氷護龍姫。術式はミッド主体でベル力混合のハイブリッド」

『マスター氷護龍姫、認証。術式、認証』

「デバイスに個体名称を登録。名称は『ハイペリオン』」

『名称登録、完了。エラーはありません』

「いくぞ！『ハイペリオン』、セットアップ！」

『スタンバイ・レディ』

一瞬光に包まれた後、俺はバリアジャケットを纏っていた。

上は蒼の長袖シャツで、下は黒のジーンズ。胸や肩、腰、膝、足には銀色の金属パーツがついている。

また、両腕には手の甲から肘までを覆うように籠手が装着されていて、背中には大きな盾を背負っている。

「ん？杖や剣みたいな武器の類が何もないな……」

「（説明しよう！）」

「おわっ！？」

突然頭の中に声が響いた。

「お前、ゼウスか？」

「（よくわかったな。さて、今回はお前の異常性について説明する為に出てきたんだが……）」

いや、こんな事をするのはお前くらいだろ……っていうか、

「俺の異常性、だって？」

「（ああ、そうだ。単刀直入にぶっちゃけると、お前はほとんどの攻撃魔法に適正がない）」

「……はあ！？」

驚きの事実発覚。どういう事だ？

「（そのままの意味だ。何故かお前はほとんどの攻撃魔法が使えない身体なんだよ。唯一適正があったのは集束魔法だけだな）」

集束魔法？……ああ。なのはの十八番、SLBみたいなヤツの事か。

「（そうだ。ちなみに、お前の魔力集束能力はなのはのソレを遥かに上回っている）」

「へえ。それはなかなか……」

「（だが、お前はソレしか攻撃魔法を持ってないという事だ）」

「ちょっと待て。そうだとっても、杖や剣みたいな武器はあっていいだろ？」

「（そこは俺の趣味だ。男は拳1つで戦ってこそ、だからな）」

「お前の趣味に俺を付き合わせるな！」

「なんてこった！俺はこの最高神^{バカ}のせいでこんな目に遭ってるっていうのか！？」

「（だが、その分お前は『護る』事に関しては非常に高い適性を持つてるようだぞ？）」

「そうなのか？」

「（ああ。お前は防御や治癒系の魔法ならその習得難度やランクに関係なく、全て使いこなす事ができる）」

「……それは凄いな」

「（だが、これも異常な才能ではある。前の世界での因果が関係しているようだ……）」

「うつ……。それは……」

あまり他人に触れて欲しくない過去なんだが……

「（……まあいい。詮索するのは止めておいてやろっ）」

「……すまん」

「（俺からはそんなところだ。後はアテナに聞け）」

「わかった」

「（せいぜい俺を楽しませてくれよ）」

「それは知らん」

そうして、ゼウスは俺との会話を切った。

「……ったく、アイツはいつも神出鬼没だから困る」

「ふふっ。でも、あれでお父様は龍姫の事をとても気に入ってるのよ」

「そうなのか？」

「ええ」

「……まあいいや。で、他にもあるのか？」

「そうね……とりあえず、魔力変換資質があるわ。属性は流水と凍

「結ね」

「へえ。凍結は珍しいって話を聞いた事があるけど、流水はどうなんだ？」

「かなり珍しいみたいよ」

「そっか」

流水と凍結の変換気質か。後でちよつと試してみるか。

「それから龍姫が背負ってる盾だけど、それ『アイギス』だから」
「は？」

今、アテナは何て言った？

「だから、その盾は私が持ってた『アイギス』なのよ」

「マジで!？」

「より正確に言うなら、『アイギス』をベースに再設計した『アイギス? (セカンド)』ね」

「……………いいのか？」

思わず聞き返してしまう俺。

「ええ。私からのプレゼントよ」

「ありがとう」

俺は頭を下げた。『アイギス』はアテナにとって大事なものだったはず。それを、俺なんかに譲ってくれたのが嬉しかった。

「頭を上げて、龍姫。それじゃ、『アイギス?』について説明するわね」

「ああ。頼む」

「『アイギス?』の能力は『自動防衛^{オートガード}』よ。これにより、余程の事が無い限りは龍姫に不意打ちや死角からの攻撃は通用しなくなるわ」

「それはまた……かなりのチート性能だな」

「当然よ。なんせ私が持つてる最強の盾なんだから」

「それもそうだな」

『マスター』

と、そこで聞き慣れない機械音声が聞こえてきた。

「ん? ハイペリオンか?」

『はい。これからよろしくお願いします。マスター』

「こつちこそよろしくな。それと、俺の事は名前で呼んでくれ」

『それは何故ですか?』

「今日から俺とお前は相棒^{バディ}なんだ。相棒なら、互いを名前で呼び合うのは当然だろ？」

『……よくわかりませんが、了解しました。それでは改めてよろしくお願いします、タツキ』

「よろしく、ハイペリオン。あと、できれば敬語も止めてくれな」

『善処します』

「言った傍から……って、いきなりは無理か」

『すみません』

「いや、いいって。それよりちょっと色々試してみたいから、結界を張ってくれないか？」

『了解。——展開完了』

「サンキュー」

そうして、俺はそのまま両親が起きる時間ギリギリまで魔法の鍛錬をした。

第3話 『新たな仲間、登場!』（後書き）

あとがき

作者 「今回のあとがきは、新キャラ&デバイスの紹介をしたいと思います」

龍姫 「そうだな。それじゃ、まずはアテナから」

アテナ

性別：女

身長：158センチ

体重：禁則事項です♪（本人談）

容姿：腰まで伸ばした金髪に、龍姫と同じ蒼い瞳。

外見年齢は18歳程度。出るところは出てるナイスバディ。

性格：穏やかで優しいお姉さんの性格。

しかし、実は重度の戦闘^{バトルマニア}狂である。

【スペック】

筋力：A A +

魔力：S S

気力：S S

耐久：A +

敏捷：A A +

幸運：A

【保有スキル】

戦略の女神：S

アテナの戦略の女神としての力。あらゆる戦闘技能に通じている。

知恵の女神：S

アテナの知恵の女神としての力。様々な分野の知識を持っている。

作者 「こんな感じかな」

龍姫 「なるほど」

作者 「んで、次はデバイスだな」

インテリジェントデバイス『ハイペリオン』

性格：非常に真面目。しかし、今後変化していく予定。

耐久性：龍姫の最大出力にも余裕で耐える。
フルパワー

待機状態：中央に大きな蒼い宝石のついた腕輪。

セットアップ時：B Jの形状は本文中で書いた通り。

ゼウスによって作られた、龍姫専用のインテリジェントデバイス。まさにチートキャラの為のデバイスであると言える。常に龍姫の事を第一に考えていて、龍姫の良き相棒であろうと色々模索中。

龍姫 「これから共に戦っていく俺の相棒だな」

作者 「物語の進行と共にパワーアップしていく予定だ」

龍姫 「……この上さらに何かやろうというのか？」

作者 「当然！」

龍姫 「まあ、程々にしとけよ」

作者 「それでは次回予告、いってみよー！

次回、第4話『そして本格介入へ……（仮）』

を、
」

龍姫 「乞うご期待、ってな！」

第4話 『そして本格介入へ……』

アテナがこちらにやってきてから、2週間が経過した現在。

「たつくん、アテナお姉ちゃん！次は鬼ごっこをするの！」

「ようし、負けないぞ！」

「いいわよ。でも2人とも、怪我はしないでね」

「「はい！」」

なのはにもアテナを紹介して、今は3人で遊ぶのがすっかり定着している。

「（そういえば龍姫、そろそろ動き始めるのよね？）」

「（ああ。今日からアクションを起こそうと思ってる）」

鬼ごっこをしながら、俺とアテナは念話で会話をする。

そしてその日の帰り道、

「ねえ、なのはちゃん」

「なあに、たつくん」

「なのはちゃんのお父さんのお見舞いに行ってみない？」

「ふえ？なんで？」

「母さんが言っただけだね、1人していると怪我って治りにくいんだって。だから、なのはちゃんがお見舞いに行って元気を分けてあげたらどうかと思って思ったんだ」

「お父さんに元気を……うん！行くの！たっくんも来てくれる？」

「もちろんだよ」

そうして明日一緒にお見舞いに行く事を約束して指切りをし、なのはを家まで送ってから帰宅した。

同日、深夜。俺はこっそり家を抜け出して、土郎さんの病室を訪れていた。

面会時間はとうに過ぎているので、飛行魔法を使って窓から侵入させてもらった。

「こんばんは」

返事はない。やっぱり寝てるか。

「とりあえず起こさないとな……すいませーん。高町土郎さーん。起きてくださーい」

「うっ、うっ……」

しばらく呼び掛けていると、呻き声が聞こえて土郎さんが目を開けた。

「……君は誰だい？」

「ええっと、簡潔に説明すると、高町なのはちゃんの友達です」

「なのはの友達がどうしてこんな時間にここに？」

「それはですね……」

とりあえず、なのはが明日俺と一緒にここにお見舞いに来ることを告げた。

「そうか……で、何故君は先に来たのかな？」

「貴方になのはちゃんが元気になるきっかけになって欲しいんです」

「……それはどういう事だい？」

「実は……」

俺はさらに、喫茶店が忙しくなった為になのはが1人になってしまっている事、現在はほぼ毎日俺がなのはと遊んでいる事を説明した。

「なるほどね……だが、恭也はどうしているんだ？」

「以前見かけた時は、何だか1人で剣呑な空気を撒き散らしていましたよ」

あの様子では、とてもじゃないがなのは声なんて掛けられないだろう。まったく、妹をそっちのけとは兄失格もいいところだ。

「ありがとう。だいたいわかったよ。で、僕はどうすればいいのかな？」

「今から貴方の怪我を治療します」

俺は腕につけているハイペリオンを掲げると、

「『フルケア』」

そう口にした。途端に土郎さんの身体が淡い光に包まれ、やがて光が収まる。

「これは……何だか身体が軽くなったみたいけど……」

「貴方の怪我を9割方治療しました。流石に全快させると医者に怪しまれると思うので」

「君のその力は一体……」

「すみません。今は秘密にさせてください。いつか必ずお話しますので」

「わかった。それなら今は聞かないよ。……だが、君はどうして僕にここまでしてくれるのかな？」

「そうですね……まあ理由を挙げるならなのはちゃんの為、ですよ」

「なのなの？」

「ええ。今なのはちゃんは孤独という闇の中にいます。だから貴方がなのはちゃんと会う事で元気になり、なのはちゃんが家族の力になっている事を教えてあげたいんです」

「そうか……なのはいいい友達を持ったみたいだね」

士郎さんが優しい目をして呟く。

「それでは僕はこれで失礼します」

「色々すまなかったね。ありがとう」

「どういたしまして。あ、明日は初対面という事でお願ひしますね」

「ああ、わかったよ。それじゃ、気をつけて帰ってくれ」

「はい」

そうして、俺は病室を後にした。

「……これでなのはが立ち直るのは早くなるはずだ。
となると、次の問題は「PT事件」、そして「闇の書事件」だな。

とりあえず、これからやる事を整理してみるか。

- ・魔法戦闘技術の向上
- ・八神はやてとの接触

- ・アリシアの蘇生とプレシアの治療
- ・10年後を見据えた準備

「こうやって見るとかなり大変だよな」

でも、諦めるわけにはいかない。必ずハッピーエンドで終わらせてみせる！

翌日、俺はなのはと一緒に土郎さんのお見舞いに行った。なのはは頑張って明るく振舞い、土郎さんもそんなのはに終始笑顔で接していた。

その帰り道。

「なのはちゃん、お父さん元気そうだったね」

「うん！よかったの！」

「きつとなのはちゃんのおかげだね」

「ふえ！？そ、そんなことないの！」

「うっん。なのはちゃんのおかげだと思うよ。自信持って」

「うっ、うん。……たつくん、ありがとなの」

「どういたしまして」

俺となのはは、2人とも笑顔で帰っていった。

第4話 『そして本格介入へ……』 (後書き)

あとがき

作者 「相変わらず短くてすいません」

龍姫 「もう少し何とかならないのか？」

作者 「2作品を同時進行してる状態では、これが自分の限界です」

龍姫 「はぁ……だつたらやらなきゃいいだろ……」

作者 「それは俺が許せないから頑張る！」

龍姫 「そうかい」

作者 「ちなみに、感想お待ちしてます！」

龍姫 「どしどし待ってるぞ」

作者 「それでは、次回予告！

次回、第5話『動き出した歯車（仮）』

を、

龍姫 「よろしくな！」

第5話 『動き出した歯車』（前書き）

PV2、000、ユニーク500を突破しました！

これも読者の皆様方のおかげです！

これからもますます頑張っていきますので、応援よろしくお願いします！

第5話 『動き出した歯車』

あれから3年の歳月が過ぎ、今は桜舞い散る4月。
今年で俺は私立聖祥大附属小学校の3年生だ。

「たつくん、おはよー!」

「おはよう、なのはちゃん」

「龍姫、おはよう」

「おはよう、龍姫君」

「おはよう、アリサ、すずか」

どういうわけか1年生から、この仲良し3人組とは同じクラスである。

明らかに誰かの作威的なものを感じるが、まあ犯人は十中八九アイツだろう。

「今年も皆同じクラスみたいだよ」

「え! たつくん、それ本当!？」

「うん」

「そっか。よかったね」

「そうね」

そのまま他愛もない会話をしながら、教室へと向かった。
表面上は笑顔で3人とお喋りに興じているが、頭の中では別の事を考えていた。

．．．いよいよ始まるんだ。この世界での俺の戦いが。

ついに時は満ちた。

もうじき「PT事件」が始まる。

3年前士郎さんを見舞ったあの日から、俺はひたすら鍛錬を積んできた。師匠はもちろんアテナだ。

アテナは俺にあらゆる武術・魔法の使い方、戦術・戦略の起用法を教えてくれた。

俺もそれらを必死で吸収し、己の力としていった。準備は万端だ。

*

*

*

「たつくーん！お昼一緒に食べよう！」

「いいよ」

そういえば、相変わらずなのは俺にべつたりである。

周囲の男子達からの嫉妬と殺意のこもった視線にも、もうすっかり慣れたものだ。

「まったく、ホントなのはは龍姫にべったりよね。龍姫も龍姫でなのはには大甘だし」

「でも、見てて微笑ましいと思うよ」

そんな俺達にアリサは呆れ、すずかは柔らかい笑みを浮かべる。

「アリサ、すずか。2人も来るでしょ？」

「当然よ！」

「うん。いいかな？」

「もちろんだよ。皆で食べた方が楽しいしね」

「たつくーん！アリサちゃん達も！早く行こうよー！」

なのはが教室の入り口から俺達を呼ぶ。

「早くしないとなのはがヘソを曲げそうだし、行こうか」

「ええ」

「うん」

そんな穏やかな日常を送りつつ、時は過ぎていく。

*

*

*

そして4月も終わろうかという頃になって、『ソレ』は来た。

——ピピッ

『何者かの次元転移反応を感知しました』

「来たか」

「そのようね」

俺が海鳴全域に張り巡らせた『網』に、『アイツ』が引つ掛かったようだ。

「で、龍姫はどうするの？」

「とりあえず、なのはやフェイトとは別にジュエルシードを回収する」

「あら、どうして？」

「アルハザードへ行くというプレシアの野望を潰しつつ、大団円をハッピーエンド迎える為だよ」

「なるほどね」

「ああ。なんせ3年前から練ってきた計画だからな」

「そうね」

「というわけで、原作で重要なイベントに関わらなかったヤツをさっさと回収しに行こう」

「ええ」

『了解しました』

そうして、俺はその日のうちに2つのジュエルシードを確保した。

その後なのはがユーノと出会って魔法に目覚めたり、なのはとフェイトの初邂逅があったりした。

俺はそれらのイベントを気配遮断をして近くから見ていた。

．．．．それにしても、なのはは初めての魔法行使でいきなり長距離砲撃を見せてくれたのだから驚きだ。才能って恐ろしい。

フェイトも、やはりどこか悲しみを帯びた目をしていた。必ず、必ず助けてやるからな。

そして、ある日の翠屋。

「温泉旅行？」

「そうなの！今度の週末に行こうって話があるんだけど、たっくん

も来ない？」

これは……フェイトとのエンカウントフラグか。

「いいの？」

「もちろんなの！」

「ちなみに参加者はアタシと高町家、月村家の皆よ」

「へえ」。結構な大人数だね」

「で、どうかな？龍姫君も一緒に行かない？」

「そうだね。母さん達に聞いてみるよ」

まあ、多分あっさり許可してくれるだろう。

「やったー、なの！」

「ははっ。なのはちゃんが喜んでくれるなら、頑張って説得しなきゃね」

「あ、うう……／／／／」

何だ？なのはが真っ赤になって俯いてしまった。……ハッ！まさかフラグか！？

「氷護、なのはに手を出したら……」

「うわあっ!?!」

いつの間にか俺の後ろに恭也シスコンがいた。

「おい。わかってるんだろうな……」

「あはは……イヤだなあ、恭也さん。そんな事するはずがないでしよう?」

俺は笑って誤魔化する。

「……フンッ。ならいい」

そうしてバカ兄シスコンは去っていった。

まあ戦やり合っても負けはしないが、そもそも戦うのが面倒だしな。

しかしフェイトとの接触か……どうするかな……

第5話 『動き出した歯車』（後書き）

あとがき

龍姫 「相変わらず短いな」

作者 「すいません」

龍姫 「しかも展開が急すぎるだろ」

作者 「はっ。おっしゃる通りで」

龍姫 「……まあいい。で、次回は？」

作者 「温泉に行く」

龍姫 「フェイトとの接触だな」

作者 「多分あっさりと終わると思う」

龍姫 「そうか……ってそれでいいのか？」

作者 「初っ端からそんなに色々絡んでもマズいだろ」

龍姫 「まあ確かに」

作者 「そういうことだ」

龍姫 「よし。それじゃ、次回予告だな。」

次回、第6話『人間、第一印象が大事（仮）』

を、
」

作者 「お楽しみに〜！」

第6話 『温泉……そこは古来よりイベントの宝庫と言われている』

週末になり、温泉へとやってきた高町家＋月村家＋アリサ＋俺＋アテナ。

何故アテナが同行しているか説明しておこう。

あの日家に帰ってアテナに声を掛けると「温泉！？行きたい！」と言ったので、併せて両親に頼んでみたら予想通りあっさりOKが出た。

なのは達にも確認したら「もちろんOK」と言ってくれたので決定了、というわけだ。

宿に到着して、さぁお風呂に入ろうという話になった時に事件は起きた。

「たつくん！たつくんも一緒に入ろう！」

「なのはちゃん？僕は男だって知ってるよね？」

「でも11歳までならこっちに入っても大丈夫なの！」

確かに女湯の入り口には『12歳未満の男のお子様はご入浴になれます』と書いてあるが――

「いやいやいや！そういう問題じゃないんだって！アリサとずずかは僕と一緒に嫌でしょ？」

「あ、当たり前で――」

「私は別にいいよ」

あれ？ずずかサン？

「——ってずずか！？アンタ何言ってるのよ！」

「だって龍姫君って女の子みたいだし」

「いや、だからずずか？僕は男だって言ってるじゃないか」

「「えー」」

「『えー』、じゃない！っていつかずずかはこの状況を楽しんでるだけだよね！？」

「そんな事ないよ？」

嘘だ！そんな凄くイイ笑顔を浮かべているのに！
こうなったら………

「僕の代わりにコイツを連れていけばいいよ！」

「きゅ！？」

男湯に逃げ込もうとしていた淫獣ユウノを引っ掴んでなのはに投げた。

「大切なペットなんでしょ？一緒に入れてあげなよ」

「むー……しょうがないの。ユーノくんが我慢するの」

「キューキュー」

ユ一ノ。悪いが俺の為に生け贄になってくれ。

「それじゃ、後でね!」

そのまま俺は男湯に駆け込んでいった。

ところ変わって、ここは男湯・露天風呂。

……ええっと、確かこの後はなのは達がアルフと会ったよな。で、夜になったらいよいよフェイトとご対面か。

「龍姫君」

この後の予定について確認していたら、横から声を掛けられた。

「はい?……って、士郎さんでしたか」

「何か考え事かな?何やら難しい顔をしていたけど」

「あはは……まあそんなところです」

「『あの時』も思っただけど、君はとても8歳とは思えないな」

う……流石は士郎さん。鋭いな……。

「よく父さんにも言われます。『お前は子供らしくない』って」

「そうかい。まあアレについては君を信じて、話してくれるのを待ってるよ」

「ええ。お願いします。それにしてもいいお湯ですね」

「ああ。酒が欲しいね」

「いつかお付き合いさせてもらいますよ」

「ははは。楽しみにしているよ」

その後も温泉を満喫し、土郎さんを残して先に上がってみると、なのは達は既に上がっているようだった。

「はー、いいお湯だったわー」

と、そんな声と共に女湯から出てきたのは――

「なんだ。アテナか」

「あら龍姫。貴方も今出たところ？」

「ああ。……どうやら満喫したみたいだな」

「ええ。露天風呂、だっけ？あれ最高ね！」

「まあ楽しめたなら良かった」

そうして2人で話しながら廊下を歩いていると、前方にアルフに絡まれてるのは達を見つけた。

「すみません。連れが何かしましたか？」

「まったく、いい大人が子供相手に何をしているんですか？」

「なんだいアンタらは？悪いけど邪魔しないでくれ」

俺とアテナはアルフとなのは達との間に入る。そこから俺は一步前に出ると、

「なのはに手を出したら許さねえからな、この酔っ払いが」

多少殺気を込めて睨みつけた。

「へ？あ、ええっと、ゴメン、アタシの勘違いだったみたいだよ。悪かったね」

そう言つて、アルフは退場していった。

「なのはちゃん、大丈夫？」

完全にアルフが視界から消えてから、俺はなのはの方に振り向いた。

「……………」

「なのはちゃん？」

「……………おかしい。何故無言なんだろう？」

「……………」

「なのは？」

「は、ひゃ、ひゃい！」

あ、やっと返事したよ。っていうか、声裏返ってるぞ？顔も真っ赤だし。

「大丈夫？」

「あ、だ、大丈夫だよたっくん」

「そっか。よかった」

そう言つて笑いかけると、サッと俺から顔をそむけるのは。．．．

．神様、俺何かしましたか？

まあ、そんな感じでアルフとの接触は終了した。

そして夜。

現在俺の目の前では、なのはとフェイトによる激しい空戦が繰り広げられている。

とりあえず危なくなったら介入するという事で、今はただ2人を見守っている。

「ディバイ——ン、バスターっつ！」

おっ、なのはがディバインバスターを撃った。間近で見るとやつぱスゲーな。流石は魔『砲』少女。

「くう……」

流石のフェイトもアレはヤバイと思ったんだろう。防御ではなく回避を選んだ。

「バルディツシュ」

『Yes , sir』

発射後の僅かな隙を突いてフェイトが攻撃に転じた。あ、あれはちよっとヤバそうだ。仕方ない、行くか！

「ハイペリオン！」

『スタンバイ・レディ』

素早くBJを纏うと、俺はシールドでフェイトの攻撃を防御した。

「えっ!？」

「残念だが、そこまでだ」

「……あなたは？」

「ただの通りすがりだよ。……今日のところは諦めて帰ってくれないか？」

一応、即席で作ったマスク（ver・ラウ・ル・ルーゼ）をしているので俺の正体はわからないだろう。

さて、これで大人しく帰ってくればいいんだがな。

「バルディッシュ」

『フォトンランサー』

「やっぱダメか……ハイペリオン！」

「ファイヤー！」

『リフレクション』

俺のオリジナル魔法『リフレクション』。名前の通り、相手が撃つ魔法（ただし、俺の魔力ランク以下のものに限る）を反射する魔法だ。今の俺のランクは推定S+（アテネ談）なので、かのSLBすら反射できる。

「なっ!？」

『プロテクション』

自分の撃つ魔法がそのまま返ってきた事に驚くフェイト。バルディッシュは咄嗟にシールドを展開した。

「わかったか？お前の攻撃は俺には通用しないんだよ」

「くっ……帰るよ、アルフ……」

「で、でもジュエルシールドは……?」

この場を離脱しようとする主人に戸惑うアルフ。
フェイト

「これは俺が預かっておく」

「貴方もジュエルシードを!？」

ユーノが叫ぶ。

「……いい。帰ろう……」

「待って!」

「……できれば、私達の前にはもう現れないで。もしまた会ったら、今度は止められないかもしれない……」

「名前……あなたの名前は？」

「……フェイト。フェイト・テストロッサ」

「……あたしは」

行った、な……さて俺も帰るか。そうして俺もこの場を立ち去ろうとすると、

「あ、あの!さっきはありがとうございました!」

なのはが俺に向かって頭を下げてきた。……今回、俺は勝手に乱入しただけなんだが。……まあいいか。

「気にするな」

「あの……ジュエルシードは……」

「悪いが、これは渡せないな」

「そんなっ!」

「安心してくれ。俺は決して悪事に使おうというわけじゃない。ただ『預かる』だけだ」

「それは危険なものなんです!どうか僕達に渡してください!」

ユーノが必死な様子で懇願してくる。

「危険だと言うなら、尚更渡すわけにはいかない。……話はここまです。じゃあな」

「あ、ま、待って!」

なのはが静止を呼びかけてくるが、無視して飛び去る。

俺が部屋に戻り、しばらくするとなのはが帰ってきた。

「なのはちゃん、どこか行ってたの?」

「ふえ!? あ、たつくん……うん。眠れなかったから、ちよつと外を散歩してきたの!」

「そっか」

それ以上追究する事はせず、俺は布団に入ろうとした。しかし、

「あ、あのねたつくん！」

突然なのはに呼び止められた。若干なのは表情が曇っている。

「どうしたの？」

「あのね……今日だけ、一緒に寝て欲しいの……」

さっきの事が余程ショックだったんだろう。仕方ないな…………

「うん。いいよ」

俺がそう答えると、途端に笑顔になるのは…………ヤバイ。
その笑顔は反則だろ…………

「ありがとう、たつくん」

そのまま俺の布団に入ってきて、俺の寝巻きをキュッと握ってきた。

「…………何かあったの？」

「ううん…………何でもないの」

「そっか」

「うん」

「それじゃ、おやすみ」

「おやすみな」

そうして俺となのはは眠りについた。

翌朝。

「何やってんのよアンタ達ーっ！」

アリサの叫び声で目が覚めた。

「……なんだアリサか。起こすならもうちょっと静かに——」

「なんだアリサか、じゃなーいっ！何でアンタはなのはと一緒に寝てるのよっ！」

「へ？……あ」

言われて隣を見ると、そこには幸せそうに眠るなのはの姿が。

「にやはは……たっくん……」

しかもしまりのない笑顔を浮かべて何やら寝言を呟いている。

「なのはも起きなさい！」

スパアーン！

「い、痛いなのーっ！」

アリスがなのはの頭をスリッパで叩いた。その痛みでなのはも目を覚ます。

「まったくアンタ達は……今日という今日は覚悟してもらわよ……」

怒り心頭な様子のアリス。

「え？何？何でアリスちゃんが怒ってるの？」

なのははまだ状況がわかっていないらしい。……そ、そうだ！こんな時すずかなら俺達を助けてくれるはず――

「フフフツ。まったく龍姫君もなのはちゃんも……ナニヲシテルノカナ？」

……おかしい。何故かもう1人般若がいるんだが……

「ま、待って！2人とも落ち着いて――」

「「問答無用ーっ！」」

「ギャーっ！」

結局大人組が来るまで、アリスとすずかから延々お説教おしおきされた俺と

な
の
は
だ
っ
た
。

第6話 『温泉……そこは古来よりイベントの宝庫と言われている』（後書き）

あとがき

作者 「さて、フェイト嬢との初接触は終了したわけだが……」

龍姫 「おい作者っ！何であんなイベントを起こしたっ！」

作者 「何故か龍姫がお怒りモード」

龍姫 「当たり前だ！」

作者 「いいじゃん別に。むしろ役得役得♪」

龍姫 「うるさい黙れ」

作者 「だが断る」

龍姫 「こんな時までネタに走るな！」

作者 「だが断る」

龍姫 「（イラッ）」

作者 「では、次回予告！

次回、第7話『些細なすれ違いと、ついに現れたKY（仮）』

を——」

龍姫 「お前はここで消えろー!!」

ドカツ!バキッ!グシャ!

作者 「ギャァー!……よ、よろしくお願いしま……ガクッ」

第7話 『些細なすれ違いと、ついに現れたKY』

温泉でのフェイトとの初邂逅から数日が経過したある日、なのはとアリサがけんかをした。

理由は原作通り、何やら悩んでいる様子のなのはを心配して声を掛けたアリサをなのはがひたすら「ごめん」の一点張りで退けたのだ。なのはは事情が事情だけに話せないのもわかるし、アリサはアリサで妙なところで意地っ張りだから、2人の衝突は仕方なかったのかもしれない。

そして、その日の帰り道。

バイオリンの稽古があるというアリサ、ずずかと別れて今はなのはと2人だ。

「……………」

「なのはちゃん、いつまで落ち込んでるの？」

「……………」

「本当に困ってる事があるなら相談してよ。僕達友達でしょ？」

「うん…………でも、ごめんなさい」

「…………どうしても言えない事、なんだね？」

「…………うん」

「そっか。でも、なのはちゃんって昔からそうだったよね。一度自

分で決めたらとことん1人で悩んでさ」

「……………」

「言えない事なら無理に話さなくてもいい。でもね、いつでもなのはちゃんの事を考えて心配してくれる人がいるって事は忘れないで欲しいな」

「……うん。ありがとう、たっくん」

「どういたしまして」

これでなのはは一応落ち着いたか？

アリサの方はさすが何とかがしてくるだろうから、これで少しでも早く2人のすれ違いが解消すればいいんだが……………

その日の夜はこれまた原作通り、フェイトが街中でジュエルシールドを強制発動させる事件が起きた。

そうして発動したジュエルシールドをなのはとフェイトが同時に魔力砲撃で封印。

しかし封印されたそれをめぐってバトルを開始して、今に至っている。

今回なのはは、大威力の代わりにチャージに時間のかかるディバインバスターの欠点を補う「ディバインシューター」と、フェイトの高速機動に対抗した「フラッシュムーブ」を駆使して、なんとフェイトと互角の戦闘を繰り広げていた。

以前戦った時より数段レベルアップしているなのはに、流石のフェ

イトも若干苦戦している。

「フェイトちゃん！」

と、一触即発の空気の中でなのはがフェイトに呼びかけた。そして中断される戦闘。

「言葉だけじゃ何も変わらないって言うてたけど、話さないと、言葉にしないと伝わらない事もきつとあるよ！」

そう言つて、自分がジュエルシードを集めている理由を話すのは。

「私は——」

それにフェイトも答えようとするが、

「フェイト！そんなヤツに言う必要はないよ！それより早くジュエルシードを！」

アルフが邪魔をする。

アルフの声にハツとしたフェイトは、急ぎ封印されたジュエルシードへと向かった。

なのはも急いでフェイトの後を追い、2人がそれぞれの杖を同時にジュエルシードへと差し出す。

そして杖がジュエルシードに触れた瞬間、辺りに眩い閃光が走り、次いで凄まじい衝撃波が襲ってきた。

それに耐えられず、2人も吹き飛ばされる。

全てが収まった後、そこには破損したレイジングハートとバルディッシュを手に倒れている2人の姿があった。

ジュエルシードはというと、不気味な鼓動を続けながらもそこにあった。

その後いち早く気が付いたフェイトがバルディッシュを待機状態に戻し、素手での封印を強行する。

必死にアルフが制止を呼びかけるがそれも聞かず、両手の平の負傷と気絶する程の魔力喪失の上、かろうじて封印に成功した。

そんなフェイトを抱え、なのは達に怒りに満ちた視線を向けて、アルフは立ち去っていった。

翌日。

昼間、学校でのなのはとアリサは相変わらず打ち解けられないままだった。結局、仲直りは原作通りになりそうだな……

そして夕方。

海鳴臨海公園にてジュエルシードが発動。園内の木々を取り込んで暴れ始めた。

「まったく！コイツら、生意気にバリアまで張るのかい！」

アルフが悔しげに叫ぶ。

なのはもフェイトも大威力砲撃魔法を撃とうとするが、暴れる木の枝達のせいではなかなかチャージタイムが取れないでいる。

．．．．仕方ない。ここ出るか。

膠着状態に陥りかける状況を見て、介入を決める。

「ハイペリオン！」

『スタンバイ・レディ』

「『ロックフィールド』展開！」

俺は暴れる木々をフィールドで包み込んで動きを封じる。

「あなたは！」

「この前の！」

「今は話している場合じゃない！前に集中しろ！」

突然現れた俺に驚く2人には答えず、忠告する。

「アレは俺が抑えている限り動く事はできん！今のうちに砲撃魔法で即刻封印しろ！」

「は、はい！」

「わかりました！」

そう言つて2人が封印の為の準備を始める。やれやれ．．．．

「デイベイン！」

『バスター』

「貫け、轟雷！」

『サンダースマッシュャー』

それぞれが撃った砲撃が木々に命中。そのままジュエルシードが封印される。

「もう大丈夫だな」

「あ、ありがとう……」

フェイトが俺に向かって礼を言ってきた。

「君からそんな言葉が聞けるとは思わなかったな」

俺の言葉にフェイトは一瞬顔を赤く染めたが、しかしすぐにデバイスを構えた。

「だけど、譲れないから」

「私はフェイトちゃんとお話したいだけなんだけど……」

そんなフェイトに戸惑うのは。

「ここから先、俺は関与しない。2人で好きにやってくれ」

俺はその場から離れようとして――

「ストップだ！ここでの戦闘は危険すぎる！」

あゝ．．．．．とうとう出てきちゃったよ、このKYが。

「僕は時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。詳しい話を聞かせてもらおうか？」

「……時空管理局」

「執務官だって！？」

ユーノとアルフが声を上げる。

「全員武器を下ろすんだ！このまま戦闘行為を続けるなら、っ！？」

「フェイト！撤退するよ！」

アルフがクロノを魔力弾で牽制した隙に、ジュエルシードへと走るフェイト。

「バカっ！」

そんな事したらクロノに狙われるだろ！

案の定、クロノはフェイトに向かってデバイスを構えると魔法を撃ってきた。

ドカンっ！

俺は咄嗟に射線に入ってシールドでガードする。

「えー!?」

「なっ！何のつもりだ!？」

「アンタ……」

そんな俺を見てフェイトとクロノ、アルフが驚く。

「手を貸してやる。ここは任せてさっさと行け」

俺はフェイト達に背を向けると、クロノと対峙しながら声を掛けた。

「……礼は言わないよ」

「あ、あの……ありがとうございます」

アルフと違い、律儀に頭を下げるフェイト。

「いいから早く退け。アイツに捕まりたいのか？」

俺がそう言つと、2人は慌てて撤退していった。

「貴様っ！自分が何をしたかわかっているのか!？」

「ふむ……。俺はただ、厄介なジュエルシールドを封印できる貴重な人材にお前がいきなり仕掛けた攻撃を撃ち落としたただけだが？」

「それは我々時空管理局の任務の妨害だ！公務執行妨害に値するん

だぞ!？」

「俺の知ったことじゃないな。そもそも俺は時空管理局などという組織を知らん」

「ふざけるなっ! 管理外世界で魔法を使う人間が管理局の存在を知らないはずがないだろう!」

「憶測で話をするなよ。それに今管理外世界と言ったな? ならばここでは君の言う管理局の法は役に立たないのではないか?」

「くっ……これ以上は何を言っても無駄なようだな。少々乱暴だが、今から君を確保させてもらう!」

「そうかい(ハイペリオン。ここまでの会話、録音はしてあるか?)」

『(問題ありません。映像も撮っております)』

「(流石は相棒。もしもの時は重要な証拠になるからな)」

『(全てはタツキの為。当然のことをしたまでです)』

本当にできたデバイスだよ、お前は。

『Stinger Sniper』

つと、今は話してる場合でもなかったな。クロノのヤツが誘導操作弾を放ってきた。数は……15か。

「仕掛けてきたのはそちらだから……後悔するなよ?」

『パワーブースト&アクセル』

俺は自身に身体強化の魔法を掛けると飛来する魔力弾へと突っ込んでいき、そのまま魔力で強化した拳と脚を使って全て叩き落とす。

「この程度か?」

「まだだ!」

『Stinger Sniper』

再び飛んでくる魔力弾の嵐。今度は30か。

「だが甘い!」

しかし俺は先程同様、それらも全て叩き落とす。

流石のクロノもこれには驚いたらしく、苦々しげに顔を顰めた。

「それなら!」

デバイスを構えなおして、こちらを狙うクロノ。これはデカいのが来るかな。

「ハイペリオン。『アイギス?』は?」

『いつでも展開できます』

「よし。ならばこのまま突撃するぞ！」

『了解』

今からアイツの驚く顔が目に浮かぶぜ。

『Blaze Cannon』

つと、来たな。

「残念だが、それも無駄だ！」

『Aegis?』

砲撃が直撃するかに見えたその瞬間、俺の眼前に盾が出現する。
アイギス?』。アテナが俺にくれた最強の守りだ。
それがアイツの砲撃を完全に防ぎきる。

「バカなっ!?!」

驚くクロノ。ふっ、予想通りだ。だがな、

「その隙が命取りなんだよ！」

「しまった!?!」

突進の勢いを殺さず、拳を叩き込む。

「うわぁああっ!」

まともにそれを喰らったクロノが吹き飛ぶ。

「『フリージングバインド』!」

俺はさらにバインドでヤツを簀巻きにした。浮遊魔法を掛けてあるので落ちる事もない。

「くそっ!こんなもの!」

クロノがバインドを解除しようともがく。

「無駄だ。そのバインドはお前如きが破れるものじゃない」

「あ、あの……何もそこまでやらなくても……」

「そうですね!もういいでしょう?」

ここで、今の今まで蚊帳の外にいたなのはとユーノが割り込んできた。

さらにその時、

『ちょっと待ってくれないかしら』

突然空中にディスプレイが出現し、その向こうに若い女性が映し出された。っていうかリンディさんだよな。

「あなたは誰かな?」

『私はリンディ・ハラウン。そこにいるクロノ・ハラウンの上司で、母親でもあります。少しお話いいかしら?』

「……いいだろう。だが、余計な小細工をしようとするなよ？ ついでにアンタの息子はしばらくこのままにさせてもらう」

「なっ！何を勝手なことを！」

『やめなさいクロノ！……わかったわ。それでは転送の為のゲートを開くから少し待ってくれる？』

「了解した」

さあ、いよいよヤツらの本拠地^{アースラ}に殴り込みだ！

第7話 『些細なすれ違いと、ついに現れたKY』（後書き）

あとがき

龍姫 「いやあゝ、スッキリしたあゝ！」

作者 「イイ顔してるな」

龍姫 「当然だ。あのKYは気に入らなかったからな」

作者 「だからか」

龍姫 「で、次回はアレだろ？」

作者 「ん？ああ、そうだな。次回は――」

龍姫 「敵の謀略を俺が徹底的に叩き潰す！」

作者 「――って俺の台詞盗るなよっ！……合ってるけど」

龍姫 「いやあゝ、次も楽しみだ！」

作者 「相変わらずイイ笑顔なこと」

龍姫 「それじゃ次回予告、いつてみよー！」

作者 「次回、第8話『交渉を有利に進めるには常に相手より上位に立つのが大事（仮）』を」

龍姫

「楽しみにしてくれな！」

第8話 『交渉を有利に進めるには常に相手より上位に立つのが大事』

しばらくして出現したゲートに俺、なのは、ユーノ、クロノ（簀巻き）が入り、次の瞬間にはアースラ艦内へと移動していた。

「……そろそろバインドを解いてくれてもいいんじゃないか？」

「まだだ。先程の女性……お前の母親だったか？彼女のところまで案内したら解放してやる」

「クッ……」

クロノが顔を歪めるが、知らぬフリをする。

「ならばせめてバリアジャケットだけでも解除してくれないか？そ
ちの君もだ」

俺がBJを解除したら一緒にマスクも消えるんだが……もう
正体をバラしてもいいか。

「はい。わかりました」

まずなのはBJを解除して聖祥の制服に戻った。

「君も早く」

「わかってるよ」

『J a c k e t O f f』

ハイペリオンの音声が届いて、俺のBが霧散する。

「ふう……」

「え？えええええっ！？」

謎の魔導師が俺だった事がわかったのはが盛大に驚いている。

「やあ、なのはちゃん」

「え？え？ど、どうしてたつくんが？……ええ！？」

「……どうやら簡単には落ち着きそうにないな。」

「おいユーノ。お前も元の姿に戻ったらどうだ？」

「な！？どうして君がその事を！？」

「別にいいだろ。そんな事どうだって」

「……わかったよ」

溜め息を吐くと、ユーノも元の姿に人間の姿に戻った。

「なのはにこの姿を見せるのは久しぶりだね」

そう言ってなのはに向き直るユーノ。しかし、なのはは口をパクパクしながらブンブン首を振って答えた。

「あれ？そうだったっけ？」

「そうだよ！私が初めて会った時はユーノ君、フェレットだったもん！」

おっ、やっと復活したな。

「そういえばユーノ、お前温泉旅行の時なのは達と一緒に女湯に入ってたよな」

「——っ／／／／」

俺が温泉での話を持ち出した途端、あの時の事を思い出したなのは顔を真っ赤にして、俺の背中に隠れるようにしがみついていた。
．．．．．恨みがましい目をしてユーノを睨みながら、な。

「ちょ、ちょっと待って！それは元はと言えば君が」

なのはの視線に耐えられなくなったユーノが弁解しようとするが、

「言い訳は無用だぞ……この淫獣が」

「な！？き、君はそんな事をしたのか！？」

それより先に俺が追い討ちをかけ、クロノがユーノから若干距離を置いた。

「だから、僕の話聞いてってば！」

必死に疑惑を否定するユーノだが、なのはとクロノの反応にメチャ

クチャ落ち込んでいた。ハハッ、いい気味だ。

「そういえば、たつくんはどうして魔導師をやってるの？」

「うーん、なりゆき？」

なのはの質問を適当に誤魔化す。流石に転生なんて話はできないかな。

「なりゆきって……そんな事あるわけないの！」

誤魔化せなかったか……。仕方ない。

「いつか話すよ。僕理由は」

「むー」

不満そうに頬を膨らませるのは。

「さあ、着いたぞ」

先頭に行くクロノが1つのドアの前で止まった。この先にリンディさんがいるのか……

「ここが艦長室だ」

そう言ってドアを開けるクロノ。

「あつ……え？」

なのはが驚くのも無理はない。なんせドアの先には日本風の庭（？）のようなものがあつたからだ。

「お疲れ様。3人ともどうぞこちらへ。楽にしてね」

「アンタの息子を返すよ」

俺はようやくクロノのバインドを解いた。

「ありがとう」

そしてクロノが用意した羊羹と緑茶を飲みながら、話は始まる。

リンディさんが緑茶に多量の砂糖とミルクを入れるのを見て、なのは苦笑いをしていた。なるほど……あれがかの有名な『リンディ茶』か。

「さて、それでは改めて自己紹介を。はじめまして、時空管理局所属艦『アースラ』の艦長、リンディ・ハラオウンです」

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ」

「アースラ通信主任のエイミィ・リミエッタです」

エイミィもいたんだな。今気付いたよ。

「えっと……高町なのはです」

「ユーノ・スクライアです」

「氷護龍姫だ……っと、これでよし」

「たっくん、なにをしたの？」

「この部屋に結界を張ったんだよ、30枚程ね。これでこの部屋に干渉できる人間、機械はなくなった」

「……凄い」

結界魔導師のユーノが驚く。これくらい、俺にとっては朝飯前だよ。

「さて、それじゃまずはそちらの話を聞かせてもらおうか。時空管理局とはどんな組織なんだ？」

「わかりました」

そうしてリンディさんから説明を聞く。やはり表層的な部分しか話さないか……

「なるほど。つまり世界規模の警察組織ってことか」

「ええ。簡単に言えば、ですけどね」

「では、今のを踏まえてこちらからも質問をしよう。何故この『管理外世界』でクロノに『逮捕権』なんてものが発生するのか、とな」

管理外世界で管理局の法律が通用する道理はない。

「それは本当に申し訳ない事をしたわ。今回の件は不問とします」

「不問も何も、僕は元から無罪だ。『先に』攻撃してきたのはそちらだしな。ハイペリオン」

『Yes , master』

俺はハイペリオンに命じてあの時の映像を流させる。

「これが証拠だ」

「っ！」

残念だがその程度のプレッシャーに屈する程、俺は弱くないぜ？

「そういえばユーノ、せっかくだからお前も事情くらいは説明したらどうだ？」

「え？あ……うん」

ユーノに話を振ると、ジュエルシードを発掘したのは自分である事、そしてこの世界に自分が来た理由をリンディさん達に話した。

「なるほど、立派だわ」

「だが、同時に無謀でもある」

それを聞いてリンディさんはユーノに感心し、クロノは呆れた。

「これより、ロストログア『ジュエルシード』の回収については時空管理局が全権を持ちます」

「「え？」」

「君達は今回の事は忘れて、それぞれの世界に戻って元通りに暮らすといい」

「でも……そんな……」

「次元干渉に関わる事件だ。これ以上民間人を巻き込むわけにはいかない」

「まあ急に言われても気持ちの整理がつかないでしょう。今夜一晩ゆっくり考えて、それから改めて話をしましょう」

突然のリンディの宣言に戸惑う2人。さて、ここからが本番だな . . .

「わかった。なら今日はもう帰ろう、なのはちゃん」

「たつくん？でも……」

「ちょっと待ってくれないかしら」

なのはを連れて立ち去ろうとする俺に、リンディさんが待ったをかける。

「何か？話は終わったはずだが」

「あなたには聞きたい事があるわ」

急に威圧感を増すリンディさん。

「……………」

「あなたの力についてよ。先程あなたはほんの数秒で30枚もの結界を張ったけど、そんな事は上位の結界魔導師でもできない事よ。それから戦闘中にクロノの砲撃を防いだあの盾。あれは一体何かしら？とにかく、詳しく説明と解析を――」

「断る」

皆まで言わせず、バツサリ切り捨てた俺をリンディさんが驚いたように見つめてくる。

「僕には管理局に協力する義務も義理もない」

「そ、そう言わずに……………」

「くだい。そもそも、人を利用しようとする組織なんて信用できない」

「な、なんだと!？」

俺の言葉にクロノが驚き、リンディさんは顔を強張らせた。

「クロノ、君はさっき言ったな。『民間人を巻き込むわけにはいかない』と」

「あ、ああ」

「なら、どうしてまた『改めて』話し合いの場を持つ必要がある？」

「何が言いたいんだ？」

なんだ。クロノはこの程度の話もわからないのか。というか、自己紹介以降完全に空気だったエイミイも首を傾げている。

「なら、もっと簡潔に教えてやるよ。僕は親切なフリをしてなのはちゃんの想いを利用しようとしたあなたが許せないんだよ、リンディさん」

「っ！」

「ふえ？え？どういう事なの、たつくん？」

「簡単なことだよ。なのはちゃんはリンディさん達にああ言われても、協力するつもりだったんでしょ？」

「う、うん。フェイトちゃんともまだちゃんと話せてないし……」

「その心をリンディさんは利用したんだよ。上手く誘導して自分達の戦力にしようと考えたんだ。そうすれば事件の解決は早まるし、さらにはこの事件以降も協力要請を簡単に出せるからね」

俺の言葉に、リンディさんは顔を俯ける。クロノは驚いてリンディさんを見る。

「それは本当ですか艦長！？」

「……………」

黙るしかないリンディさん。凶星を指されたんだから当然だな。

「なのはちゃん、帰ろうか。管理局に頼らなくても、これからは僕が協力するからさ」

「たつくん……」

「待ってください!」

「……. かった!」

「何だ?」

「あなた達を騙して利用しようとした事は認めるわ。ごめんなさい」

「それで?」

「こちらは立場上一般人に協力などできません。でも事件解決の為に、どうか私達に力を貸してください!お願いします!」

リンディさんが俺達に頭を下げる。

「……だつてさ、なのはちゃん」

返事なんてわかりきってるが、一応そう聞く。

「私……手伝います。手伝わせてください!」

やっぱりな……. このお人好しが。

「僕も手伝います。そもその原因は僕ですし」

ユーノまで……揃いも揃ってまったく。

「いいんだね、なのはちゃん？」

「うん！私、フェイトちゃんともっとお話したいの！」

「そっか……それなら仕方ないかな」

「え？」

「僕も協力しますよ」

リンディさんに向かってそう言う。

「ありがとう、3人とも」

そう言って、リンディさんは改めて頭を下げた。

アースラからの帰り道。

「あの……たつくん」

「何かな？」

「ありがとうなの」

「別に僕は何もしないよ。それに僕が協力するのはなのはちゃんとフェイトにだけだよ」

「へ？」

「だから、僕はなのはちゃんのしたい事を手伝う為に一緒に戦うて事だよ」

そう言つて笑いかけると、なのはは顔を真っ赤にして俯いてしまった。

「たつくん……」

若干潤んだ瞳でこっちを見てくるなのは。

その後も魔法の事やフェイトの事について話しながら、俺達は帰宅した。

第8話 『交渉を有利に進めるには常に相手より上位に立つのが大事』(後書き

あとがき

作者 「管理局との交渉、終了っ!」

龍姫 「楽しかったぜ!」

作者 「そりゃよかったな」

龍姫 「で、次回はいいよアレか?」

作者 「そうだな。なのフェイ初協力プレイ@海鳴海上、だよ」

龍姫 「という事はあの有名シーンも……」

作者 「バッチリ収録予定だ」

龍姫 「こりゃ次回も目が離せないな!」

作者 「もちろんだ!それでは、次回予告!

次回、第9話『伝えたい想いは言葉にのせて』

を、
」

龍姫 「ご期待あれ!」

第9話 『伝えたい想いは言葉にのせて』（前書き）

祝！PV5、000&ユニーク1、000突破！

この作品を読んでくださっている皆さん、本当にありがとうございます！
ます！

これからも、この作品をどうぞよろしくお願いします！

それでは、本編スタート！

第9話 『伝えたい想いは言葉にのせて』

あれから俺達はアースラに拠点を移し、ジュエルシードの搜索を続けた。

そして俺達が管理局に協力し始めて10日。

現在は、あの海中に潜む6つのジュエルシード6つを残すのみという状況になった。そして――

ビー、ビー、ビー

『エマージャンシー！搜索域の海上にて、大型の魔力反応を感知！』

来たな………！

部屋で休憩していた俺は、急いでブリッジへと向かった。

「あ！たつくん！」

「なのはちゃん！急ごう！」

「うん！」

「ちょっと！僕も忘れないでよ！」

途中でなのはと合流し、2人でブリッジへと走る。ユーノ？そんなヤツは知らん。

「なんて事してんの、あの子達！」

「エイミィさん、どうしたんですか？」

「あ、皆！これを見て！」

ブリッジに着いた俺達を待っていたのは、大規模な儀式魔法陣を展開してジュエルシードを強制発動させているフェイトの姿が映ったモニターだった。

「なんとも呆れた無茶をする子だわ」

「無謀ですね。間違いなく自滅します。アレは個人が出せる魔力の限界を超えている……！」

「フェイトちゃん……」

なのははモニターに移るフェイトを心配そうな目で見ています。

「あの、私急いで現場に！」

「その必要はないよ。放って置けば、あの子は自滅する」

「え……?」

「飯に自滅しなかったとしても、力を使い果たしたところで叩けばいい」

「でも！」

クロノの無慈悲な言葉に食い下がるのは。

「今のうちに捕獲の準備を」

「了解」

「あ……」

「私達は常に最善の選択をしないとイケないわ。残酷に見えるかもしれないけど、これが現実なの」

組織においては、状況に流されて誤った判断を下す事は許されない。しかし、残念ながら俺達は組織の人間ではないんだよ……！

「でも……！うう……」

原作では、ここでなのはを転送するのはユーノだった。だが、こんな美味しいところをヤツに持っていかせてたまるか！

「（行つ——）」

「（なのはちゃん、行つて！）」

「（たつくん！？）」

「（今から僕がゲートを開く。だから、行ってフェイトを助けてあげて！）」

「（……うん！ありがとう、たつくん！）」

俺はなのはに笑顔で返すと、現場への転移魔法陣を開いた。

「なっ！？君は！」

「ごめんなさい……高町なのは、指示を無視して勝手な行動を取ります！」

「フェイトの結界内へ……転送！」

そうしてなのはは転移していった。

「なんて事をしてくれたんだ！」

「怒るなクロノ。そもそも僕達は別にそちらの命令に従う義務はないって事を忘れるなよ？」

「くっ……」

「それでは、僕も行きますので」

「っ！待ちなさい！」

「待ちませんよ。……それじゃもう1度、転送！」

なのはの後を追って、俺もその場を後にした。

「フェイトの……邪魔をするなあああっ！」

俺が転移すると、ちょうどアルフがそう言ってなのはに飛び掛かるうということだった。

『プロテクション』

俺は急いで2人の間に入って、アルフの攻撃を止めた。

「落ち着け！俺達は別にお前達と戦いに来たわけじゃない！」

「たっくん！」

「お前は！」

「（バカか君達は！何をやってるんだ！）」

と、ここで念話を繋げてきたクロノ。相変わらず何というKY。

「（ごめんなさい！命令無視は後でちゃんと謝ります！——けど、ほっとけないの！）」

なのはは流石だな。今自分が何をすべきか、ちゃんとわかっている。

「（あの子、きつと1人ぼっちなの……。1人きりが寂しいのは、

私少しだけわかるから……！」

「……. そうですね、この先の戦闘を管理局のヤツらに見せるのは後々の為によろしくないな。」

「（ハイペリオン、フェイトの結果に混ぜるようにジャミング結果を張ってくれ。もちろんバレるなよ？）」

『All right, master』

よし。これで俺が何をしてもアイツらにはわからないな。そう簡単に手の内は見せてやらんさ。

「まずはジュエルシードを停止させないとマズい事になる！だから今は……封印のサポートを！」

そう言つてチェーンバインドを飛ばしてジュエルシードの暴走で起きた竜巻を抑えていくユーノ。

「……. なんだ来たのか。」

「フェイトちゃん！手伝つて！ジュエルシードを止めよう！」

そしてレイジングハートからバルディッシュに光の帯が伸び、魔力が充填されていく。

『Power charge』

『Supply complete』

「2人できつちり半分こ！」

「くううう！」

ユーノが苦戦しているが、そこにアルフが助太刀に入った。さて、俺も行くか……

『グレイシャ・ケージ』

「凍てつけ！」

俺の『変換資質：凍結』を利用した氷の檻を作り出し、竜巻を凍らせる。

「2人とも、今だ！やれ！」

「うん！フェイトちゃん！2人でせーので、一気に封印なの！」

『Shooting mode』

そう言うと、なのはは空中に魔法陣を展開し、その上に立ってレイジングハートをジュエルシールドの方へ向ける。

『Sealing form, set up』

「デバインバスター、フルパワー。……いけるね？」

『All right, my master』

そしてなのはは砲撃体制に入った。

「バルディツシュ……」

『Yes , sir』

それを見てフェイトも魔法陣を展開、砲撃態勢を取る。

「せーのっ！」

「サンダア——！」

「ディバイイ——ン！」

2人にデタラメな量の魔力が集まる。 . . . スゲエ。

「レイジイ——！」

「バスタア——！」

2人から同時に発射された砲撃は一撃で6個全てのジュエルシールドを封印した。

そして封印されたジュエルシールドが2人の元へ飛んできた。

そして . . . ついにあの名場面が . . .

「友達に……なりたいんだ」

なのはが自分の想いをフェイトに告白する。

．．．．あぁ、俺ここにいて良かった．．．．

しかし折角の感動も束の間、

ゴロゴロ．．．．ビシャアアアン！

「か、母さん！？」

空から紫色の雷が降って来た。

．．．．ついにお出ましだな、プレシア・テストロッサ！

「させないっ！」

俺は雷とフェイトを結ぶ射線上に飛び込むと、自身の最強の盾を展開する。

「我が最強の護りよ！降りかかる災厄全てを退ける！『アイギス？』展開！」

背中に背負っていたそれを頭上に掲げる。

「オオオオツ！！」

俺の魔力を注ぎ込まれた盾は、アイギス？プレシアの放った雷の全てを完璧に防ぎきる。

「たっくん！フェイトちゃん！」

「大丈夫！」

やっぱり撃ってきたか……
こりゃさっさと交渉しに行かないとダメだな。

「フェイト、大丈夫か？」

とりあえず、俺の後ろで呆然としているフェイトに笑いかけてみた。
すると――

「あ……ウン。大丈夫……／＼／＼」

声を掛けられた事に一瞬驚いたが、すぐに返事をしてくれた。顔が
赤いけど何かあったのか？

「あ……ええつと……」

何やら言いたい事があるが言えないといった様子のフェイト。

「どうした？」

「あの、名前……あなたの……」

ん？俺の名前が知りたかったのか？

「龍姫だ。氷護龍姫」

「龍姫……ありがとう、龍姫」

噛み締めるように俺の名前を呼んで、極上の微笑みを浮かべるフェイト。．．．ヤベ、メツチャ可愛い。

「と、とにかく大丈夫なら良かった！お前達は急いでここを離れろ。あのKYが来る前にな。ジュエルシードは約束通り半分——3つなら持つて行っていい」

「でも……」

なおも何かを言いたげな様子のフェイトだが、そこにアルフがやって来た。

「フェイト！」

「アルフ……」

「さあ、早く行け！」

「うん……それじゃあ……またね、龍姫」

「ああ。またな」

そうしてフェイトとアルフは去っていった。

ちなみに、なのはには何もなかった。っていうか、途中から完全に空気だったな。

そしてアースラへ帰還した俺達。

到着早々クロノが散々怒鳴ってきたが、俺達には行動を制限される義務がない事を理由に黙らせた。

さらに帰ってくる時からそうだったんだが、俺を見るなのは視線が何故か刺々しかった。

理由を聞こうとしてもそっぽを向かれてしまっし、何なんだ？

さて、いよいよ最終決戦も近い。

次はあちらに出向いて話をしないと．．．．

第9話 『伝えたい想いは言葉にのせて』（後書き）

あとがき

龍姫 「いよいよクライマックスへ向かう物語」

作者 「龍姫の選ぶ未来とは？」

龍姫 「そしてなのはとフェイトの行く末は？」

作者 「次回——って何だこの劇場予告（偽）は」

龍姫 「いや、何となくやってみたくなっつい……」

作者 「何となくでやるなっ！」

龍姫 「その割にはノリノリだったじゃん」

作者 「だって面白そうだったし」

龍姫 「流石だな」

作者 「おうよ！で、本当に次回についてだが——」

?? 「……出番……」

作者 「ん？誰だ？」

?? 「私の出番は？」

龍姫 「おう。アテナか」

アテナ 「おう、じゃないわよ！6話以降全く私の出番がないじゃない！」

作者 「落ち着きなさい。次回は出番があるから」

アテナ 「本当！？」

作者 「ホントだよ」

龍姫 「よかったな」

アテナ 「ええ。もしかしたら読者の皆さんにも忘れられたんじゃないかと心配だったのよ？」

作者 「そんな大袈裟な……」

龍姫 「よし。アテナ、次回予告だ！」

アテナ 「次回、第10話『隠された母の想いと、龍姫の願い（仮）』を」

作者 「よろしく願いしまーす！」

龍姫 「よろしく！」

第10話 『隠された母の想いと、龍姫の願い』

あの海上でのジュエルシード暴走事件の後、俺達はこの事件の首謀者がフェイトの母、プレシア・テストロッサであるという事を聞かされた。

まあ俺は最初から知っていたので何を今更という感じだったが、なのはには流石に衝撃が大きかったようだった。

その後一旦改修作業をするというアースラから降りて、久しぶりの海鳴に戻った俺達。しかし……

「アテナ。頼んでいたサーチは終わってるか？」

「ええ。バッチリよ」

「よし。それじゃ、早速乗り込むぞ」

「ふふつ。楽しみね」

現在俺がいるのは海鳴公園の森の中。もちろんジャミング結界を張っている為、何をしているのか誰にも気付かれてはいない。

……そういえば、アテナが何故今まで俺の傍にいなかったのかそろそろ説明しないとな。

実は温泉でのフェイトとの接触以後、アテナにはプレシアの本拠地『時の庭園』の位置補足^{サーチ}を頼んでいたのだ。

そちらにかかりきりだった為に今までアテナは表舞台には出てこなかったわけだが、それもここまでだ。

「でも悪かったな。実は見たかったんだろ、色々と」

「そうね……でも、サーチの片手間にモニターさせてもらってたから」

「なんだ。そうだったのか」

「ええ。……そういえば龍姫。あなたもなかなか隅に置けないわね」

そう言つて、突然意地の悪い笑みを浮かべるアテナ。

「……何の事だ？」

「またまた、とぼけちゃつて。なのはに続いてフェイトまで落とすとはね」

「んなつ！？」

「あら、もしかして気付いてなかったの？」

「……全然」

「バカねえ。2人とも龍姫にベタ惚れよ？」

「……なんだつてえええええつ！？」

思わずその場に膝をついて崩れる俺。

「……まあとにかく、ちゃんと答えてあげるのよ?」

「……そうだな……」

悩み事が増えてしまった……どうするんだよ、俺。

「……まあ、とにかく!今は目の前の問題を何とかしないと!」

「現実逃避に走ったわね(ボソツ)」

「そこ、余計な事は言わない!」

「はいはい」

「『時の庭園』へ行ってプレシアと交渉をする。転送の準備を」

「了解。座標設定——完了。転移先は『時の庭園』。龍姫、いつでも行けるわ」

「んじゃ、行くか!……転送!」

そうして、俺とアテナはプレシアの待つ『時の庭園』へと飛び立った。

「……着いた、のか?」

「ええ。間違いなくここは『時の庭園』内部よ」

転移した先は、西洋の城を髣髴とさせる立派な装飾を施された広い廊下だった。

——ゴゴンッ！

「な、何だ？」

突然廊下を、というか庭園全体を揺るがす振動が走った。

「もしかして……？」

アルフがプレシアに吹き飛ばされた時に発生したものか？だとするとこの後フェイトが出て行けば、プレシアが1人になるな……

『タツキ、転移反応を確認しました。おそらく彼女です』

「ありがとう、ハイペリオン」

相棒がフェイトの転移を確認した事を伝えてくれた。
ハイペリオン

「それじゃ、行こうか」

「ええ」

『Yes, master』

そうして、2人と1機はプレシアのいるであろう玉座の間へと向かった。

廊下を歩いていくと、突き当たりに一際大きな扉があった。．．．
．ここだな。

「こんにちは」

そう言つて扉を開けると、俺の正面にイスにもたれた1人の女性がいた。この人がプレシアさんか．．．．

「あなた、何者？」

「突然すいません。あなたが大魔導師のプレシア・テストロッサさんですよ。」

「そうよ。私が大魔導師のプレシア・テストロッサよ」

俺の問いに答えながら立ち上がるプレシアさん。俺を警戒してるよ
うだが、当然か。

「答えなさい。どこから入ったのか、それと何者なのか」

「秘密、と言つたら？」

「消えなさい。私の前から、今すぐに」

そう言って紫の雷撃を飛ばしてくるプレシアさん。おおっ怖っ！

「アテナは下がっててくれ」

「はい。頑張ってね、龍姫」

「おう」

『パワーブースト&アクセル』

「（とりあえず回避に専念するぞ。あと、アイギス？は機能停止させてくれ）」

『（わかりました）』

ハイペリオンと念話を交わし、プレシアさんに向き直る。

「いくぜ、大魔導師サン？」

「馬鹿にして……！」

再び走る紫の雷。俺はそれをかわしながら『ある部屋』を探す。

「ちょこまかと……小賢しいネズミが！」

悔しげに呻くプレシアさん。……っと、見つけた！

「ここだ！」

「なっ！？」

俺は扉を破ってアリシアが眠る部屋へと転がり込んだ。

「あなた……何故ここが……」

「この子はあなたの娘……か？」

「そうよ。たった1人の私の娘、『アリシア・テストロッサ』」

「『たった1人』？フェイトは違うのか？」

「あんな人形を、アリシアと一緒にしないで！」

怒りに任せて放たれた雷撃をシールドで受け流す。……危ないな。

「フェイトが人形、だと？」

「そうよ！あの子は私が作った人形！事故で死んだその子の代わりにすぎないのよ！」

「ふざけるな！」

「何ですって？」

俺の剣幕に一瞬驚いた顔を見せるが、すぐに険しい表情に戻るプレシアさん。

「あなたはフェイトの事を何も見ていない。あなたは何故あの子があそこまで一生懸命なのか、考えた事があるか？」

「……それが何だというの」

「答えは簡単だよ。フェイトはあなたに笑って欲しくて頑張ってるんだ。自分がどれだけ傷ついても、あなたがどれだけ自分に冷たく当たっても、な」

「黙りなさい！」

「本当はあなただって気付いてるんじゃないか？あの子も——フェイトももう1人の娘だと思っている自分に」

「……………」

ここに来て初めて無言になったプレシアさん。

「あなたはそれを必死に隠そうとしている。違うか？」

「……………れ」

「フェイトは人形だと思い込む事で、現実から目を背けているだけだろう？」

「……………まれ」

「認めるよプレシア・テストロッサ。アリシアとフェイト、2人もあなたの娘だという事実を」

「黙れえっ！」

叫ぶと同時に雷を撃つプレシアさん。今までと違い、俺は正面からそれを受ける。

「ぐう……きつついな」

「（龍姫！？何で避けないのよっ！）」

「（……知りたかったんだ。プレシアさんの、母親の想いつてのをさ……）」

「何故、避けなかったの……？さっきまでのあなたなら簡単に——ゴホッ！ゴホッ！」

突如咳き込みだすプレシアさん。口を押さえた手の隙間からは血が流れている。

「大丈夫か？」

「自分を……殺そうとした……人間の、心配をする……なんて、変わってるわね、あなた」

「知ってたからさ。あなたの身体が不治の病に冒されている事を」

「っ！？」

「『ヒールウォーター』」

俺はプレシアさんに手をかざして、応急処置を施した。

「これは……」

「効果は一時的なものだけど、少しは楽になっただろう」

「……ええ」

「あなたにとってアリシアがとても大切な存在だった事は想像に難くないさ」

「……………」

「だけど、それでフェイトを人形なんて思うのはやっぱり間違いだよ」

「何故？」

「例えどんな生まれ方をしようと、フェイトの『生みの親』はあなたじゃないか」

「っ！」

俺の言葉に息を呑むプレシアさん。

「それに、あなたはわざと『悪役』を演じているんだろう？もしも
の時にフェイトに迷惑がかからないように」

「あなた……本当に何者？」

「俺は氷護龍姫。ただの世話焼きさ」

「フフッ……面白い子ね」

そうして少し笑ったプレシアさん。 . . . なんだ。そういう表情もできるんじゃないか。

「さて。落ち着いたところでここからが本題なんだが……」

「何かしら」

「俺はアリシアを蘇らせる術を知っている。それにあなたの病も治す術も」

「本当なの!？」

「ああ。 それで俺からの提案なんだが、フェイトとの関係をやり直さないか？」

本当は俺の個人的な願いなんだが、正直には言いたくない。
何となく恥ずかしいからな。

「 それで？」

「話に乗ってくれるなら、あなたとアリシア、そしてフェイトも俺が必ず救うと約束しよう」

「 そう」

「管理局がここを探し当てるのも時間の問題だろうから、急かすよ
うで悪いが一両日中には返事が欲しい。決心が固まったら、ここに
連絡してくれ」

そう言つて、俺直通のホットラインの番号を書いた紙を渡した。

「……わかつたわ」

「それじゃ、俺達はこれで失礼する。またな、プレシアさん」

「……ええ。また……」

こうして俺はプレシアさんとの対談を済ませて、海鳴へと帰還した。

帰つてきてすぐにリンディさんから連絡が来た。アースラの改修工事が終わったそうだ。

次いでなのはからも連絡が来た。何でも、明朝6時から海鳴公園でフェイトと決闘をする事になったとか。いよいよか……。決闘に関しては、俺が立会人になる事で双方が合意したらしい。……。何でさ？

その日の深夜。

——ピピピッ

『タツキ、プレシアからのコールです』

「来たな……」

さあ、プレシアさんはどんな答えを出したんだ？

「もしもし？」

『……プレシアよ』

「決心が固まった、そう受け取っていいんだな？」

『ええ……』

「わかった。聞かせてくれ」

『……やっぱり今更フェイトとの関係をやり直すなんて私には無理よ。だから、私は最後まで『悪役』を演じるわ』

「……それが、あなたの答えなのか？」

『そうよ……だから、フェイトの事はあなたに託すわ』

「……そうか。ならばフェイトの事は任された」

『ええ。よろしく』

そして、通話が切れた。

「クソッ！」

「龍姫……その様子だとプレシアは……」

「ああ。全ての罪を自分が被って消える気だ」

「……それで、龍姫は？」

「そんな馬鹿な事、俺がさせると思っか？」

「ありえないわね」

「当たり前だ」

それから、俺はアテナと共に夜明け近くまで対策を話し合った。

第10話 『隠された母の想いと、龍姫の願い』（後書き）

あとがき

龍姫 「この物語にハッピーエンド以外はありえん！」

作者 「いきなり大きく出たな」

龍姫 「当然だろ。あんな悲しみはもういらない！」

作者 「まあ熱くなるのもいいが、冷静さをなくしちゃいかん」

龍姫 「わかってるさ。『99%の情熱と1%の理性』だろ？」

作者 「うむ。わかっていればそれでよし！」

龍姫 「ところで、次回はなのフェ海鳴海上決戦だよな？」

作者 「おう。後世の魔王の片鱗を、ついに拝む事ができるぞ！」

龍姫 「あゝ、アレか。フェイトにとっては一生もののトラウマだな」

作者 「まあ、アレは無理もないだろ」

龍姫 「それじゃ、次回予告！」

作者 「次回、第11話『いざ、最終決戦！新しい結末^{こたえ}の為に（仮）』を」

龍姫 「お楽しみに！」

第11話 『いざ、最終決戦！新しい未来（こたえ）の為に』

「ふわぁあゝ……眠い……」

「ふわ……龍姫、だらしないわよ……」

「アテナだって俺と変わらないだろ……」

現在、時刻は午前5時30分。場所は海鳴公園だ。

結局明け方近くまで話し合っていた為、俺達は1時間くらいしか寝ていない。おかげでさっきから欠伸が止まらないが……

「……これじゃ流石にマズいか。——『キュアウオーター』」

眠気覚ましの魔法を掛けて、意識を覚醒させる。

「よし。もう大丈夫だな」

決闘の立会人が欠伸なんてしてたら、2人に失礼だしな。

「おはよう、たつくん。……と、アテナさん？」

ちょうどその時、なのはとユーノ、アルフが現れた。

「おはよう、なのはちゃん。ユーノとアルフも」

「おはよう、なのは。そちらのお2人も」

「……あなたは？」

「アンタ、温泉の時の……」

ユーノとアルフはこの場にいる第3者、アテナを若干警戒しているようだ。

「改めて自己紹介するわ。私はアテナ。龍姫となのはの友人で、同じく魔法を知る者よ」

「えええええっ!？」

「なのはちゃん、そんな大声出したらうるさいよ」

「で、でも……嘘……」

「なのは、今まで黙っててごめんね。でも、これからは私も一緒に戦うから」

「……う、うん。アテナさん、よろしくなの!」

「よろしくお願いします」

「……よろしく」

とりあえず、3人ともアテナを受け入れてくれたようでよかった。

それからアルフが俺のところへ寄って来ると、

「……そっぴや、アンタには色々世話になったね。礼を言うよ」

「気にすんなって」

そんな事を言ってきた。俺が勝手にやった事だから別にいいのに・

ちょうどその時、

——スタッ

近くの街灯の上にフェイトが降り立った。これで役者は揃ったな。

「おはよう。フェイトも来たな」

「あ……お、おはよう龍姫」

俺が笑顔で挨拶すると、どもりながらも返事をしてくれるフェイト。
……可愛いじゃねえか。

「時間もちょうど良さそうだし、これより高町なのはとフェイト・
テスタロッサの、ジュエルシードを賭けた決闘を始める。立会人は
僕がやるって事でいいかな、ご両人？」

「はい」

「うん」

2人がそれぞれ頷く。

「ではルールを説明する。勝負はどちらかがギブアップか、気絶した時点で決定する。それとユーノとアルフは一切の手出しをしない事。以上、何か質問は？」

しばらく待っても何も無いという事は、質問はないんだろう。

「では沖まで移動するぞ。俺の合図で戦闘開始だ」

こうして、決戦の火蓋が切って落とされた。

『デイベインシューター』

「シュー——ト！」

『フォトンランサー』

「ファイヤ——！」

序盤から2人は持てる限りを尽くして戦いを繰り広げている。

なのはは誘導弾を上手く操作しながらフェイトの接近をなかなか許さない。しかしその弾幕をかくぐって、フェイトはなのはに接近戦を挑む。

……息詰まる熱戦とはまさにこの事だな。

そして試合も中盤に差し掛かるうというその時、先に行動を起こしたのはフェイトだった。

『ファランクスシフト』

フェイトがバルディッシュを正眼に構えると、空中に多数の魔法陣が出現。それらは魔力スフィアとなってフェイトの周囲に集まり始めた。

なのはは応戦しようとレイジングハートを構えるが、突如現れたバインドに四肢を拘束されてしまう。

「（ライトニングバインド……！マズい！フェイトは本気だ！）」

「（なのは！今サポートを——）」

「（ユーノ！余計な手出しはするなと言っただろう！）」

「（龍姫！？でも……）」

「（少しはなのはを信じてやれよ。……ね、なのはちゃん？）」

慌てて飛び出そうとしたユーノを制してなのはに呼びかけると、なのはは俺に笑顔で返してくれた。

「アルカス、クルタス、エイギアス……」

そうしている間にも、詠唱を続けるフェイト。そして――

「フォトンランサー・ファランクスシフト……打ち砕け、ファイヤー！」

流星群の如く撃ち出される魔力弾の嵐。．．．コレも充分えげつないよな。

次第に煙に覆われて姿が見えなくなるなのは。

「なのは！」

「フェイト！」

ユーノとアルフの叫び声が聞こえる。

全員が見守る中、徐々に煙が晴れていく。そこには――

「痛ぁー……撃ち終わると、バインド、ってのも解けちゃうんだね……」

キャノンモードのレイジングハートを片手に宙に浮かぶなのはがいた。さらに、

「今度はこっちの――」

『デイベイン』

レイジングハートを構えて、魔力を集中させるなのは。

「――番だよっ！」

『バスター』

発射される桜色の暴風。

「く……うあっ！」

フェイトは残った魔力スフィアを1つに纏めて放つが、あっさりかき消された。

「っ!？」

それに驚いたフェイトは、即座にシールドを展開。なのは同様、凌ぎきろうという考えだな。

そしてデイベインバスターがフェイトのシールドに直撃。

「く……うう……うあ……」

徐々にバリアジャケットがボロボロになっていくフェイト。それでも決して退く事はない。

「う……ああ……」

そして、ついにフェイトは耐え切った。

「フェイト……!」

そんな主人に感動した様子のアルフ。

……. だけど、まだなのはには『アレ』が残ってるんだよなあ
…….

折角の感動的場面なんだが、続きを知る俺としては素直に喜べない。

その証拠に、

「ハア、ハア……っ、ハッ!？」

フェイトは自分の遙か頭上、巨大な魔法陣と共に浮かぶなのは姿に気付いたようだ。

「受けてみて……、ディバインバスターのバリエーション!」

自分を見つめるフェイトに対して、そう言い放つのは。

『スターライトブレイカー』

周囲の魔力素が展開された魔法陣に集束していき、やがて巨大な球体が生まれる。

「くっ!」

フェイトは残った力を振り絞ってなのはのところへ飛んで行くことするが、

「っ!？バインド!？」

あらかじめ仕掛けてあったのだろう、なのはのバインドに拘束されて身動きが取れなくなっていた。

脱出しようともがくが、それで外れるわけもない。ホント容赦ねえな……

「これが私の全力全開!」

なのはから口上が聞こえて来る。 . . . いや、お前の場合は全力全『壊』だろ

「スターライト……ブレイカー——！」

解き放たれた魔力が超極太の光線となってフェイトを一瞬にして飲み込み、大爆発を起こした。

——ドオオオオン！

そして光線が消えたところで、気絶したフェイトが海へ落下していく。が、そうはさせない！

『アクセル』

一気に加速してフェイトを受け止める。 ちなみにお姫様抱っこだ。

「フェイトちゃん！」

すぐになのはが俺のところへ飛んできた。

「大丈夫だよ、なのはちゃん」

俺の言葉にホッと胸を撫で下ろすなのは。

「……でもちょっとやりすぎ」

「うう……反省してます……」

「一応釘は刺しておく。ったく、もうちょっと考えろよな。」

「ううん……あれ？龍姫？」

「お、目が覚めたか。……大丈夫か？」

「うん……／＼／＼……って、え？ええ！？」

顔を真つ赤にして俯くフェイト。しかし俺にお姫様抱っこされている事に気付くとまた慌てだした。

「おいおい、あまり暴れないでくれ。落としちまうだろ？」

「で、でも……」

戸惑うフェイトを無視して、俺は空を見上げる。……そろそろ来るか？

——ゴロゴロ………

ちょうどその時、突然空が曇り始めた。そして、

——ビシャアアン！

紫の雷が俺達（正確にはフェイト）目掛けて落ちて来た。

「なのはちゃん、フェイトを連れて下がって！」

「ふえ？え？」

「か、母さん……」

突然俺からフェイトを託されて右往左往するのはと、怯えるフェイトを護るように前に出る。

「『アイギス？』！」

俺は盾を展開してそれを防ぎきった。
アイギス？

「リンディさん！」

『ええ。逆探知は成功したわ。……武装局員、転送ポートから出勤！』

さあ、最終決戦だ！

あれからアースラに引き上げてきた俺達は、ブリッジで状況を見守っていた。

『おいっ！こっちに何かあるぞ！』

玉座の間へと突入した武装局員がアリシアの部屋を見つけてしまった。

「えっ……？」

モニターに映し出されたアリシアの姿に、なのはが小さく驚きの声を上げる。

「あ……」

フェイトも目を見開いて愕然としている。

『私のアリシアに、近寄らないで！』

アリシアのポッドに近づこうとした局員がプレシアによって吹き飛ばされた。

『う、撃てえーっ！』

残りの局員が一斉に攻撃するも、プレシアには届かない。

『うるさいわ……！』

逆にプレシアによって全員が行動不能にされてしまった。

「アリ……シア……？」

呆然と、フェイトが呟く。

『……もついいわ。終わりにする。この子を亡くしてから暗鬱な時間も……』

こちらに向かって喋り始めたプレシアさん。……そうか。言うんだな、決別の言葉を……

『この子の身代わりの人形を娘扱いするのも……』

「っ!？」

その言葉に、フェイトの身体がビクツと震えた。

『聞いていて?あなたの事よ、フェイト』

プレシアさんに名前を呼ばれ、さらに身を固くするフェイト。

『折角アリシアの記憶をあげたのに、そっくりなのは見た目だけ。役立たずでちつとも使えない、私のお人形……』

「あなたが進めていた使い魔を超える人造生命体の生成、そして死者蘇生の秘術——プロジェクト『F・A・T・E』。その結果生まれたのがフェイトこの子ってわけか……」

『そうよ。その通り。でも、作り物の生命は所詮作り物……失ったものの代わりにはならないわ。フェイト、やっぱりあなたはアリシアの偽者よ』

「やめて……やめてよ!」

なのはの悲痛な叫びがブリッジに響き渡る。

『アリスアを蘇らせるまでの間に私が慰みに使っただけのお人形』

しかし、無情にもプレシアさんの言葉は続く。

『……………』

．．．．．ん？何だ？何故そこで急に俯いて黙るんだ？

『……………やっぱりダメね。私は悪役に徹する事なんてできないわ』

「えっ!?!」

突然そんな事を言い出したプレシアさんに驚くフェイト。．．．．．

まさか!?!

『……………確かに、最初はそうだったの。フェイトの事はアリスアの身代わりとしか思っていなかった。でも、ある日フェイトの事も娘として考え始めている自分に気が付いたの……………』

「プレシアさん……………あなたは……………」

『それからの日々は私にとって苦痛だったわ。娘として愛してあげたいのに、辛く当たらなければならぬ現実。フェイトには本当に辛い思いをさせてしまったわね……………許してもらえないかもしれないけど、今までごめんなさい』

「母さん……………!」

プレシアさんの本心を聞いたフェイトが涙を流してその場に崩れた。

「フェイトちゃん!？」

慌ててなのはが支えに入る。

『フェイト、あなたは私の大事なもう1人の娘。だけど、私にはもうあなたの母親でいる資格はないの……』

「待つて、待つてよ母さん！」

必死に母親へと呼びかけるフェイト。
プレシア

『ごめんなさいフェイト……ずっと、ずっとあなたの事を愛していたわ』

そう言つて、寂しそうな笑みを浮かべたプレシアさん。

『氷護龍姫』

「……何だ？」

『あなたに会えてよかったわ。こうして最期に娘に本当の気持ちを伝えることができたのだから。……ありがとう』

「……そうかい」

そして次の瞬間、9つのジュエルシールドが暴走を始めた。

「次元震です!中規模以上!」

「振動防御！ディストーションシールドを！」

「ジュエルシード9個発動！次元震、さらに強くなります！」

「転送可能距離を維持したまま、影響の薄い空域に移動を！」

「りよ、了解です！」

「規模はさらに拡大！このままだと『次元断層』が！」

アースラスタッフが忙しく動き出す中で、フェイトが俺に近づいてきた。

「龍姫……」

「どうした？」

「龍姫は、全部知ってたの？」

「……ああ。実はフェイトとアルフがいない間に、プレシアさんに会ってたんだ」

「お前っ！そんな大事な事、何で黙ってたんだよっ！」

俺がそう言った瞬間にアルフが飛び掛ってきて、防御する暇もなく殴り飛ばされた。

「龍姫！大丈夫？」

咄嗟にアテナが支えてくれたおかげで、俺が床に倒れる事はなかつ

た。

「ありがとうアテナ。……管理局が聞いているような場所で軽々しく言えるわけがないだろう？」

「で、でもっ！」

「それにな、あの人はフェイトを俺に託すって言ったんだよ」

「っ、そんな！」

「プレシアさんはこのままジュエルシードの暴走に巻き込まれて、全ての罪を負って消えるつもりだよ」

「……………」

「さて、どうするフェイト？それを聞いたお前は どうしたい？」

「試すようにフェイトに問い掛ける。まあ、答えなんて聞かなくても最初から――」

「私は……私も、母さんの事が大好き。だから、このままお別れなんてしたくない！母さんを助けたい！」

俺はフェイトのその言葉に笑った。……そうだよな。そんなの当たり前だよな！

「よし！なら行くぞ、プレシアさんを助けに！」

「うん！」

「待つてー！私も行くよー！」

駆け出した俺とフェイトの後を追って、なのはもついてきた。

俺が導き出す新しい未来^{こたえ}の為に、ここからが本当の戦いだ！

第11話 『いざ、最終決戦！新しい未来（こたえ）の為に』（後書き）

あとがき

作者 「今日はいきなり次回予告です！

次回、第12話『誰も知らない物語の始まりへ（仮）^{プロローグ}』

を、
」

龍姫 「ご期待あれ！」

第12話 『そして、誰も知らない物語の始まり（プロローグ）へ……』

転送ポートへ向かう途中でクロノと合流した俺達は、そのまま時の庭園内部へと転移した。

「何だあれは!？」

「凄い数だ……正面突破は厳しいかもね……」

到着した俺達を出迎えたのは、おびただしい数の機械人形の群れだった。

「（ハイペリオン、周囲の魔力素はどんな感じだ?）」

『（はい。ジュエルシードの暴走のおかげで、過剰な程の密度になっています）』

「（そうか。……ならいけるな）」

『（やりますか?）』

「（ああ）全員、俺の後ろに集まれ!」

「皆さん、急いで龍姫の後ろに!」

『Charge start』

全員に指示を出して、俺は周囲の魔力を集束しにかかる。アテナがフォローしてくれたので、迅速に皆が集まった。

「一体何をする気だ!？」

「目の前のアレを片付ける! KYは黙ってる!」

「何だとっ!」

KY^{クロ}が突っかかってくるが、適当にあしらう。

『Charge complete』

「いくぞ! 『トリトンウェーブ』!」

俺がそう口にした次の瞬間、目の前に群がってきた機械人形どもは突如出現した津波に飲み込まれていった。

「なっ!？」

「『す、凄い……』」

その光景に全員が驚きの声を上げ、呆然としていた。

「おい! ポケッとしてると置いてくぞ! (ハイペリオン、魔力チャージは常にしといてくれ)」

『(了解です)』

こうして、俺達^{ラストダンジョン}は時の庭園へと足を踏み入れた……

ひたすら庭園内を駆け続ける俺達。っていつかこの廊下広過ぎだろ！

しかしさっきからそうなんだが、廊下が穴だらけで進みにくい事この上ない。

「その穴、特に黒い淀みがあるところは気をつけて」

と、クロノが俺達に向かって注意を促してきた。

「その黒い淀みは虚す——」

「そこは虚数空間って言うんだ。あらゆる魔法が一切発動しなくなる危険な空間だよ。飛行魔法もキャンセルされるから、絶対に落ちないように！」

「うん。たっくん、気をつけるよ」

「龍姫、よく知ってるね？」

「このくらいは当然さ」

クロノが何か言いたそうな目でこちらを見てくるが、知らぬフリをする。

しばらくして、ようやく扉が見えてきた。……このまま突撃する！

——バンッ！

扉を蹴破ると、中で待っていたのは機械人形の群れ、群れ、群れ。

「チッ！邪魔なんだよ！」

『アヴァランチ・プレッシャー』

今度は雪崩を起こして全てを押し流す。

「ここから2手に分かれよう」

敵が片付いたところで、クロノから提案が。

「そうだな。だったら、なのはちゃんとユーノ、アテナは最上階へ行って駆動炉の封印を。俺とフェイト、アルフ、ついでにクロノはプレシアさんのところへ行くぞ！」

「勝手に話を進めるな！それに僕をついで扱いするな！」

「まあまあ、落ち着いてクロノ」

怒鳴るクロノをユーノが抑える。今後こんな関係が続くんだろうな、この2人。

「たっくん……」

と、なのはが不安そうに俺の名前を呼んだ。．．．仕方ないな。

「大丈夫だよ。例え離れていても僕達の心はいつも繋がってる。不安に思う事なんて何もないよ」

「……うん！」

俺がそう言って笑うと、なのはも笑顔になってくれた。．．．．．
そうそう、いつも笑顔じゃないとな。

「それじゃ、行くぞ！」

「『『『『『了解！』『』『』『』』』』』」

俺はフェイト達と一緒に、庭園最深部へと走り出した。

走り出してしばらくして、最深部へ続くと思しき扉が見えてきた。

「よし！あれだな！」

そのまま突撃しようとして――

『（タツキ、こちらに急速で接近してくる物体が）』

「何だって！？」

突然のハイペリオンからの警告に足を止めた。
アラート

——ドゴンッ！

すると俺と扉のちょうど間の空間に、上から一際デカイ機械人形が落ちて来た。

「あつぶねー！サンキュー、相棒！」

『どういたしまして』

「龍姫！大丈夫！？」

「平気かい！？」

フェイトとアルフは心配してくれたらしい。そういう気遣いはあるがたいな。

「どうする！ここを通るにはアイツを倒さないと先に進めないぞ？」

「わかってる。速攻で倒すぞ！」

「うん！」

「オッケー！」

「いいだろう！」

そうして4人で攻撃を集中するが……

「バカなっ!？」

「嘘……」

「そんな……」

ヤバイ……ほとんど効いてないな。コイツこんなに堅かったか? いや、むしろコイツだけ特別製とか?

「どちらにしろ面倒な事に変わりはないか……」

どうする?

「龍姫、どうしよう!？」

フェイトが俺に聞いてくる。……仕方ない。切り札を1つ切るか。

「フェイト、アルフ、クロノ。少しだけアレの相手を任せてもいいか?」

「いいけど、何か手があるの?」

「ああ」

「……わかったよ。任せな」

「君の指示に従うのは癪だが、この際仕方ない。協力しよう」

「5分でいい。頼んだぞ！」

「了解！」

散開してヤツに攻撃を仕掛ける3人。よし、今のうちに……

「ハイペリオン、召喚魔法を使うぞ」

「タツキ、やる気ですね？」

「ああ。こんなところで足止めを喰らってる場合じゃないからな」

『わかりました。召喚魔法陣、展開します』

そして、俺の目の前に巨大な魔法陣が現れる。

「我、氷護龍姫の名にて求む。我と契約を結びし友よ。我が喚び声に
ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴンに
応え、その姿を現せ！『青眼の白龍』、召喚！」

「グアアアアア！」

魔法陣から出てきたのは、純白の体躯に青い眼をした1匹の巨龍。
某社長の魂のカードに描かれた伝説の龍である。

「えっ！？」

「な、なんだいありや！？」

「召喚魔法だつて!？」

突然現れたその存在に三者三様に驚くフェイト達。

「（我を喚んだのは龍姫か。久しいな。何用だ？）」

「ああ、久しぶりだな。いきなりで悪いんだが、アイツを破壊^{やっ}してくれるか？」

そう言つて、機械^{デカフツ}人形を指し示す。

「（なるほど承知した。あの程度、私の敵ではないわ）」

「流石だな。……そうだ。できればヤツの後ろの扉もブチ抜いてくれるとありがたいんだが……」

「（お安い御用だ）」

「よし! 3人とも、俺の後ろに集まれ!」

俺の声に反応して、フェイト達が俺の後ろに飛んでくる。それじゃ、バリアを張つて……っつと。

「いくぜ! 『滅びの——』」

——キュウウウン……

ブルーアイズの口に莫大な量の魔力が集まる。

「バーストストリーム
爆裂疾風弾」！」

——ズドォ——ン！

通路を青白い閃光が駆け抜けけると同時に、凄まじい衝撃が走った。

「「きゃあーっ！？」」

「うわあっ！？」

あまりの衝撃に声を上げる3人。
そして、全てが止んだ後には——

「（フン。他愛もない）」

身体の中央に大穴を開けた機械人形と、ブチ抜かれた扉があるだけだった。

「なんていう威力だ……」

「驚いたねえ……」

「す、凄い……凄いや龍姫！」

「フェイト！？」

突然フェイトが俺に抱きついてきた．．．．．って、ちょっと待てい！

「フェイト！嬉しいのはわかったけど、突然抱きつかれたらビックリするだろ？」

「え？……あ！？あう……／／／／」

自分が何をしていたのか気付いたフェイトは顔を真っ赤に染めると、そそくさと俺から離れた。

「う、ごめんね……」

「謝らなくていいよ。俺は別に怒ってるわけじゃないから」

「う、うん……」

「（龍姫よ。お主もなかなかやるではないか）」

「ん？……って、ああ！？忘れてた！」

こちらを見ていたブルーアイズに今更気付いた俺。．．．．．表情はイマイチよくわからないが、声の調子からして明らかに笑ってるよな。

「（それにしても可愛らしい娘だな）」

「そ、そんな……可愛いだなんて……」

ブルーアイズの言葉に赤くなって俯くフェイト。

「確かに可愛いのは俺も認めるが、別にそれだけだぞ?」

「はう……／＼／＼」

あ、ヤベ……余計な事言ったか?

「(そこまで否定するとは、逆に怪しいな)」

「もういい!これ以上茶化すようなら帰ってくれ!」

「(そうだな。邪魔者はこれで退散するでしょう)」

「だーかーらーっ!そうじゃないってば!」

「(フッフ、今回は面白いものが見られた。皆にも伝えておくしよう)」

「や、やめろ!それだけは勘弁してくれ!」

「(ではさらばだ)」

そう言つて魔法陣へと還つていくブルーアイズ。

「……さ、最悪だ……」

「だ、大丈夫?」

落ち込む俺の肩をそっと叩いてくれるフェイト。ああ、その優しさが身に染みる……

「……よし！もう大丈夫だ！それより先を急ぐぞ！」

無理矢理自分を奮い立たせ、目指す先へと進む。

「うん！」

「ああ！」

「コラ！僕を置いて行くな！」

これで障害はなくなった。あとはプレシアさん、あなたただけだ！

—Side プレシア

——ビー！ビー！

辺りに警報が鳴り響く。

「……新たな侵入者、誰かが入ってきたようね」

私は隣に浮かぶアリシアのポッドを撫でながら思う。

（フェイト……私のもう1人の娘……どうかあなただけは、幸せに生きて頂戴……）

「フェイト……ゴホッ！ゴホッ！」

咳き込む私。病は既に私の全身を蝕んでいる。……もうダメね……

その時庭園の揺れが急激に弱まり、突然目の前にモニターが開いた。

「プレシア・テストロッサ」

「くっ！」

目の前に映し出されたのは、管理局の制服を着た緑の髪の女性。来たわね……

「終わりですよ。次元震は私が抑えています。駆動炉も直に封印……あなたの元には執務官が向かっています。忘れられし都アルハザード……そしてそこに眠る秘術は、存在するかどうかすら曖昧なただの伝説です」

「……それでも、私は行かなければならないの……」

「……随分と分の悪い賭けだわ」

「わかっている。でもやらなければならない。取り戻すのよ…………こんなはずじゃなかった、世界の全てを！」

私は清算しなければならない．．．全ての過ちを．．．あの子の、フェイトの幸せの為に！

——ドカアアアン！

その時、突如として壁が崩れた。そこから出てきたのは黒衣に身を包んだ少年．．．彼が執務官ね。

「世界は、いつだって……こんなはずじゃない事、ばっかりだよ……！ずっと昔から、いつだって誰だってそうなんだ！」

「よく言ったクロノ！その通りだ！」

そしてもう1人、私のよく知る顔が姿を現した。

「氷護、龍姫……」

「やあ、プレシアさん。また会ったな。今日は会わせたい人がいるんだ」

そうして彼の後ろから出てきたのは、私の愛する2人目の娘だった。

—Side Out

「母さん！」

「フェイト……何を、しに来たの？」

自分へ近づいてこようとするフェイトを、プレシアさんは厳しい目で見つめる。

「私は……」

フェイトはゆっくりと歩み寄り、プレシアさんの正面に立った。

「私は、母さんを助けに来ました」

「っ！」

その言葉に、プレシアさんの気持ちが大きく揺れたのがわかった。頑張れ、フェイト……

「私は、母さんに喜んで欲しかった。笑顔になって欲しかった。でも、さっき母さんが見せた寂しそうな笑顔……私は、母さんのあんな笑顔が見たかったわけじゃない！」

周囲に響くフェイトの叫び。原作にはなかった、俺が見たかった光景。新たな未来が、ここにある。

「母さん……一緒に、帰ろう？」

「私は……」

フェイトがプレシアさんに向かって手を伸ばしたその時、プレシアさんの足元が崩れた。

「母さんっ!?!」

「させるかあっ!」

『アクセル・フルスロットル』

俺は今まさに落下していかうとするアリシアのポッドとプレシアさんの元へと飛翔した。

「龍姫!?!」

「うおおおおおおっ!」

間一髪のところまで2人を拾った俺は、そのまま安全な場所まで連れて行く。

「あ、あなた……」

「これ以上、フェイトを、悲しませないでくれ!あなたは、あの子の為にも、生きなきゃ、いけないんだよっ!」

「……私は、間違っていたのかしら……」

ポツリと呟くプレシアさん。俺は乱れた呼吸を整えて、それに答える。

「……さあな。だが、あなたが生きている事がフェイトにとってプラスに働く事は間違いない」

「……そう」

そう言って、プレシアさんは黙り込んでしまった。

しばらくして駆動炉の封印に向かったなのは、ユーノ、アテナが合流し、俺達はエイミィの誘導でアースラへと帰還した。

こうして今、ようやく『PT事件』は静かにその幕を下ろした。

誰も知らない、新しい物語の始まりを予感させながら……
フロローグ

第12話 『そして、誰も知らない物語の始まり（プロローグ）へ……』（後書

あとがき

龍姫 「よかった……本当によかった……」

作者 「お？何だ泣いてるのか？」

龍姫 「うるせえ！いいだろ、こんな時くらい」

作者 「別に誰も悪いとは言っていないって……」

龍姫 「……次回はいいよ無印最終回だな」

作者 「ああ。全ての決着、そして新しい始まりへの第1歩だ」

龍姫 「それじゃ、次回予告！

次回、第13話『名前を呼んで』

を、
」

作&龍 「「よろしくお願いします（な）！」」

第13話 『名前を呼んで』（前書き）

PV10、000を突破しました！ありがとうございます！

それでは本編、スタートです！

第13話 『名前を呼んで』

アースラに帰還した俺は、まずプレシアさんを医務室へ運んだ。

「さて、それじゃまずはあなたを治療しないといけないな」

「本当に大丈夫なんでしょうね？」

「まあ疑いたくなるのもわかるが、俺を信じてくれ」

「……そうね。あなたに助けられた命だもの、信じる事にするわ」

「ありがとう、プレシアさん。……つと、なのはちゃん達庭園突入組もついでに治すからこっちにきて」

「ついでって……」

「にやはは……」

「龍姫らしいかも……」

む。フェイト、俺らしいって何だよ……

「よし、全員揃ったな。じゃあいくぞ……『大地讃頌』」

全員を淡い光が包み込むと同時に、どこからか音楽が聴こえてくる。そして、それぞれの怪我が治っていく。

「綺麗……」

「素敵な音……」

「凄い……」

「こんな高位の魔法、一体どこで……」

「プレシアさん、身体の調子はいかがかな？」

「え、ええ……嘘みたいに身体が軽いわ。本当に凄いわね……」

まあ当然の結果だな。『大地讃頌』は全てのステータス異常と失われた体力を回復させる魔法だからな。

「皆大丈夫みたいだな。それじゃ本題、に入る前に……リンディさん」

「何かしら」

「これから俺と取引をしないか？」

「ふざけるなっ！管理局を相手に取引だって!？」

「黙れKY。お前には聞いてない」

「クロノ。あなたは下がっていなさい……とりあえず、話を聞かせてくれる？」

「母さ……艦長！」

なおも何かを言おうとしているが、うるさいKYは放置する。

「これは、ここ数年で管理局が起こした『隠蔽された不祥事』に関する資料だ」

そう言つて、俺は1枚のディスクを取り出した。

「っ!？」

「ちなみに、この中には今回の事件の原因である『大型魔力駆動炉実験』に関する詳細な資料もある。見せてやるよ」

「何ですって!？……やはりあれは管理局のせいだったのね……」

「そうだな」

それを聞いて、管理局組に厳しい視線を向けるプレシアさん。俺は彼女にとりあえず落ち着くよう諭すと、データのコピーを管理局組に見せた。

「これは……これが事実なら、私達はとんでもない間違いを犯してしまっていた事になるわ……」

「こんな……酷い……」

「チッ……」

データを見た管理局組は、その内容に愕然としている。若干1名は一層不機嫌になったただけだが。

「まあムチだけ与えるのも酷だからな、ちゃんとアメも用意してる」

そう言つて、俺はもう1枚のディスクを見せる。

「それは？」

「これはデバイスの関連技術について纏められた研究データだ。今の技術部なら喉から手が出る程欲しいだろうな」

ちなみにこれら2枚のディスクは、この時の為に俺が以前から用意しておいたものだ。

「その2枚のディスクが取引の材料、というわけね？」

「そうだ」

「……あなたの要求を聞かせて頂戴」

「テストロッサ親子の処分を、できる限り軽いものにして欲しい」

「バカな事を言うな！」

そこでKYが割り込んできた。・・・この野郎。

「黙れと言っただろう！……それとも、俺が強制的に黙らせてやるのか？」

「艦長！こんなヤツの言う事なんて聞く必要はありません！むしろ、コイツも逮捕すべきです！」

「クロノ、静かにしなさい」

クロノを叱り、何かを考えるように俯くリンディさん。

「どうする。判断はあなたに任せるよ、リンディ艦長」

「……わかりました。取引に応じましょう」

「……よしっ！乗ってきた！」

「具体的にはどうしてくれるんだ？」

「プレシア・テストロッサ、フェイト・テストロッサ、及びアリシア・テストロッサの3名は管理局でその身柄を保護します。そしてしばらくは監察処分。その後は自由、という事でどうかしら」

「取引成立だ。リンディ艦長、あなたが聡明な人でよかったよ」

「艦長！そんな不当な事は——」

「黙れと言っただろう。お前だって執務官を懲戒免職にされたいのか？あの時の映像は俺が持っているんだぞ？」

KYの顔の5センチ手前で振るった拳を寸止めする。

「くっ………！」

「……というわけだ、プレシアさん、フェイト。よかったな」

「氷護……あなた……」

「龍姫……」

2人は驚いた様子で俺を見てくる。

「それじゃ、アリシアのポッドをどこか広い場所に移したいんだが……どこかい場所はないか？」

「アースラ艦内だと、一番広いのは訓練室ね」

「わかった。そこにしよう」

「よし。早速始めようと思うが……その男2人。お前らは出て行け」

「なっ、また勝手な事を……」

「何だ？こんな小さな女の子の裸を見たいだなんて、お前はそんな変態だったのか？」

「クロノくん……」

「最低……」

「っ！失礼させてもらっ！行くぞユーノ！」

「わあっ！ちょ、ちょっと待ってよクロノ！」

女性陣の冷やかな視線に耐えられなくなったクロノが、ユーノを連れて出て行った。

これで邪魔者はいなくなったな。

俺はプレシアさんに頼んでアリシアをポッドから出してもらい、床に敷いたタオルの上に寝かせた。

「さつき2人にああ言った手前、俺も直接見るわけにもいかないから、誰かアリシアに服を着せてくれ」

「じゃあ私がやるわ」

「頼む」

アテナが申し出て、手早くアリシアに服を着せてくれる。病院でよく見る病人服みたいなヤツだ。

もちろん俺はその間、明後日の方向を向いておく。

「龍姫、いいわよ」

「ありがとう」

そうしてアリシアの着替えが終わったところで、アテナから声が掛かる。

「これで準備は完璧だな。それじゃ、始めようか」

「お願いするわ」

プレシアさんの返事を受けて、俺は呪文を口にする。

「『フェニックス』」

すると次の瞬間、どこからともなく現れた火の鳥が横たわるアリシアの身体をその身で包んで、激しく燃え始めた。

「アリシア！」

あまりの光景にプレシアさんが思わずアリシアの名前を叫ぶ。

「落ち着いてくれ。別にアリシアの身体が焼けているわけじゃない」

「で、でも……」

フェイトも不安そうに俺を見てくる。．．．．．「うた、大丈夫だつて。」

しばらくするとその身を焼き尽くした火の鳥は姿を消し、後にはアリシアだけが残った。そして――

「う……うん……」

軽く身じろぎをして、ゆっくりと目を開けるアリシア。

「アリシア！？」

それを見たプレシアさんがアリシアに駆け寄ってその身体を抱きし

める。

「あれ、おかーさん？」

よかった。成功したみたいだな。

「アリシア！アリシア！」

「お、おかーさん？……泣いてるの？」

アリシアが不思議そうに首を傾げる。

「いいえ……」

プレシアさんは涙を拭くと、

「少し……ほんの少し、悪い夢を見ていただけよ」

そう言ってアリシアに笑いかけた。その笑顔は優しさに満ち溢れた、母親の笑顔だった。

「さて、それじゃ俺達はここを出よう。親子の再会に水を差しちゃいけないしな。いいだろ、リンディさん？」

「……いいでしょう」

「それじゃ皆、外に出るぞ」

プレシアさん、フェイト、アリシアの3人を残して、それ以外の全員が俺を先頭に部屋を出て行くとする。すると、

「氷護！」

プレシアさんが俺を呼び止めた。フェイトもこっちを見ている。俺は他の皆を先に行かせて、1人中に残った。

「あなたには、本当に色々とお世話になったわ……ありがとう」

「龍姫。母さんとアリシアを助けてくれて……ありがとう」

そう言つて、涙を浮かべながら頭を下げる2人。

「どういたしまして。それからプレシアさん、俺の事は龍姫と呼んでください」

「ええ……ありがとう、龍姫……」

そうして今度こそ、俺は部屋を後にした。3人だけの親子の時間を、今はどうかゆつくりと噛み締めてくれ……

あの後3人には正式に保護監察処分が下り、今もアースラにいるそうだ。監察官はリンディさんが申し出たらしい。これが決まるまでに一悶着あつたようだが、俺が渡した資料をチラつかせて上を黙らせたのだとか。

「うーん！久しぶりだな、こんなにゆつくりできるのは」

「そうね。龍姫、お疲れ様」

「アテナもな」

現在俺達は海鳴に帰ってきて、元通りの生活を送っている。
今まで色々慌しかった分、こうしてゆっくりできるのが本当にありがたい。

「おい、龍姫」

しかしそんな平穏をブチ壊すかのように、アイツが突然現れた。

「……今まで何もないと思っていたら突然湧いて出やがって……何の用だ、ゼウス」

本当に何しに出てきやがった、この野郎……

「神を神とも思わないその口ぶり、相変わらずだな龍姫」

「お父様、お久しぶりです」

「アテナか。元気でやっているか？」

「はい」

「それは何よりだ。……龍姫、今日はお前に話があって来た」

「なんだよ」

「アリシア・テストロッサの蘇生についてだ」

アリシアの蘇生？

「何か問題でもあったか？原作改変はお前の望むところだったはずだが？」

「大アリだ。地獄の神ヘルがお怒りなんだよ。死者の魂を勝手に戻すな、とな」

「お前、一応最高神だろ？何とかしろよ」

「簡単に言ってくれるな。……だが、いいだろう。今回限りで俺が何とかしてやる」

「任せた」

「だが、2度目はないぞ。もしまた今回のような事があった時は、問答無用でお前の命を刈り取る」

「……わかった。肝に銘じておこつ」

流石にそうホイホイと死者を蘇らせるなんて事はできないよな・・・
・当然か。

「それから連絡だが、お前のユニゾンデバイスはA・S開始までには完成する」

「そうか。そりゃ朗報だ」

「お父様、頑張ってください」

「うむ。アテナがそう言ってくれるなら1000人力だな」

「．．．．．やっぱりコイツも親バカか．．．．．」

「話は終わるか？今日はフェイト達と面会できる日だから、用が済んだならさっさと消えろ」

「ほう．．．．．そうかそうか。ならば邪魔者はさっさと消えろでしょう」

何やらニヤニヤと笑みを浮かべるゼウス。

「ちょっと待て。お前、今何を考えた」

「別に何も？ではさらばだ、龍姫、アテナ」

「はい、お父様」

「待てゼウス！」

しかし俺の制止には耳を貸さず、ゼウスは消えていった。

約束の時間になり、海鳴臨海公園へとやって来た俺、アテナ、なのは、ユーノ（フェレット）の3人と1匹。

面会の場所は原作最終話のラストシーンで出てきたあの場所だ。

しばらく待っていると、魔法陣が出現してプレシアさん、フェイト、アリシア、アルフ、ついでにクロノが姿を現した。

「……君は今また僕をついで扱いしなかったか？」

おっと、だいぶ鋭くなったな。KYのくせに。

「はて、何の事だか？……っと、プレシアさんも来たんですね」

クロノの追及をとばけてかわし、プレシアさんに話を振った。

「ええ。この子にも迷惑をかけたからね」

そう言つて、なのはを見るプレシアさん。ちなみに、今の彼女の服装はあの露出の多い黒服ではなく、昔の記憶の中で着ていた普段着だ。

もうすっかり病気も治ったおかげか血色も良く、肌のハリも元通りといった様子だ。本当によかった。

「あんまり時間はないんだが、しばらく話すといい。僕達は向こうにいるから」

「おっ？KYにしては珍しい気遣いだな」

「茶化すな！……コホン、とにかくそういう事だから」

「ありがとう、クロノくん」

「ありがとう」

「それじゃ、僕も向こうに行ってるよ」

俺もその場を離れる一行について行こうとしたところで、

「ま、待つて……」

「ん？」

フェイトが俺を呼び止めた。

「龍姫にも……ここにいて欲しいんだ……」

「……いいのか？」

俺の問いに小さく頷くフェイト。

「なのはちゃんも、いい？」

「もちろんだよ」

「じゃあ、そうさせてもらうね」

その場に俺、なのは、フェイト、アリシアの4人が残る。

それからしばらく続いた沈黙を破って、フェイトがなのはに話し始めた。

「来てもらったのは……返事をする為」

「え……？」

「君が言ってくれた言葉……『友達になりたい』って……」

「あ……！うん、うんっ！」

フェイトの言葉に顔を綻ばせて、大きく頷くのは。

「私にできるなら、私でいいならって……だけど私……どうしていいかわからない。母さんに聞いてもわからないって……」

フェイトはそこで俯いたまま、なのはに問い掛ける。

「だから教えて欲しいんだ……どうしたら友達になれるのか」

「私も……わかんない……」

戸惑うフェイトとアリシアの手を取ると、なのはが強く握った。それに驚いて顔を上げる2人。

「簡単だよ。友達になるの、すごく簡単」

そうして一呼吸置いて、なのははその言葉を口にした。

「……名前を呼んで。はじめはそれだけでいいの……君とかあなたとか、そういうのじゃなくて……ちゃんと相手の目を見て、相手の名前を呼ぶの。そうしたら、2人は友達。だよ、たっくん？」

「……あれ？なのはサン？」

「ど、どうしてそこで僕に話を振るの？」

「だって、これは私がたつくと初めて会った時にたつくんが教えてくれたことだもん！」

．．．．あゝ、言われてみれば昔そんな事を言ったような．．．

「……そんな事もあったね」

「そうなの！」

そしてなのははフェイトに向き直ると、

「私、高町なのは。なのはだよ」

そう自己紹介をした。

「なの、は……」

なのはの言葉を反芻するように、フェイトが小さく呟く。

「うん！そう！」

「なのは……」

「うん」

「なのは」

「うんっ！」

返事をする度に溢れてくるなのはの涙を、フェイトがその指でそっと拭った。

「少し……わかった事がある……友達が泣いていると、同じように自分も悲しいんだ……」

「っ！フェイトちゃんっ！」

その言葉に感極まったのか、なのはがフェイトに抱きつく。なのは、フェイト、よかったな……

「龍姫。君とも、友達になれるかな……」

なのはに抱きつかれたまま、フェイトが俺の方を見た。

「もちろんだよ。改めまして、僕は氷護龍姫。これからよろしくね、フェイト。それにアリシアも」

「うん……ありがとう」

「たつき！よろしくね！」

そうして2人と握手を交わす。皆が笑顔でいられる、こんな時間がいつまでも続くことを願いながら……

― Side プレシア

少し離れたところで、私は娘達の事を見ていた。

「うつ……うつ……ぐすっ」

「あら。アルフ、どうしたの？」

私の隣ではアルフがボロボロと涙を流していた。……どうしたのかしら？

「あの子……なのはが、本当にいい子で……フェイトが、あんなに笑ってるよ……」

「そうね……」

視線をもう一度フェイトへと向ける。本当に嬉しそうな笑顔。あの子のあんな笑顔を見たのはいつ以来かしら。

そしてそのフェイトの横では、アリシアと一緒に笑っている。二度と見ることは叶わないと思っていたアリシアが笑っている姿に、私の胸にも熱いものが込み上げてくる。

それもこれも、全てはあの少年――龍姫のおかげね……

「彼は将来きつと、さらに多くの人を幸せにするんでしょうね……」

「そうですね。それが龍姫の願いですから」

近くに立っていた金髪蒼眼の女性が私の呟きにそう返した。

「……そういえばあなた……龍姫と一緒に庭園に来ていた……」

「アテナと言います。龍姫の友人にして、彼を支える者の1人です」

「そう……」

「またいつか、ゆっくりお話をしましょう」

「ええ……」

そうね。私には彼がくれた時間がいくらでもある。もう一度、今度はゆっくりと娘達と一緒にやり直すのよ……

—Side Out

第13話 『名前を呼んで』（後書き）

あとがき

作者 「うだぁーっ！」

龍姫 「うおっ！？作者が俺のような涙を流してる！？」

作者 「何度見てもこのシーンはサイコーだよ、畜生ーっ！」

龍姫 「はいはい。わかったからとりあえず涙を止めろ」

作者 「うつ、ぐすつ、うつ……」

龍姫 「すまんが作者が使い物にならないので、ここからは俺が1人で進行していくぞ」

龍姫 「これにて原作無印編は一応終わりだ」

龍姫 「『一応』と言うからにはまだあるのか？と思った諸君、正解だ」

龍姫 「申し訳ないんだが、もう1話だけ続きがある。まあ、続きと言っても簡単な後日談なんだが」

龍姫 「というわけで、次回予告だ。

次回、第14話『後日談あれこれ（仮）』

を
お
楽
し
み
に
！
」

第14話 『後日談』理想に向かって歩き出す者達』

あの日、フェイト達と海鳴公園で面会してから数日後の現在。

「説明を求める」

俺は何故かアースラに呼び出されていた。

「管理局の上層部からあなたの局入りを――」

「断る」

「……最後まで聞いてくれてもいいんじゃないかしら？」

「どちらにせよ結果は変わらないさ。俺は管理局には入らない」

リンディさんの言葉をバツサリと斬って捨てる。

「用件がそれだけなら、俺は帰らせてもらうぞ。まったく、とんだ無駄足だった」

「待つて。もう1つ、あなたに聞きたいことがあるわ」

「何だ？」

「あなたが渡してくれた2枚目のディスク、あれを技術部に持っていったら、中のデータを見た局員達が皆驚いていたわ。私も少し見せてもらったけど、あれだけの情報をあなたはどこで入手したのかしら？」

「黙秘する。その質問に答える義務もないしな」

「そう……」

「それで終わりか？」

「……そうだわ！フェイトさん達に会っていかない？」

「つい先日あんな別れ方をしておいて、今また会つのは正直氣まずいだけなんだが……」

「それくらいはいいでしょう？」

「……わかった。少しだけだからな」

「ええ」

何だか上手い具合に丸め込まれた気がしないでもないが、この際気にしないでおこう。

「今ならフェイトさんが食堂にいるはずよ」

「了解」

そうして俺は食堂へと向かった。その先に待つ運命も知らずに……

「さて、フェイトはどこに……って見つけた」

食堂に着いた俺は早速中を見渡すと、奥の方にフェイトの姿を見つけた。

「おーい！フェイトーっ！」

「え！？龍姫！？」

そりゃ驚くよな、普通。俺はそのままフェイトの元へ歩いていった。

「ど、どうして龍姫がここに！？」

「なんか突然アース^ニスラに呼び出されてな、話のついでにリンディさんに聞いて寄ったんだ」

「何の話だったの？」

フェイトが興味津々、といった様子で聞いてきた。……ちょっ、フェイト近いつて。

「あ、ああ……管理局に入らないか、って話だったよ」

「へえ……それで？」

「断った」

「え？どうして？」

「俺が個人的に好きになれないから」

「ふふつ、龍姫らしいね……」

俺の答えを聞いて吹き出すフェイト。 そんな笑う事か？

「 あ、そうだ！せっかくアースラに来たんだし、模擬戦しない？」

「は？」

何故俺がアースラに来た ↓ 模擬戦なんて話になるんだ？

「ど、どうしてそんな事を……？」

「私ね、前から一度龍姫とは戦ってみたかったんだ！」

目をキラキラさせて胸の前で小さく拳を作るフェイト。
くっ !まさかこの頃から既に戦闘^{バトル}マニアの気があったとは

「いや、でも俺にとっては突然の事だし……」

「 ダメ？」

グハッ！？ま、まさかの涙目+上目遣いコンボだど！？や、ヤバい！これは断ったら罪悪感が !

「 わかった。ただし1回だけな」

「ホント！？ありがとう龍姫！」

俺が了承の返事をする、途端に笑顔になるフェイト。．．．．
フェイト、恐ろしい子！

そうしてやってきたアースラ訓練室。

何故かいつの間にかギャラリーができていて、そこにはプレシアさん、アリシア、アルフ、リンディさん、クロノがいた。

「……って、ちょっと待った！リンディさん！あなたは艦長だろうか？こんなところにいていいのか！？」

『それなら心配は要らないわ。艦の事はエイミィに任せてきたから』

．．．．それでいいのか艦長、っていうか哀れエイミィ．．．．

『そういえば、龍姫の戦闘は初めて見るわね。彼、強いのかしら？』

『たつき、つよいのー？』

『アタシが知ってる限りじゃ、少なくともフェイトより数段上だよ』

『確かに、あの時の戦闘を見る限りではそうだな』

『それは楽しみね』

本人達に構わず、好き勝手言っているギャラリー。まったく、コイツらは……………

「それじゃフェイト。ルールはなのはとの決闘の時と同じな。どちらかがギブアップか気絶したら試合終了」

「うん」

「それから、俺は召喚魔法は使わない」

「……そうだね。使われたら今の私じゃ勝ち目ないし……」

「それにこの訓練室ももたないしな」

「あはは……………」

俺の返事を聞いたフェイトが乾いた笑いを漏らす。

『開始の合図は僕が出そう』

そうこうしていると、クロノが通信を入れてきた。

『2人とも準備はいいか？』

「いつでも」

「いいよ」

『それじゃ、試合……開始っ！』

そうして俺達の戦いの火蓋は切って落とされた。

—Side フェイト

「フォトンランサー……ファイヤー！」

「その程度の攻撃、俺には効かないぜ！」

模擬戦が始まってもうすぐ5分が経過する。でも、私はまだ龍姫に一度も有効打を入れられないでいた。

「くう……」

「そろそろこっちも行くぞ！」

しかもさっきまで龍姫は私の攻撃をかわすか防御するばかりで攻撃してくる気配はなかった。それが突然、私の方へと向かってくる。

「バルディッシュ！」

『Scythe Form』

私はバルディツシュを鎌サイスに変えて、龍姫を迎え撃つ。

「はあああああつ！」

『Arc Saber』

私は龍姫に向かって魔力刃から斬撃を飛ばした。

「残念だが、それも……っ！」

龍姫はそれも拳で簡単に叩き落とすと、さらにスピードを上げてこっちへ突っ込んでくる。

「だつたら……！」

『Blitz Action』

高速移動魔法で瞬時に龍姫の後ろへと回り込んだ。死角から首筋への衝撃打ショックブロー。これなら……！！
そうしてバルディツシュを振り抜いたその時、

「今のはなかなかいい攻撃だ。だが、まだ甘い」

『ホールディングシールド』

龍姫の張ったシールドによって、鎌の魔力刃は受け止められていた。しかもシールドが刃を噛んでいるせいで動かせない。
私は焦って外そうとしたけど、全然取れそうにない。

「ここまでだな」

そこに、すぐ近くから龍姫の声が聞こえてきた。見ると、龍姫の手刀が私の首に突きつけられていた。

．．．．完敗だ。

「そう．．．みたいだね。うん、降参」

「ハア．．．」

私がギブアップを宣告すると、龍姫は大きく息を吐いて私から離れた。

「．．．．どうだ？実際にやってみた感想は？」

「うん．．．．やっぱり今の私じゃまだまだだね。でも、いつか必ず勝つてみせるよ」

「そうか、それは楽しみだ」

「待ってて。すぐに追いつくんだから」

本当に楽しそうに笑う龍姫を見て、思わず私も笑ってしまう。

「．．．．また、模擬戦してくれる？」

せっかくだから、ちょっとお願いをしてみる事にした。これくらいならいいよね．．．．？

「そうだな。と言っても、そう何度もここに来る事はないと思うが」

「そっか……」

そっくだよね……。龍姫は私達とは違う世界にいるんだし……。ちよつと残念。

『そういう事なら管理局に……』

「それはさっき断つただろう？二度も言わせるな」

『そんな事言わずに……』

「くどい」

訓練室の外からリンディさんが通信を入れてきたけど、それを断つてしまう龍姫。……。そっだ！

「龍姫。やっぱり管理局に入ろうよ、私と一緒に」

「なっ！？フエイト、本気か！？」

私の言葉を聞いて、大きく驚く龍姫。私はさらに話を続ける。

「うん、今決めた。私達みたいに悲しい事件に巻き込まれた人達を、私は助けてあげたい。……。龍姫がそうしてくれたように」

「……その道は決して報われるばかりじゃないぞ。むしろ悲しい事の方が多だろう。それでも、お前は前へ進めるか？」

私にそう聞いてきた龍姫の目は、真剣そのものだった。

龍姫が私の事を心から案じてくれている事を嬉しく思う反面、だからこそ私も真剣に答えなきゃいけない！

「……うん。それも全て覚悟の上だよ。それでも、私は前を向いて進み続ける」

「……………」

そうして無言で私を見つめる龍姫。沈黙が、今はとても痛い。それでも私は決して龍姫から視線を外さない。

「……本気なんだな」

龍姫は小さく何かを呟くと、

「わかった。フェイト、俺もお前の目指す道を応援する。……リン
デイさん。管理局入りの件、承諾しよう」

『ほ、本当に！？』

そんな事を言ってくれた。

「いいの、龍姫？」

「ああ。フェイト、俺も今決めたよ。俺が目指す理想の為に、できる事は何でもやってやる！」

力強くそう宣言した龍姫。

「そっか……龍姫の目標は私にはわからないけど、私で力になれる

事があつたら必ず助けに行くよ」

「そうだな……うん。その時はよろしくな、フェイト」

「うん！」

こうして私は自分の夢を見つけ、それに向けて努力していく決意を固めた。

— Side Out

アースラからの帰り道。

俺はついさっきの出来事を思い返していた

……それにしても驚いたな。まさかこの時期にフェイトがこんな事を言い出すなんて。

「これも俺が介入した影響、なのか……？」

そう自問するが、残念ながらその答えを持ち合わせていない。

結局フェイトは原作通り嘱託魔導師試験を受験する事になったが、時期がだいぶ早い。

っていうか、これだとなのはより早く嘱託の資格を取るんじゃないか？

それにこの調子だと裁判も早期に終わって、テストロッサ家は『闇の書事件』開始までに海鳴に来るんじゃないかなろうか。
そんな考えが頭をよぎった俺だった。

．．．．．ところで、リンディさんから聞いた俺の局入りに関する条件は以下の３点だった。

- ・魔力測定などの各種検査の受診
- ・魔法に関する筆記及び実技試験の受験
- ・上記２項目の結果次第だが、最低でも尉官待遇

もう少し厳しい条件が来るものと思っていた俺は、正直これを聞いて拍子抜けした。

検査や試験は面倒な事この上ないが、自分でやると決めた以上否やはない。

．．．．．それにしても８歳のガキをいきなり尉官待遇で入局させるなんて、管理局の上層部は頭おかしいだろ。

もっともヤツらはそうやって俺を飼い慣らそうとでも考えているんだろうが、生憎お前らに都合良く動くお人形マリオンネットなんかになる俺じゃないぜ？

とにかく、俺の目先の目標は管理局の試験という事が決まった。
誰が試験官になるのか、ちょっと気になったりもするが、誰が相手
でも絶対に合格をもぎ取ってやる！

……と、まあこうして『PT事件』は本当にその幕を下ろしたとき。
F i n .

第14話 『後日談〜理想に向かって歩き出す者達〜』（後書き）

あとがき

作者 「これにてホントに無印編終了〜！」

龍姫 「お疲れさん」

作者 「おう。龍姫もな」

アテナ 「……私には何もしですか？」

作者 「そんなわけないって。アテナもお疲れ」

アテナ 「ええ」

龍姫 「今回の終わりを見るに、次はすぐにA・S編に入るわけじやなさそうだな」

アテナ 「そういえばそうね」

作者 「まあオリジナルの話を1つか2つ入れる予定だ」

龍姫 「それから、お前最近こっちにかかりきりでもう片方を全然更新してないだろ」

作者 「うつ……それは……」

アテナ 「鏡護さんからメールが来てるわよ？『そろそろこっちも

更新してくれ』と」

作者 「ぐう……」

龍姫 「まあ自業自得だな」

アテナ 「で、どうするの?。」

作者 「鏡護、すまん!もうしばらくこっちを進めたらそっちに戻るから!。」

龍姫 「あ、逃げた」

アテナ 「仕方ないわね……じゃあ後は私達で締める?。」

龍姫 「そうだな」

アテナ 「それでは、ここまでこの作品にお付き合いくださった皆さんに感謝を」

龍姫 「そして、これからも引き続きこの作品をよろしくな!。」

アテナ 「というわけで次回予告です。

次回、第15話『龍姫の管理局観光(?) 日記(仮)』

を」

龍姫 「乞うご期待!。」

第15話 『未来改変へ向けた種を蒔こう』

皆さんこんにちは。氷護龍姫です。

今日俺は時空管理局本局へと来ています。

いやあ、次元の海に浮かぶ巨大建造物。凄いですねえ……………

……………やめた。こんなの俺のキャラじゃない。

というわけで前述の通り、俺は今時空管理局本局に来ている。

先日話した俺の局入りの条件、各種検査と筆記試験を受ける為だ。

「ハア……………これで俺の横を歩いてるのがKYじゃなければな……………」

「文句を言うなら帰ってくれ」

「冗談だよ。これくらいわかれ」

「まったく……………本当に君の相手は疲れるよ」

今日の俺の案内役はクロノだった。よりによってなんでコイツなんだよ……………

「ハア……………」

「次は何だ？」

「えっと……………魔力検査だな」

「よし。ならこっちだ」

そう言ってさっさと歩いていくクロノ。．．．俺を置いていく
気か？

「迷子になったらどうする気だよ……」

そう愚痴りながらも後をついていく。

「これは……すごいですね。クロノ執務官もご覧ください」

「どれどれ……って、これは！？本当なのか？」

「はい。間違いありません」

医局のとある部屋で機械の前に立たされている俺をよそに、医務官
の男とクロノが何かのモニターを見ながら話をしている。

「おい、クロノ。何をそんなに驚いてるんだ？」

「君の潜在魔力を計測したんだが……」

「それがどうかしたか？」

「測定結果はEXランク……実質上の計測不能だ」

「へえ……それってすごいのか？」

「すごいなんてものではありませんよ！なんせ管理局創設以来、初めての事ですから！」

医務官が興奮したように捲し立ててくる。男に近寄られても嬉しくないわっ！

「バカみたいな魔力の持ち主だとは思っていたが、まさかここまでとはな……」

「バカとはなんだバカとは。失礼なヤツだな」

「やっぱり君は規格外だよ」

「そりやどうも」

「……僕は皮肉のつもりで言っただがな」

そんな事わかってるって。

そうして俺達は部屋を後にした。

「これから最後の筆記試験まではしばらく時間があるな……どこか行ってみたいところはあるか？」

あの後も色々と検査を受けた俺は、最後に筆記試験を残して時間を持て余す事になった。

そこでクロノからそんな提案があった。

「そうだな……」

どうするか……無限書庫を見てみたい気もするし、技術部にも行ってみたいし……むしろ両方行くか？

「それじゃ、無限書庫をちょっと覗いてから技術部に行きたい」

「無限書庫？……また珍しいところに行きたがるんだな」

「まあちよつとな……」

これからへの布石だよ。

「わかった。それじゃあ、案内しよう」

そう言っただけで、俺達は歩き出した。

「ここが無限書庫だ」

「中はどうなってるんだ？」

「きつと滅茶苦茶だと思う」

「何だよ。整理とかしてないのか？」

「昔から適当に資料を突っ込んでいったせいで、もう収集がつかないんだよ」

「そこを何とかしようと思えよ。折角の巨大データベースだろ？腐らせるのはもったいないじゃないか」

「そうは言うが、こんな状況を改善する事なんて……」

「ユーノとかどうだ？アイツ確か遺跡発掘とか、探索が得意な部族の出身だっただろ」

「なるほど……確かにアイツに依頼してみるのは面白いかもしれない」

「だろ？」

とまあ、未来への小さな『種』を蒔いておく。
これで状況が動けば、これからの事件に対してより迅速な対応が可能になるからな。

「中は見えていくかい？」

「いや、いい。技術部の方に連れてってくれ」

「わかった」

そうして俺達は無限書庫を後にした。

「着いたよ。僕は執務室でちょっと仕事を片付けてくるから好きに見学していくといい」

「仕事ってお前……試験会場へはどう行けばいいんだよ」

「安心しろ。試験に間に合うように時間を見て迎えに来るから」

「それを先に言え」

といったやりとりを終えてクロノと別れた俺。それじゃ、行くとするか！

「失礼しまーす！」

「あら？君は……見ない顔ね。誰かしら？」

1人の女性が俺の入室に気付いて声を掛けてきた。……よかった。目当ての人物はいたようだ。

「僕は氷護龍姫って言います。今日は管理局入局の為の検査と試験でこちらに来ていて、今はちょっと時間が余ったので局内の見学をしてるんです」

「ああ、だからか。それで技術部を見に来た、って事ね？」

「はい」

「そういう事なら歓迎するわ。あ、私はここのスタッフの1人でマリエル・アテンザって言うの。気軽にマリーって呼んでね」

俺に声を掛けてきた人物は、A・s及びStrikersにおいて主要メンバーのデバイスのメンテなどを担当していたマリーさんだった。

彼女に会える事を期待してここに足を運んだので、無駄にならなくてよかった。

「よろしくお願いします、マリーさん。……そういえば、あのディスクは役に立ちましたか？」

俺は挨拶もそこそこにそう聞いた。

「え？ディスク？……って、ええ！？まさか君がアレの提供者！？」

おおっ、驚いてる驚いてる。

「ええ。あれは元々僕が持っていたものですよ」

「驚いた……あれだけの技術を知っているんだから提供者は結構な歳の人だと思ってたのに、まさか君みたいな子供だったなんて……」

「あ、この話は内密にお願いしますね？今のところ知ってるのはマリーさん以外だと、リンディ提督とクロノ執務官だけですから」

「そ、そんな秘密を私なんか話してよかったの？」

「ええ。マリーさんには知っておいて欲しかったんです。……実はあなたに協力して欲しい事があります」

「協力して欲しい事？……何かしら？」

「それはですね……」

ふっふっふ……今から打てる手は全て打ってやるぜ？

そうして、俺はしばらくマリーさんと話しこんだ。

「龍姫、迎えに来たぞ……って何をやってるんだ君は」

「何って、見りゃわかるだろ？デバイスのメンテだよ」

「あ、クロノ先輩。どうもです」

「マリー……君も一緒だったのか」

「はい！あ、そうだ！聞いてください！龍姫君のデバイス、インテリジェントなのにデータ容量がすごいんですよ！」

「……そうなのか？」

いまだ興奮冷めやらぬマリーさんの話を聞いたクロノが俺に聞いている。

「まあな。ハイペリオンはちょっと特別製だね」

「ふうん……それよりそろそろ時間だ。筆記試験の会場に行くぞ」

「了解。それじゃマリーさん、また今度。次来る時は多分僕も局員になってると思いますんで」

「うん。また色々話を聞かせてね、龍姫君。それから試験、頑張つて」

「はい。ありがとうございます」

「うーん！終わった終わった！」

「お疲れさま。これは僕のおゴリだ」

「お、サンキュー」

クロノから投げ渡された缶コーヒーを受け取る。

あれから筆記試験を受けた俺は、今本局内の休憩スペースにいる。試験の方は結構できたと思う。多分合格点は取れているだろう。

「後は明後日の実技試験だけだな」

「ああ」

「まあ君の事だ。別に心配する必要は……ないな」

「ヒデエな」

「一応、応援はしてやる。せいぜい頑張れ」

「ハッ！そんな事、お前に言われるまでもない」

口ではそう言いながらも、俺達は笑っていた……

「……それじゃ、俺は帰るとするか」

しばらく話してから、俺はそう言って立ち上がった。

「転送ポートの場所はわかるか？」

「ああ。大丈夫だ」

「なら今日はここでお別れだな」

「おう」

そう言ってクロノと別れ、俺は転送ポートから海鳴へと帰った。

第15話 『未来改変へ向けた種を蒔こう』（後書き）

あとがき

龍姫 「なんか今回の俺、色々やってるな」

作者 「まあ、どれも原作改変への布石だからな」

龍姫 「そうだな。ところで……」

作者 「何だ？」

龍姫 「魔力がいつの間にかEXランクになってるんだが？」

作者 「なんだそんな事か」

龍姫 「そんな事が、じゃないだろ。ちゃんと説明しろ」

作者 「無印編を通して成長したんだよ」

龍姫 「なるほど」

作者 「ちなみに、以下のようにパワーアップした」

【スペック】

筋力：B
↓ A+

魔力：A A A + ↓ E X

気力：A A A - ↓ E X

耐久：A ↓ A A A

敏捷：B + ↓ A A

幸運：B ↓ B

【保有スキル】

武術の心得：B ↓ A

龍召喚：A ↓ A A A (神龍クラス以外は全て召喚可能)

龍姫 「へえ……」

作者 「次回は龍姫の管理局入局編その2、実技試験編だな」

龍姫 「おう！試験官が誰なのか、ちょっと楽しみだ」

作者 「それでは次回予告！

次回、第16話『道は自分で切り拓くもの、立ちはだから壁を破れ！（仮）』

を、
」

龍姫 「よろしくな！」

第16話 『道は自分で切り拓くもの、立ちはだかる壁を破れ!』 (前書き)

ユニーク2、000を超えました! 読者の皆様、ありがとうございます!

これからも応援よろしくお願いします!

それでは、本編スタートです!

第16話 『道は自分で切り拓くもの、立ちはだかる壁を破れ!』

あれから2日。

俺は再び時空管理局本局へと来ていた。

今日はいよいよ実技試験だ。

「それにしてもすごいところね。流石、管理局の名前は伊達じゃないって事ね」

「まあそうだな」

今日は俺の他にアテナもいる。

別に使い魔というわけではないが、彼女は俺のパートナーだ。当然、一緒に試験を受けることになった。

「そういえば面接の方はどうだったんだ？」

「特に問題もなく済んだわ」

「そりゃよかった」

ちなみについさっきまでアテナは面接の為、別の場所に行っていた。面接というのは、アテナの人柄を知る為だとか。

「龍姫、いよいよね……」

「ああ」

『お2人さん。そろそろいいかな?』

そこに突然通信が入り、目の前にモニターが表示された。そこに映っていたのは――

「エイミィか。こっちは準備オツケーだよ」

「久しぶりね」

『うんうん、久しぶり。……っと、それじゃ行くよ?』

「「了解」」

返事をすると同時に、俺達は試験会場へと飛ばされた。

何でも受験者の持つているあらゆる技能を試験する為には、本局の訓練室ではダメらしい。

あっという間に転移して、ここはどこかの無人世界の森の上空。

『それでは受験番号1番の方、名前と出身世界をどうぞ』

「名前は氷護龍姫。出身は第97管理外世界『地球』の海鳴市だ」

『確認しました。それじゃ、まずは儀式魔法の実践から!』

「了解」

そうして、いよいよ試験が始まった。

まずは儀式魔法という事で、俺は超長距離次元跳躍転送と結界魔法を見せた。

『儀式魔法2種、無事確認しました。次は……召喚魔法だね』

「了解」

さて……誰を呼ぼうか？

「うーん……そうだ！アイツにしよう！」

「龍姫、誰を呼ぶつもり？」

「星屑の龍だ」

「なるほどね」

アテナにそう答えて、俺は精神を集中させる。

「我、氷護龍姫の名にて求む。集いし願いよ、新たに輝く星となり
光指す道となれ！飛翔せよ『スターダスト・ドラゴン』！」

「クワアアアアッ！」

魔法陣より姿を現したのは、大きな白銀の翼を広げた1匹の龍。

「（……龍姫か。私に何か用か？）」

「あゝ、別にそれほど大したようじゃないんだ（今、管理局の試験中でな）」

「（……なるほど、承知した。それで、何をすればいいんだ？）」

「そういえば聞いてなかった。エイミィ、この後はどうすればいいんだ？」

『うわあ、綺麗……って、龍姫君？何か言った？』

「喚んだのはいいんだけど、これからどうすればいいのか聞いたんだが……」

『あ、ごめんごめん。えっとね、とりあえずその龍に何かやらせてくれる？』

「了解。……というわけだから、1発派手にいくぞ？」

「（……わかった）」

「それじゃ……響け！『シューティング——』」

——シューオオオッ！

スターダストが開いた口に魔力が集中する。

「——ソニック」!

——ズドォ——ン!

解き放たれた魔力が一直線に伸び、射線上にあった木々を薙ぎ払った。

「（……これでよかったか？）」

「ああ。ありがとう」

そうしてスターダストは魔法陣へと還った。

『召喚魔法確認……いやあ、それにしてもビックリだね』

「そうか？」

『うん。あんな高位の龍を暴走の問題なく使役するなんてすごい事だよ?』

「うーん……俺にはわからん。それにアイツらは友達だし」

『その感覚が私にはわからないよ……』

「で、この後はすぐ次の試験か？」

『ううん。1時間休憩だから、お昼を食べて一休みしてね』

「はいよ」

そのまま俺とアテナは持参した弁当を食べて、しっかり休憩を取った。

『さーて！お昼と休憩は済んだかな？最後は実戦訓練だよ！』

「おう！気合充分だ！」

「私も万全よ」

『それじゃ、これからそっちに試験官が行くから頑張ってね』

「了解」

そうして通信が切れた。

「試験官、一体誰が来るんだろうな」

「さあ……誰かしらね」

正直、これが今回の最大の不安要素だ。そんな話をしていると、俺達の数メートル先に転移ゲートが開いた。そしてそこから姿を現したのは――

「んなっ！？（まさかあなたが試験官だったのか！？）」

俺は今の台詞を咄嗟に飲み込んだ自分を褒めてやりたいと思った。そう。俺の目の前に現れた人物。それは――

「今回、君の試験官をさせてもらうゼスト・グランガイツだ」

Strikersにおいてヴォルケンリッターを圧倒する戦技を見せ、作中で壮絶な最期を迎えた古代ベルカの騎士、ゼストさんだった。

ヤベえ、まさかこんなところでこの人に会えるとは思わなかったぜ
・
・
・

「流石にランクEXともなると、戦闘試験をできる魔導師はいないという事でな。一応局内では最高クラスの私に声が掛かったんだ。よろしくな」

「よろしくお願いします」

試験という事を差し引いても、こんなすごい人と戦えるなんてわくわくしてくる。

『まずは龍姫君の単身戦闘力を見るから、アテナさんは見学しててね』

「はい」

そう言つてアテナは俺達から距離をとる。

「それでは始めよう。準備はいいかな？」

『Start Up』

そう言つて自身の武器である槍を構えるゼストさん。
いくら魔力で上回っている相手とはいえ、まだまだ実戦に慣れていない俺がこの人に届くかどうかはわからない。

．．．．それでも、ただ全力でぶつかるだけだ！

「ああ、いつでも！」

そうして、俺対ゼストさんの戦闘試験がその幕を上げた。

—Side ゼスト

「うおおおおっ！」

「はああああっ！」

龍姫という少年と戦闘試験を開始してもうだいぶ時間が経った。

彼と戦うにあたり、私は驚いた。彼は私の槍のような武器を所持しておらず、己が拳足を武器にして戦うのだ。

またその戦闘スタイルも独特なもので、相手の後の先をつくカウン

ターを主体としている。
シールド出力も非常に高く、守りも堅い。この年齢でこの力、将来がとても楽しみだ。

「だが、やはりまだまだ甘い！」

「うわあっ!？」

私が横薙ぎに払った槍に、地上まで吹き飛ばされた。

「はあ……はあ……」

息を荒げる少年。そろそろ体力も限界に近いのだろう。

しかし、よくここまで立ち向かってきたと思う。彼のような人材が管理局にいれば、この先の未来はきっと明るくなるだろう。

「ここまでだな。少し休憩を挟んでから次に――」

「待てよ」

試験終了を告げようとしたところで彼が私の言葉を遮った。

「勝手に終わらせてもらっちゃ困る」

「ほう……まだやれるか」

「当たり前だ！」

そう言って鋭い目で私を見てくる少年。……本当に面白い子

だ。

「いいだろう。ならば受けて立つ！」

彼の意気に応えて、私も槍を構えなおす。

「さあ、かかってこい！」

— Side Out

「さあ、かかってこい！」

ゼストさんが槍を構えなおしてこちらに呼びかけてきた。

「（ハイペリオン、魔力チャージはどれくらいできてる？）」

『（現在85%といったところです）』

「（わかった。そのままチャージを続けてくれ）」

『（了解です。……しかし、どうしますか？）』

「（『アレ』を使う）」

『（……本気ですか？）』

「（ああ。あの人に勝つ為には『アレ』しかない）」

『（わかりました）』

「（それじゃ、いくぞ！）『咸卦法』！」

『咸卦法』は魔力と気を融合させて爆発的な力を得る、別名『究極・アート技法』とも呼ばれる高等技術だ。

習得してからまだ日が浅く出力も若干不安定だが、ここはやるしかない！

「……まだそんな奥の手が残っていたとはな」

俺を見てゼストさんが驚いている。ここからは短期決戦だ！一気に決める！

「はあああああっ！」

超高速移動で一気に距離を詰め、ラッシュをかける。

「ぬ……くう……」

攻勢に打って出た俺に対し、ゼストさんは防戦せざるを得ない状態になる。

「まだまだあーっ！」

さらにスピードを上げて、攻めて攻めて攻め続ける。

『（魔力チャージ、100%に到達しました）』

．．．．きたっ！これでフィニッシュだ！

「喰らえっ！『コキユートスバレット』！」

触れた相手を凍結・拘束する俺の拳がゼストさんの身体に刺さる。

「ぬおおおおっ！」

当たった場所からバリアジャケットが凍りつき、身動きが取れなくなるゼストさん。

俺はその首に手刀を突きつけ、

「俺の．．．勝ち、だな．．．」

「ああ、そして私の負けだ」

勝利宣言をした。

——クラッ

あ．．．．マズ．．．．

急に暗転した視界になす術もなく、俺は意識を失った。

― Side アテナ

つい先程決着した龍姫と騎士ゼストの戦いを見守っていた私は、突然龍姫の身体が揺らいだのに気が付きました。

「龍姫!？」

そのままフラリと倒れる彼の元に急いで駆けつけ、その身体を支えます。

「龍姫、大丈夫!？龍姫!？」

私が何度呼びかけても返事はありません。どうやら完全に気絶しているようです。

慣れない『咸卦法』の全力使用のせいで魔力・気力とも使いすぎたんですね。

「まったく……あなたも大概無茶をするんだから……」

私はそんな龍姫に思わずそう零してしまいます。

「その子は大丈夫か？」

私のところに騎士ゼストが近づいてきます。彼も突然倒れた龍姫を

心配してくれたんですね。

「はい。見たところ、魔力と気の過剰消費で気を失っただけのようです」

「そうか。それを聞いて安心した」

そう言っただけで表情を和らげた騎士ゼスト。

「ご心配をおかけしました。数日休めば回復すると思いますので」

「そうだな。……しかしそれにしても、この子のような管理局にいてくれれば次元世界の未来は明るいだろうな」

「そうですね……ですが、龍姫1人が背負うには重すぎる責任です」

しかしそれでも、龍姫はこの世界の悲しみを救う為に1人でも戦おうとするでしょう。

最初は単なる知的好奇心から龍姫のサポートを申し出た私ですが、最近になってそんな危うい彼を自分が少しでも助けられたら、と思うようになりました。

彼が自分の周囲の世界を護るなら、私が彼自身を護ります。

私は改めて、そう決意を固めました。

あれから目を覚ました時、俺は自宅のベッドで寝ていた。

何故自分がこんな状態なのかわからなかった俺は、ベッド脇に置かれたハイペリオンに事情を聞いてみた。

すると、曰くあのゼストさんとの戦闘終了後に意識を失った俺はあれから3日間眠り続けていたとの事。

「……って、あれから3日！？待ってくれ！俺の試験はどうなったんだ？」

『（それでしたら、先程タツキ宛てにメッセージが――）』

「龍姫ーっ！起きて……っ、よかった！目が覚めたのね？」

ハイペリオンが何かを言いかけたところでアテナが部屋に入ってきて、起きていた俺を見て一瞬驚くと心配そうに駆け寄ってきた。

「アテナ……心配かけたな。もう大丈夫だ」

「よかった……」

若干目が潤んできているアテナ。本当に大変な心配をかけてしまったみたいだ。

「……そういえば、アテナは俺の試験がどうなったか知ってるか？」

「いいえ。知らないわ」

『タツキ。あなた宛てにメールが届いていますよ。差出人はリンデ
イ提督です』

「本当か！？それで内容は！？」

『今表示します』

ハイペリオンがそう言うのと目の前にモニターが現れて、そこに1枚
の文書が映し出された。
そしてその文書には次のようなことが書かれていた。

【辞令】

下記の者の時空管理局入局を認め、特務捜査官（1尉相当）の職
を与える。

ミッド式空戦SSSランク魔導師 氷護龍姫

「……これはつまり？」

「管理局入局が決まったって事ね」

『そついつ事ですね』

「いよっしゃああああっ！」

アテナとハイペリオンの答えを聞いて、俺は喝采を上げた。

『タツキ、まだ続きがありますよ』

「そうか？どれどれ……」

また、下記の者をその補佐官に任命する。

ミッド式空戦S+ランク魔導師 アテナ・グラウクス

「……お前、いつの間にファミリーネームなんて考えたんだ？」

「あら、だいぶ前から決めてたのよ？」

「っていつかグラウクスって、ラテン語のフクロウだったか？」

「流石は龍姫。よくわかったわね」

「女神アテナといえば、フクロウはその象徴として有名だからな」

「……でも、これで龍姫の目指す未来への第一歩は踏み出せたわね」

急にアテナが真剣な顔で俺にそう言ってきた。

「ああ。でも、全てはここからだ」

．．．．そう。１０年後の戦いに向けて、俺は今やっとスタートラインに立ったに過ぎないのだから．．．．

後日この事をなのはに話したら一応喜んでくれたものの、何故かしばらくへソを曲げられてしまった。

フェイトの方はリンディさん経由で話を聞いていたらしく、自分の事のように喜んでくれた。

さて、いよいよ次はA・S編への介入開始だ！

第16話 『道は自分で切り拓くもの、立ちほだかる壁を破れ!』 (後書き)

あとがき

作者 「管理局入局おめでと〜!」

龍姫 「おう。サンキュー!」

作者 「これで色々と前準備は整ったな」

龍姫 「まあそうだな」

作者 「そして次回からはお待ちかねのA・S編へ突入だ!」

龍姫 「今度ははやてとヴォルケンリッター、それにリインフォー
スだな」

作者 「果たして龍姫は如何なる手を打ってくるのか!」

龍姫 「今度も必ず最後は皆笑ってハッピーエンドだ!」

作者 「それでは次回予告!

次回、第17話『良い人間関係を築くには第一印象が肝心(
仮)』

を」

龍姫 「お楽しみに!」

第17話 『良い人間関係を築くには第一印象が肝心』

第17話 『良い人間関係を築くには第一印象が肝心』

『PT事件』の終結からおおよそ2週間が過ぎようという今日この頃。

「確かここだよな」

先日無事管理局入りを果たした俺は、現在海鳴図書館の前に立っている。

今日俺がここへ来た理由。それは次に起きる『闇の書事件』の中心人物、最後の夜天の主こと八神はやてに接触する事。

5月が終わり6月になれば、すぐに闇の書が覚醒する。

ヴォルケンリッター

守護騎士達が現れる前に、はやてとコンタクトを取っておきたかったのだ。

それに早くから動いていれば、必ず『ヤツら』が慌てて動き出すはず。

『ヤツら』の計画を潰す為にも、これはやらなければならない。

「これで今日は来てなかった、なんてオチは勘弁してくれよ……」

などと独り言を呟きながら図書館内を歩き回る俺。

しばらくして、物語のコーナーで目当ての人物を発見した。

「んしょ……うん……」

その人物、はやては車椅子から懸命に手を伸ばして高いところにある本を取ろうとしていた。

これは話しかけるチャンスだな。

「取ろうとしたのはこれかな？」

「あ、ありがとう」

棚から本を取って、はやてに渡しながら話しかける。

「他に欲しい本はある？取ってあげるよ」

「あ……気にせんといってください。自分で何とかしますから」

「そんな事言わずに。困ってる君を助けたいと思ったただけなんだけど、ダメかな？」

我ながら卑怯な聞き方だとは思うが、この際気にしないでおう。

「あ、えつと……／＼／＼」

何故か顔を赤くして俯くはやて。……あれ？まさかフラグ立った？

「遠慮なく言ってね？」

はやての反応はとりあえず脇に置いて（考えたくないだけ）、ま

た話しかける。

「そ、それじゃあ、あそこのあれと、あれを……」

「任せて」

それからまた数冊の本を取って、俺達は館内の談話スペースに移動した。

「さっきは助けてくれてありがとうな。わたし、八神はやて言います。君はなんて名前なん？」

「僕は氷護龍姫。聖祥大附属小の3年生だよ」

「へー。ほんなら、わたしと同じ年やね。……ふうん、龍姫君かあ……／＼／＼」

そう言って、頬を染めるはやて。こりや確定、だよなあ…………はあ…………

『（タツキは本当に自覚せずに異性を惹きつけますね）』

「（何なんだろうな、これ……）」

まさかこれもゼウスの仕業なんだろうか…………だとしたら、いつかコロス……………！

「龍姫君？」

「え？あ、ごめん八神さん。ちょっとボーっとしちゃったよ」

「ううん、気にせんでええよ。それから、わたしの事ははやてって呼んで？わたしも龍姫君って呼ぶし」

「ううん……じゃあ、はやてちゃん？」

「あ、ちゃん付けもやめてや。なんや恥ずかしいわ……」

「わかった。じゃあ、はやて」

「うん！」

嬉しそうに笑って返事をするはやて。やっぱり可愛いな……

「そういえば、はやてってよくここに来るの？」

「そやね。わたしはこの通り車椅子やから学校も休学中でな。平日でもよく来るんよ」

「そっか……だったらしばらく僕も通おうかな」

「え？でも、そんな……」

「はやてともつと話をしてもつと仲良くなりたいな、と思ってさ」

「うう……／＼／＼龍姫君、その笑顔は卑怯やよ……（ボソッ）」

「ん？はやて？」

はやてが顔を俯けてしまった。俺、何か変な事言ったか？

「せ、せや！龍姫君、お昼は食べた？」

「え？まだだけど……」

そういえば何も考えてなかった。今日は父さん達は出かけてるし、アテナは『計画』の件で夕方まで本局だ。今から家に帰って、っていうのも面倒だな……。今日は休日だし、いつそ抜きでもいいか。

「ほんなら、うちで食べて行かへん？」

「いや、流石にそれは……」

「そんな事にせんで、本取ってくれたお礼させてや」

「うん……。まあそれなら……いいかな？」

「もちろんや！」

そういうわけで、俺は出会って早々八神家にお邪魔する事になった。

図書館を後にした俺とはやては途中スーパーで買い物をして、現在八神家の前。

「へー、大きな家だね。はやて、家族は？」

答えは既に知っているが、これは聞かなきゃいけないと思った。

「あ……わたし、1人暮らしなんよ。お父さんとお母さんは小さい頃に死んでもうてな」

寂しそうな笑みを浮かべてそう口にするはやて。

「ごめん……辛い事聞いちゃって」

「ええんよ。……もう慣れたしな」

そつは言うものの、はやての表情は晴れない。

「……はやて。正直今更な気もするけど、僕と友達になってくれない？」

「え？……本当に気にせんでええんよ。わたしは——」

「僕ははやてのそんな顔は見たくないよ。……はやての笑顔を護る為に、僕を傍にいさせて？」

はやてが全てを言い終えるより早く、俺は割り込む。

「ふえ？……え、ええっ!？」

——ボンッ！

「あ、あう……／＼／＼」

はじめはうるたえていたはやてが、突然爆発したかのように全身を真っ赤に染めて口をパクパクしている。

「はやて、ダメかな？」

さらにはやての手を取って念押しする俺。すると――

「だ、ダメやない！ダメなわけない！わたしも龍姫君と友達になりたい！」

はやては俺の手を強く握り返して、力一杯そう答えた。

「よかった。それじゃはやて、改めてよろしくね」

「う、うん……よろしくな」

そうしてやっと笑顔になってくれたはやて。うん、やっぱり笑顔が一番だな。

――Side はやて

あれから龍姫君と一緒にわたしが作った昼ご飯（オムライス）を食べて、今は食後のティータイム。

ちなみに、龍姫君はわたしのオムライスを大絶賛してくれた。今まで誰かに褒められた事なんてなかったから、ちよう恥ずかしかったわ。

「そういえば、龍姫君の家族は？」

「僕？父さんと母さんと、居候の3人だよ」

「居候？」

「うん。もつかれこれ3年一緒に暮らしてる、僕の姉みたいな人なんだ」

「へえ。そうなんや……」

む、龍姫君にはお姉さんがいたんやね。どんな人なんやろ。

「そうだ、今度はやてにも紹介するよ。今日は偶々用事で出掛けるけど、普段は大体家にいるから」

「その人、仕事は何してるん？」

「うーん……それが、僕も実はあまりよくわからないんだ。前に聞いた時ははぐらかされちゃって……」

職業不定？何か危険なお仕事でもしとるのかな？

「あ、それから僕の友達も紹介するね」

「それって学校の?」

「うん」

「もしかして女の子だったり?」

「うっ……」

わたしの質問に口ごもる龍姫君。やっぱりそうなんか……。わたしのカンも捨てたもんやないなあ。

「当たり前、みたいやね」

「はやて、鋭過ぎ……」

「あははっ。女のカンを甘く見たらアカンで?」

「うう…… たった今身を持って思い知ったよ……」

ありゃ、龍姫君ったら落ち込んでもうた。

「ゴメンな。でも、龍姫君も悪いんよ?」

「僕が?」

「せや。女の子と一緒にの時に他の女の子の話なんてしたらアカンよ」

「そついうもの?」

「せやで」

「うん……じゃあ、ごめん」

「うん」

やっぱり龍姫君と話してるのは楽しいな。

それに、龍姫君はほんまに優しい人やと思う。まだ会って間もないけど、これだけは確信できる。

わたしの車椅子やその理由の事も何にも聞かんし、最初の時以来わたしの家族についても一言も言わん。

せやけどきつと龍姫君なら、わたしが話しても静かに聞いてくれて全部受け入れて笑ってくれる……

「何やるなー……そんな気がするんよ……」

「はやて、どうかした？」

「へ？」

目を開けると、わたしの顔の目の前に龍姫君の顔があった。

「あ、あわ……」

途端に頭の中が真っ白になる。顔が熱くなるのがわかる。

「大丈夫？もしかして具合悪くなった？」

そう言うと、龍姫君はわたしのおでこに手を当ててきた。

「うん……ちょっと熱いかなあ……?」

「ふやあつ!へ、平気や!どこも悪いところなんてあらへんて!」

ちよつとオーバーリアクション気味に、慌ててそう答えた。

うう……龍姫君はズルい。不意打ちでそういう事をしてくれるんやから……

「……そう?ならいいんだけど……」

それでもちよつと心配そうにわたしを見る龍姫君。……これ以上心配させちゃアカンな。

「もう、龍姫君は心配症やなあ。ほんまに大丈夫やって!」

「うん……そうだね。あ、そういえばはやはケーキとかって好き?」

「もちろんや」

「それはよかった。僕の幼馴染みの家が翠屋っていう喫茶店をやってるんだけど、今度一緒に行かない?」

っ!?こ、これはもしかしてデ、デートのお誘いなんか!?

「い、行く!絶対行きます!」

これは受けなきゃ女やない!恋する乙女はいつでも押せ押せや!

「うん。それじゃ、いつにしようか？」

「せやな……あ！そういえばわたし、実はもうすぐ誕生日なんよ。6月の4日なんやけど……」

「え？本当に？そういう事なら……うん。その日に行って一緒にお祝いしよう！」

「ほんまに？ええの？」

「もちろんだよ」

いやったあああああつ！……こ、こほん！と、とにかく今年の誕生日はほんまに楽しみや！

それから夕方まで龍姫君とお喋りをして、今日はお開きになった。帰り際に明日も図書館で会う約束もできて、ほんまに今日はええ日やったなあ。

— Side Out

はやての家からの帰り道。

「どうすんだよ……」

俺は先程の約束の事で頭を悩ませていた。

．．．．．6月4日のはやての誕生日って闇の書が覚醒する日じゃ
ん！俺このままだと現れたばっかの守護騎士達と顔を合わせるって
事だし！

「でも、まさかこんな事になるなんてな……」

はやてと友達になって、誕生日を祝ってあげたい気持ちは当然ある
けど、悩みどころだ．．．．．

第17話 『良い人間関係を築くには第一印象が肝心』（後書き）

あとがき

作者 「この天然ジゴロが」

龍姫 「……何故俺はいきなり罵倒されてるんだ？」

作者 「フンツ！これだから天然は……」

龍姫 「言いたい事があるならちゃんとさええ」

作者 「イヤだね。お前に話すことなんて何も無い」

龍姫 「何なんだ一体……わけがわからん」

作者 「わからなくて結構だよ。ベーっ！」

龍姫 「……それで次回は？」

作者 「守護騎士達の登場と、接触」

龍姫 「やっぱり行かなきゃダメか……」

作者 「当然だろ」

龍姫 「そりゃわかってるけどさ……」

作者 「そういうわけで、次回予告です。」

次回、第18話『悲しき運命の連鎖を断ち切る為に（仮）』

を」

龍姫 「乞うご期待！」

第18話 『悲しき運命の連鎖を終わらせる為に』

—Side??

現在、6月3日の午後11時59分。

「すう……すう……」

部屋では1人の少女が静かに寝息を立てていた。

少女の名前は八神はやてと言う。日付が変われば、彼女は9歳の誕生日を迎える。

——カチカチカチ

静かな室内に、秒針が時を刻む音が響く。

——カチカチ、カチッ！

そして全ての針が12を指して重なった時、『ソレ』は目を覚ました。

机の上に置かれていた表紙に剣十字の紋章がついた立派な装丁の本

が、突然輝きだした。

「ん……」

光の眩しさに目を覚ましたのだろう。少女がゆっくりと身体を起こす。

「え!？」

そうして目を覚ました少女は、起き上がるなり驚きの声を上げた。なんと1冊の本が宙に浮いていたのだ。そして、

——ギチギチ、バキイン！

縛っていた鎖が解き放たれ、勝手に開くとそのページをめくっていく本。

少女が呆然とその光景を見つめる中、やがて最後のページまでめくり終えた本はこれまた勝手に閉じた。

『A n f a n g（起動）』

さらに本から機械音声が聞こえる。

「あつ…… ああ……」

怯えて後ずさる少女。突如、強烈な閃光が部屋を埋めた。

「うつ……」

少女は眩しさに顔を背ける。

やがて光は収まり、少女が自分の正面を見ると、そこには自分に傳く4人の男女がいた。

驚きに目を見開く少女。しかしそんな彼女を置いて、4人が口を開く。

「『闇の書』の起動、確認しました」

「我ら、『闇の書』の蒐集を行い、主を守る守護騎士でございます」

「夜天の主の下に集いし雲」

「ヴォルケンリッター。……何なりと命令を」

今宵、ついに新たな物語がその幕を上げた。

これから先どのような展開を見せ、どのような終幕^{フィナーレ}を迎えるのか、それは誰にもわからない。

— Side Out

今日は6月4日。はやての誕生日だ。
日付けが変わったと同時に『闇の書』が起動、守護騎士達が姿を現した事だろう。

今は学校も終わって放課後、先日約束を果たすためにはやての家へと向かっている最中だ。

ちなみに翠屋へ行く予定を変更してはやての家で誕生日を祝う為に、事前にケーキを購入してきた。

この時期になのはとヴォルケンスが鉢合わせる状況は、やっぱり作りたくなかったんでね。

「いよいよだな……」

これからの事を考えて、若干緊張気味の俺。

「いやいや、弱気になってもしょうがないだろ！はやてを、そして騎士達と『アイツ』を助けるんだから！」

首を振って緊張を振り払い、決心を固める。 よし、やるぞ！

そうしてはやての家の前に到着。

. やっぱり結界が張ってあるな。

『（タツキ、どうしますか？リミッターをかけるならすぐに実行しますか）』

「いや、いいよ。このままで行く」

『（守護騎士達に警戒されるのでは？）』

「承知の上だ。それに俺はアイツらと敵対する気はない」

『（向こうはそう思ってくれないかもしれませんが？）』

「そこは上手い事説得してみせるさ」

『（わかりました。それでは私はもしもの事態に備えておきます）』

「そうしてくれ」

相棒と言葉を交わし、俺は八神家の敷地に足を踏み入れた。

——ピンポーン

「はぁーい!」

インターホンを鳴らすと、知らない女性の声が返ってきた。

——ガチャ

「お待ちしていました。はやてちゃんから話は聞いています。どうぞ」

ドアが開き、中から姿を現したのは金髪ショートボブの女性――シヤマルだった。

表情はにこやかだが、明らかに俺を警戒しているのが気配でわかる。

「そうですか。それじゃ、お邪魔します」

そうして通されたリビング。

「……（じーっ）」「……」

「あ、龍姫君！いらっしやい！」

「はやて、お誕生日おめでとう。やつぱり家の方がいいかと思って、結局翠屋でケーキを買ってきちゃったんだ。ごめんね？」

「そんなん気にせんでええよ。それより、おおきにな」

「……（じーっ）」「……」

「どういたしまして。それから、こっちは誕生日プレゼントだよ。自作のブレスレットなんだけど、どうかな？」

「龍姫君の自作？へえ、器用なんやね。嬉しいわあ。……つけてくれる？」

「うん。……っと、できたよ」

はやての右手首にブレスレットをつけた。

「ふふっ、男の子からもらった初めてのプレゼントや」

そう言って嬉しそうに笑うはやて。よかった。気に入ってもらえたみたいだ。

「「「（じーっ）」「」「」

．．．．．ところで、そろそろツッコんでもいいか？いいよな？

「あー、何か？」

「「「え？」「」

「わっ？」

さつきから俺とはやてのやりとりをじっと見ていた3人と1匹に声を掛ける。

「あ、いや、すまん。別に大した事ではないんだ」

3人の中の1人、ポニーテールの女性——シグナムが慌てた様子でそう答えた。

「そっぴいばまだ紹介してなかったな。龍姫君、この人らはわたしの親戚なんよ。誕生日のお祝いに、サプライズで来てくれたんや」

はやて．．．．．いくら何でもそれは言い訳として苦しすぎるだろ。別にツッコむ気はないけど。

「シグナムだ。先程は失礼した」

「シャルです。よろしくね」

「……ヴィータ」

「わふっ！」

それぞれが自己紹介をする。ヴォルケNZも主の手前、今は大人しくしている。……。それにしても、ヴィータは素っ気ないなあ。

「こら、ヴィータ！そんな挨拶はアカンよ。……あ、こっちの大きい犬はザフィーラや」

「そうなんだ。あ、僕は氷護龍姫って言います。皆さん、よろしく願います」

そう言って頭を下げる俺。

それからパーティーが始まり、皆が終始笑顔ではやての誕生日を祝った。

……。まあシグナム、シャル、ザフィーラは常に俺の動きを警戒していたし、ヴィータはあからさまに俺を敵視していたが。

そうして水面下で展開されていた緊張状態は、はやてがトイレで席を外した時に限界を迎えた。

「おい、氷護といったか」

シグナムが静かに、しかし鋭い口調で話しかけてきた。

「何か？」

俺はそれに気付いていない風を装って、平然と答える。

「貴様、魔導師だな？」

「そうだ、と言ったら？」

——ジャキツ！

「何が目的で我らが主に近づいた」

俺の喉元に剣デバイスを突きつけてくるシグナム。

「別に何の目的もない。俺はただはやての友達でいただけだ」

「その言葉を信じると？」

「判断はアンタらに任せる。……それより今晚時間を作ってくれないか？少し話がしたい」

「何だと？」

「おそらくアンタらにとっても有益な話だと思っぞ？『闇の書』の守護騎士、ヴォルケンリッターの諸君？」

「「「っ!?!」」」

「貴様、我らの事を知っているのか?」

俺の言葉を聞いた途端、ヴォルケンズに動揺が走る。

「ああ。恐らくアンタらよりも深いところまで色々知ってると思うぞ?」

「なっ! そんな事はありませんっ!」

「ありえるかありえないかは俺の話を聞いてから判断してくれ。で、どうする?」

「「「「.....」」」」

俺の問いに黙るヴォルケンズ。念話で話し合っているんだろう。しばらくして、

「.....いいだろう。貴様の話とやらを聞いてやる」

シグナムがそう答えた。

「よし。それじゃ——」

「ごめんなー。ちょう遅くなってもうて」

言いかけたタイミングではやてが帰ってきた。

「（それじゃ日付けの変わる頃に迎えに来るから、家の前にいてく

れ」

「（了解した）」

俺が咄嗟に秘匿回線の念話に切り替えて用件を伝えたと、シグナムもそれに対応してくれた。

その後も滞りなくパーティーは進み、やがてお開きの時間になった。

「それじゃはやて、今日はこれで帰るね」

「今日はおおきにな、龍姫君。プレゼント、大事にするよ」

「ありがとう。翠屋へはまた今度行こう。その時には友達も紹介するよ」

「うん。楽しみにしとるよ」

「任せて。なるべく早くできるように調整するから」

そう言って、俺ははやての家を後にした……

同日、深夜。

約束の時間が近づき、俺はアテナを伴って再びはやての家にやって来た。

「早いな」

「こんばんは、皆さん」

俺達が着いた時には、既にヴォルケンスは外にいた。

「来たか．．．．そちらの女性は何？」

「家の居候だよ。魔法について知っている、な」

「「「っ！？」」」

「ああ、落ち着いてください。私も龍姫同様、あなた方と争う気はありませんから」

にわかに殺気立つヴォルケンスに、アテナが落ち着くよう促す。

「．．．．．わかった」

「それじゃ移動しよう。ついて来てくれ」

さあ、始めよう。永劫の闇の終焉へ向けた戦いを！

第18話 『悲しき運命の連鎖を終わらせる為に』（後書き）

あとがき

龍姫 「ヴォルケンリッター参上、だな」

作者 「ああ。……しかしどんどんキャラが増えていくよな、この作品」

龍姫 「お前、今からそんな事言ったら3期はどうするんだよ」

作者 「……どうなるんだろうね」

龍姫 「遠い目をして現実から逃げるな」

作者 「えゝ、今回は龍姫とヴォルケنزの会合です」

龍姫 「今度は話題を逸らしてきたか……まあそうなるな」

作者 「果たして龍姫はどのような未来を提示するのか？」

龍姫 「ハッピーエンド以外はありえないと以前言っただろう」

作者 「……いや、まあ確かにそうだけど」

龍姫 「もちろん、今回もその方針は変わらない」

作者 「……だそうです。それでは次回予告！

次回、第19話『壊れた過去と創造する未来（仮）』

を」

龍姫 「お楽しみに〜！」

第19話 『壊れた過去と創造する未来、そして現れた襲撃者』

そうして俺達は海鳴臨海公園へとやってきた。

「……話の前に、まずはそちらの素性を明かしてもらおうか」

公園につくなり、シグナムがそんな事を言ってきた。

「おいおい。人にものを尋ねる時はまず自分から、だろ？」

「……ふむ。一理あるな。それでは改めて名乗ろう。私はヴォルケ
ンリッター『剣の騎士』シグナムだ」

「私は『湖の騎士』シャマルです」

「アタシは『鉄槌の騎士』ヴィータ」

「……『盾の守護獣』ザフィーラ」

それぞれが自らの称号と共に名乗りを上げる。うん……。や
っぱり格好いいな。

「ではこちらも改めて、俺は氷護龍姫。時空管理局所属の特務捜査
官だ」

「私ははじめましてですね。アテナ・グラウクスと言います。同じ
く管理局で龍姫の補佐官をしています」

というわけで、俺達も自己紹介する。管理局職員である事も隠さない。

「管理局ですって!？」

「やっぱりコイツら敵じゃなかよ!」

「グルル……」

……わかつちやいたけど、やっぱりな。

管理局の名前が出た途端に臨戦態勢を取るヴォルケンズ。

「管理局の人間が我らに何の用だ」

「あ……言っても信じてもらえんだろうが、俺は管理局を絶対の正義とは思っていない」

「何だと?」

「籍は置いているが、あくまでそれだけだ。別にアンタらを逮捕・拘束する気もない。そんな事をしたらはやてが悲しむからな」

「……それだけでは信用できんな」

「それもそうだ。……まああれだ、今回の話は俺の勝手な独り言でも思ってくれ。そちらの独り言にも独り言で返すがな」

とりあえず妥協案としてそんな事を言ってみる。

「……いいだろう。ならばこちらも勝手に聞き、勝手に喋らせてもらう」

よしっ！乗ってきた！

そして、俺とヴォルケNZによる奇妙な会合は始まった。

「まず結論から言わせてもらうと、このままでははやての命が危ない」

「……っ！？」

俺の第一声に、ヴォルケNZ全員が息を呑んだ。

「現在『闇の書』と呼ばれている指定遺失物ロストロギアは、本来各地の偉大な魔導師の技術を収集し、研究する為に作られた収集蓄積型の巨大ストレージデバイスだった」

「……」

「その本来の名称は『夜天の魔導書』。しかし歴代の持ち主の何人かがプログラムを改悪した結果、転生と再生の機能が暴走し、ただ破壊の力を振るうだけの『呪われた闇の書』になってしまった」

「……」

「『闇の書』はページの蒐集が行われない状態が一定期間続くと、持ち主のリンカーコアを侵食し、やがてはその身体をも蝕む」

「……」

「しかしこれでもし焦って『闇の書』を完成させてしまうと、途端に防衛プログラムの暴走が始まり、はやてはおるかこの世界すらも滅ぼす事になるだろう」

「今の話が全て真実だとしたら、我々は一体どうすればいいのだ……」

「蒐集をしてもしなくても、主を危険な目に遭わせちゃうなんて……」

「さらに今日はやてが9歳の誕生日を迎えた事で封印の第一段階が解放され、守護騎士であるお前達が表に出てきた。これによつてはやての負担は加速度的に増したと見ていいだろう」

「そんな……アタシらがマスターの負担になるなんて……」

「グウウ……」

それぞれが悔しそうに顔を俯ける。

「……俺は『闇の書』なんかにはやてを殺させたりしない。その為にも、俺は『闇の書』を再び『夜天の魔導書』へと戻す」

「……っ！？」

そこで全員が驚いた顔で俺を見てきた。

「……本当にそんな事ができるのか？」

「ああ、俺ならできる。……そこで、はやての守護騎士であり家族でもあるお前達に問おう。俺を信じて、はやてとお前達の命を預ける気はあるか？」

「……信じて、いいんですか？」

「もちろんだ。多少準備に時間はかかるが、安全かつ確実に修復を行う事ができる。断言しよう」

「」「」「……」「」「」

ヴォルケンスが無言になった。また念話で相談しているんだろう。しばらくして、シグナムが口を開いた。

「……正直、お前の話を完全に信じたわけではない。だが、我らも主を危険に曝すような事はしたくない」

「ふむ……」

「お前はそれを回避する術を持っていると言った。そしてできると断言した」

「ああ」

「ならば我らはお前に賭けようと決めた。成功以外は断じて許さんからな」

「望むところだ」

俺はシグナムの言葉に不敵に笑い返してやった。

「……それで、具体的に我々は何をすればいい？」

「特に何もする事はないさ。ただこれからも変わらず、はやての家族として傍にいてくれるだけでいい」

「……そうか」

「ああ。ただし、もしはやての病状に何らかの変化があった場合は知らせてくれ」

「承知した」

「よし！それじゃ友好の印に、お互い名前で呼び合おうぜ！」

「別に我らはお前と馴れ合う気は……」

「そんな事言わずに。俺とはやては友達なんだから、よろしく頼むよ」

「……そうだな。主の友人をあまり他人行儀に扱うわけにもいかないか」

「まあそういう事だ。これからよろしくな。シグナム、シャマル、ヴィータ、ザフィーラ」

「私もよろしくお願いします」

「よろしく、龍姫、アテナ」

「よろしくね、龍姫君、アテナさん」

「……フンッ」

「……………」

うう．．．．．グイータとザフィーラが冷たい．．．．．

結局、この日はこれで解散する事になった。

そして公園からの帰り道。

「それで、結局龍姫はどうするの？」

「俺の持つてる知識の中にある『夜天の書』のデータを元に、修復パッチを作る」

「……何だかパソコンのソフトウェアみたいね」

「まさしくその通りだよ。だから所有者が自由にプログラムに手を加えられたんだ」

「なるほどね」

「そういうわけで、これからはその修復パッチの製作だ」

「了解」

そこでアテナとの話を切ると、俺は後ろを振り向いてこう言っただ。
「た。」

「……おい。そろそろ隠れてないで出て来いよ。俺達を尾けてるやつがいるのはわかってるんだ」

「「っ!？」」

すると、どこかで何者かが驚く気配が2つ。……やっぱり動いていたか。

「……よく私達の事に気付いたな」

「気配の遮断も完璧だったはずだが……」

「その程度で完璧なんて言ってるようじゃ、まだまだだぜ?」

予想通り、すぐ近くの物陰からはまったく同じ容姿をした2人の仮面の男が姿を現した。

「くっ……流石はSSSランク、というわけか」

「そうでもないさ。アンタらの練度が低いだけだ」

「ガキのくせに、生意気なヤツだ」

「それよりこんな真似をして、一体俺に何の用だ?」

「……管理局に属していながら、危険な指定遺失物を放置している裏切り者に制裁を」
ロストロギア

「裏切り者？その言葉、そっくりそのまま返してやるよ。ギル・グレாம்提督の使い魔、リーゼ・ロッテにリーゼ・アリア」

「「っ!？」」

「またしても驚く2人。何だ、バレてないと思ってたのか。バカだなあ……」

「何故知ってたかって？簡単だよ。補佐官のアテナに職員の詳細バンクを調べてもらっていたからさ」

5月の終わり頃にアテナが本局に行っていた理由がこれだ。こうしておけば、現時点で俺がグレாம்提督とその使い魔2人の事を知っていても矛盾が生じないからな。

「それに俺はアンタらの主、ギル・グレாம்提督が秘密裏に『ある計画』を進めている事も知っている」

「バカなっ!？それこそ調べようもないはず!」

「甘く見てもらっちゃ困る。俺にとってはその程度の情報を調べる事くらいいけないんだよ」

「ロッテ！やはりコイツは『計画』の大きな障害になるわ！今こゝでしばらく動けない身体になってもらうわよ!」

「了解！男のくせに龍『姫』なんて名前のヤツが、でしゃばるんじゃないよ！」

「……イマ、コイツハナンティッタ？」

「あ、バカ！それは——」

俺の横でアテナが慌てるが、もう遅い。ヤツの言葉は俺の耳に入ってしまったからな……

「……コロス！今ここで、オマエらを、肉の1片すら残さずにっ！」

『パワーブースト&アクセル』

「フルドライブ！」

俺の思考が真紅に染まる。頭にあるのはただ1つ……目の前にいる敵を滅殺する事のみ！

「ハア……龍姫に名前ネタはNGなのよ……もう手遅れだけど」

アテナはそう呟くと、敵であるはずのリーゼ姉妹に向かって合掌していた。

そして始まる、ワンサイドゲーム 一方的な殺戮……………

— Side ロッテ

「ロッテ！やはりコイツは『計画』の大きな障害になるわ！今こゝでしばらく動けない身体になってもらうわよ！」

「了解！男のくせに龍『姫』なんて名前のヤツが、でしゃばるんじゃないよ！」

アリアの意見に同意したアタシがそう口走ったその時、ソイツ——氷護龍姫に変化が起きた。

「あ、バカ！それは——」

氷護の隣にいた女——アテナ・グラウクスが何かを言ったみたいだけど、別の声に遮られて聞こえなかった。

「……コロス！今ここで、オマエらを、肉の1片すら残さずにっ！」

その声の主は、先程までは全く感じる事のなかった濃密な死の気配を振りまく氷護だった。

「え？何、アレ……」

アタシの後ろでアリアが呆然と呟く。

……アタシだってわかんないよ！何なの、アレは！

あまりにも強烈な殺気に身体が震える。

と、次の瞬間――

――ズドンッ！

「ガハッ!？」

脇腹に凄まじい衝撃が走って、アタシは20メートルくらい吹き飛ばされていた。

．．．．な、何が起きたの!？

「ゲホッ!ゴホッ!……うっ!」

口の中に滲む血の味と、突然込み上げた吐き気。

．．．．どうやらアイツに脇腹を蹴り飛ばされたらしい。肋骨が何本か折れたようだ。

「ロツテ!」

アリアの焦ったような声。慌てて顔を上げると、アイツがこっちに突っ込んでくるのが見えた。

くっ．．．．今のダメージのせいで上手く身体が動かない!

それでも何とか立ち上がり、目の前のアイツを見据える。

しかし――

．．．．．いないっ!?

私の正面からアイツの姿は消えていた。慌てて周囲を探るも、見つける事ができない。

そしてまた――

――ドンッ!バキッ!グシャッ!ズドンッ!

「ゴフッ!……グハッ!」

腹部に2発、顔に1発、最後に背中にも1発、アイツの拳が入った。最後の背中への一撃で、アタシは地面に叩きつけられた。

「ガッ……!」

そのまま徐々に視界が黒で塗り潰されていく。

．．．．．ダメ．．．．．逃げて、アリア．．．．．

最後にそれだけが頭に浮かんで、アタシは意識を手放した。

――Side Out

— Side アリア

「ロツテエ——ッ！」

彼——氷護龍姫に蹴り飛ばされ、殴られて地面に叩き伏せられた口ツテに向かつて思わず叫んでしまった。

私達が氷護に目をつけたのは、5月下旬頃にお父様の『計画』の標的^{ターゲット}、八神はやてに接触してきた時からだった。

それから、私達は彼に関する情報の収集とその行動の追跡を始めた。

そして私が局のデータバンクで調べた彼の情報は、私達を大いに驚かせた。

氷護龍姫。若干8歳にして空戦SSSランクの魔導師。潜在魔力の測定結果は測定不能を示すランクEX。

召喚魔法を使い、高位の龍を軽々と使役する。さらには入局の為の実戦試験において、試験官だった首都防衛隊所属ゼスト・グランガイツ氏を撃破。

これ程の力を持った魔導師が何故『闇の書』の主に近づくのか、私

達はさらに彼の周囲を探っていたところで、今日のあの出来事が起きた。

「……まさか『闇の書』の守護騎士達とまで接触するとはね。

それを見た私達は密かに彼を襲撃しようとしたけれど、逆に看破されて彼の前に姿を現さざるを得なくなった。

しかも彼はお父様の『計画』の事まで知っていると告げてきた。

そして、改めて彼を危険視した私達が

「ロツテ！やはり彼は『計画』の大きな障害になるわ！今ここでしばらく動けない身体になってもらうわよ！」

「了解！男のくせに龍『姫』なんて名前のヤツが、でしゃばるんじゃないよ！」

という会話を交わしたその瞬間から豹変した彼に、たった今ロツテがやられてしまった。

「よくも……よくもロツテを！」

私は倒れたロツテの横に佇む彼に向かってスティングーブレイドを撃ち込んだ。

爆散した魔力刃によって起きる煙によって彼の姿が見えなくなるけど、そのまま容赦なく刃の雨を降らせ続ける。

「ハア、ハア……」

あれだけの数の魔力刃を浴びせたんだもの、いくらSSSランク魔導師といえど、相当のダメージを負ったはず……

次第に晴れていく煙の先を見据えながら、私は息を整えた。

そうして完全に煙が消えたその先には――

「そ、そんな……っ！」

球状に彼を覆うバリアにスティングーブレイドの魔力刃が何十本も突き刺さっている光景があった。

「そら、そっくりそのまま返してやるよ」

『リフレクトブレイク・フルバースト』

デバイスのものと思しき機械音声が聞こえた次の瞬間、バリアに刺さっていた刃が私に向かって飛んできた。

「なっ！？……くっ！」

その光景に一瞬驚くけど、すぐにシールドを張って防御の構えを取る。

そんな私に、彼は不気味に笑いながらこんな事を言ってきた。

「……いや、利子がついてるから『そっくりそのまま』じゃないか。悪いな、間違えたよ」

……どういう事？

結論から言うと、私のその疑問はすぐに氷解した。何故なら――

――パキインッ！

「え！？」

飛んできた魔力刃が私の張ったシールドに当たった瞬間、それを粉々に撃ち砕いたからだ。

そしてシールドを抜いた魔力刃は、そのまま無防備になった私へと襲い掛かってきた。

「きゃああああああっ！」

容赦なく私に降り注ぐ魔力刃の雨。

それらは次々に私の服を切り、肌を切っていく。

徐々に血で赤く染まっていく私の身体。

．．．．いけない！血を流しすぎたわ！

気付いた時には時既に遅く、視界が次第に黒く塗り潰されていく。

．．．．ロツテ．．．．ごめんなさい、お父様．．．．

そして、私の意識は完全に闇に堕ちた。

| Side
Out

第19話 『壊れた過去と創造する未来、そして現れた襲撃者』（後書き）

あとがき

作者 「スーパー龍姫タイム！」

龍姫 「いやあ、スッキリしたあ〜！」

作者 「いつぞや以来の清々しい笑顔だな」

龍姫 「いや、もう楽しくて楽しくて！」

作者 「……そんなに嫌いだったのか、リーゼ姉妹」

龍姫 「あ、別にリーゼ姉妹はそれ程でもないんだよな」

作者 「……本命はグラム提督？」

龍姫 「まあな。今回の2人は……とばっちり？」

作者 「ひでえ。……コレ後半だけ見たら、お前完全に悪役だヒールよな」

龍姫 「そこはアレだ。前半が上手い具合に中和して……」

作者 「いや、後半のインパクトがデカいせいで前半のいい話が消し飛ばされる」

龍姫 「……ソナコトナイヨ？」

作者 「そんな冷や汗ダラダラ流しながら言っても無駄だって。それに何故片言だし」

龍姫 「もういい！次だ次！」

作者 「あ、開き直ったよコイツ……というわけで、次回予告！

次回、第20話『卑怯汚いは所詮敗者の戯言（仮）』

を」

龍姫 「よろしくな！」

第20話 『それぞれの正義』

「ふう……」

『J a c k e t O f f』

リーゼ姉妹への折檻を終え、俺は1つ大きく息を吐いた。

「……ホント龍姫はアレを言われると、一切の容赦がなくなるわよね」

「うるせえ。人が気にしてる事をわざわざ指摘するヤツにはキツイおしおきが必要なんだよ」

呆れた様子のアテナに、ちょっと不貞腐れたように返す。

「で、あの2人はどうするのよ」

それにしても――

「グレラム提督は今頃大慌てだろうな。2人を救出しようにもできないんだから」

くつくつく……今この海鳴市一帯には俺特製の結界が張つてあるからな。

ちなみに効果は外部から結界内への干渉と、内部からの転移を完全に無効化するというものだ。

「龍姫？」

ヤベ、アテナの語気が強くなった。しかも怖い顔で睨んできてる。

「あ、ああ。……とりあえず話をする前に2人の治療だな」

「あんなボロボロにしたのは自分のくせに……」

「そこ、余計な事は言わない！」

「はい」

それから俺達はリーゼ姉妹を担いで公園に戻り、芝生に寝かせると治癒魔法をかけた。

「『ホーリーグレイス』」

2人の怪我がみるみるうちに治っていく。

「「う……」」

すると、意識が戻ったのか軽く身じろぎする2人。

「……ここは？」

「お父様の執務室じゃないわね」

そして起き上がった2人は周囲を確認してそう零す。

「お目覚めかな？」

「「っ!?!」」

俺が声を掛けると、ビクッと身体を震わせて恐る恐るこちらに振り向く。

「お前……」

「……どうして君がここにいいのかしら？」

「簡単な事さ。怪我した2人をここに運んで、たった今俺が治癒魔法をかけたからだよ」

「あれ……そういえば、すごい大怪我だったはずなのに治ってる……」

「……私もかなり出血してたはずなのに全然そんな感じがしないわね……」

「それはよかった。……流石に俺もちょっとやりすぎたからな、悪かった」

反省した意を込めて頭を下げて謝罪した。

「まあ原因を作ったのはあなた方なので、自業自得ではあるんですがね」

「アテナ!余計な事は言わんでいい!」

「はい」

わかっててやってるから性質が悪いよな、コイツの場合。

「アタシの言葉が原因だったんだろ？確かにこっちも悪かったよ、ゴメン」

「そうね。確かに非はこちらにあったわね、ごめんなさい。それから、怪我の治療をしてくれてありがとう」

「お、そうだそうだ。ありがとね」

「どういたしまして」

「・・・何か変な雰囲気だ。まあ、話を切り出すにはちょうどいいか。」

「なあ、ちょっと話をしないか？」

「話？」

「何かしら？」

「『闇の書』に関して、なんだが……俺に全てを任せてくれないか？」

「え！？」

「ど、どういう事？」

案の定、その話題を出した途端に動揺するリーゼ姉妹。

「実は……俺は『闇の書』を『夜天の書』に戻そうと思ってるんだ」

「なっ!？」

「そんな事が可能な!？」

「ああ。俺ならできる」

「「……………」」

そこで無言になる2人。…………さあ、どうする？

「……ゴメン。アタシ達だけじゃ判断できないよ」

「そうね。一度お父様に聞いてみる必要があるわ」

…………まあ予想通りの返答だな。それじゃ、こっちも。

「なら、後日俺が直接グレアム提督に話をしに行こう。どうだ？」

「うん…………アリア、どうだろ？」

「そうね…………うん。そういう事なら、お父様には私から話しておくわ」

「そうか。それじゃ、よろしく頼むよ」

「ええ。任せて」

フツ、計画通りだ。グラム提督、悪いがあなたの『計画』は完璧に潰させてもらう！

それから日程の調整をして、この日はリーゼ姉妹と別れた。

瞬く間に日は過ぎていき、今日が約束の日。

俺はアテナと共に管理局本局の高官執務室棟に来ていた。

「はじめまして。ギル・グラムだ」

「特務捜査官の氷護龍姫だ」

「補佐官のアテナ・グラウクスです」

とりあえず自己紹介から。

「先日は失礼した。すまなかったな」

「いいえ。実際こちらには何ら被害はありませんでしたから」

「……そうだったな」

そして早速雰囲気緊張感を増す。

「……アリアから話は聞いているよ。本当にそんな事が可能なのかい？」

「ああ。もちろんだ」

「『闇の書』を『夜天の書』へと戻す……確かにそれができるなら、もうあのような悲劇は起きないのだろうな……」

「11年前の『闇の書』暴走事件の事か。クロノの父、クライド・ハラオウンが殉職したという」

「ああ。私はもう二度とあの時の悲しみを繰り返したくない。その為に『計画』を――」

「ふざけるな」

そこで俺はグラム提督の言葉を遮る。提督は驚いた目で俺を見た。

「確かに『闇の書』は、これまでにそれこそ数え切れない人の命を奪い、多くの悲しみを生んだかもしれない……だがそれでも、それを知らない無関係な人間――しかもまだ9歳の少女を、はやてをあなたの個人的な都合の為に殺させるわけにはいかない」

「……っ！」

「『闇の書』の転生先がはやてだとわかったあなたはこう考えた――天涯孤独のはやてなら、封印したところで悲しむ人間は少なくとも済む、と」

「……………」

「そしてあなたは『計画』を練り始めた。『闇の書』を暴走させて、

表に出た防衛プログラムをはやてごと凍結し、次元の狭間に閉じ込めるという計画を」

「……………」

俺はそこまで一気にまくし立てる。その間グレアム提督はずっと無言だ。

「……………それしか、ないと思った」

いつまでもこの状態が続くかと思っていたが、おもむろに提督が口を開いた。

「最初に彼女に辿り着いた時は、運命だと思った。あの子を不憫に思わなかったわけではないが、確かに君の言う通り、天涯孤独の彼女なら……………と思った」

「はやての父親の友人を騙って、彼女の生活の援助をしていたのは？」

「永遠の眠りに就く前くらいはせめて、幸せにしてやりたかったんだ……………」

「……………いい加減にしろ。あなたのそれはただの自己満足に過ぎない」

提督の言葉を俺はバツサリと斬って捨てる。すると――

「ちょっと待ってよ!」

リーゼ姉妹の片割れ――ロツテが突然割り込んできた。

「これまでの『闇の書』の主だって、アルカンシエルで蒸発させたりしてんだ！父様の『計画』だって、それと何にも変わんない！」

「君だって局の人間なんだから、わかるでしょう？一般人だから関係ない、なんて決まりがあるから悲しみが繰り返されるの！クライド君だって、そのせいで！」

それに乗じて、アリアも声を荒げる。

「お前らは黙ってる！……それに俺は管理局に籍を置いてはいるが、その正義まで信じているわけじゃない。俺は俺の信念にしか従わない」

「なっ！？」

「お前、よくもぬけぬけとそんな事を……っ！」

「俺を逮捕でもするか？……やめておけ、そんな事をすればお前達だってただでは済まさんぞ？」

「くっ……卑怯な……！」

「汚いわよっ！」

「復讐の為に偽りの正義を振りかざすお前達に言われたくはない」

さて、そろそろ終わりにしようか。

「ギル・グレアム……あなたがこの先復讐の為にはやてと守護騎士

達に危害を加えると言うのなら、俺があなたを殺す」

最後の瞬間だけ、言葉と共に全力の殺気を叩きつける。

「「あ……っ」「」

リーゼ姉妹は耐え切れなかったんだろう。2人ともその場で気を失った。

「む……ぐっ……」

提督は何とか耐えたようだが、全身から冷や汗が噴き出している。

「……1つ、聞かせてくれないか」

しばらくして落ち着きを取り戻した提督がそう聞いてきた。

「……何だ」

「八神はやては、君にとってどんな存在なんだ？」

俺にとってのはやて。それは……

「……はやては、俺の大切な友人だ。そして、俺が命を懸けてでも護りたい人だ」

「そうか……」

俺の答えを聞いて、押し黙る提督。

「……わかった。君の提案に乗ろう」

しばらく続いた沈黙を破ったのは、提督のそんな言葉だった。

「ならば、今後一切はやてと守護騎士達に手を出さないと約束しろ。直接・間接を問わず、だ」

「わかっている」

「それから、準備の為にあなたの使い魔をレンタルしてもらおう」

「いいだろう」

「……話はこれで終わりだ。また追って連絡する。じゃあな」

「失礼しました」

「ああ」

そうして、俺とアテナは部屋を出た。

「ふう……これで提督サイドには釘を刺したし、こっちへの協力も取り付けたな」

「そうね」

帰り道、俺はアテナと話をしながら局の廊下を歩いている。

「にしても、やっぱり疲れるわ……」

「ふふっ……でも、ああいう風に口で相手を説き伏せる龍姫って格好いいわよ?」

「……そうなのか?」

「ええ。とつても」

「俺にはわからん」

「ふふっ」

俺は慚然としながら、アテナは楽しそうに笑いながら、2人で歩いていった。

……次ははやてに現状とこれからについて説明、だな。

第20話 『それぞれの正義』（後書き）

あとがき

作者 「上手くシリアスさが伝わるといいんだが……」

龍姫 「全ては読者次第、だな」

作者 「やっぱりシリアスシーンは描写が難しいって」

龍姫 「弱音を吐くな。それでも作者か？」

作者 「ちなみに次回もこんな感じでいきます、多分……」

龍姫 「まあ頑張れ」

作者 「おう。……にしても割と言いたい放題言った感じだよな、今回」

龍姫 「そうか？あれくらいは当然だと思うが……」

作者 「そんなもんか？」

龍姫 「そうだよ。……まあ難しい話ではあったな。『正義』の捉え方っていうか」

作者 「必ずしも同じ方向を向いてないって事だよな」

龍姫 「まさに信念と信念のぶつかり合いだ」

作者 「……つと、なんか真剣マシな感じになっちゃったな」

龍姫 「そうだな……というわけで、気を取り直して次回予告だ。

次回、第21話『明かされた真実と、向き合う勇氣（仮）』

を」

作者 「よろしく願います！」

第21話 『明かされた真実と、向き合う勇氣』

6月もそろそろ終わろうとしている今日この頃。

俺は相変わらず図書館に来て、はやてと話をしている。

「……そういえばはやて。明日なんだけど、家にお邪魔してもいいかな？」

「ん？龍姫君、突然どないしたんや？」

「実は、はやてに大事な話があるんだ」

「だ、大事な話！？」

「うん。できればシグナム達も一緒だと嬉しいんだけど、どうかな？」

「し、シグナム達にも関係あるんか！？」

「そうなんだ」

「え、ええよ。うん。……こ、これは色々と準備せんとアカンかなあ……？（ボソッ）」

「ん？はやて、何か言った？」

「あ、な、何でもないよ？」

「そう？じゃあ、明日の午前中でいいかな」

「う、うん。午前中なら皆も家におるから、大丈夫や」

「それじゃ、決まりだね」

というわけで、『闇の書』の真実を伝える為の約束を取り付けた俺。

さあ永久^{とわ}の闇の終わりを紡ぐ、その第2段階だ！

そして翌日。

約束通り、はやての家へとやって来た俺。

「いらっしやい龍姫君」

「お邪魔します」

シャマルに出迎えられて、家の中に入る。

ちなみにヴォルケنزには今朝方念話で話を通してある。

「いらっしやい。待っとったで」

「うん。それじゃ、早速話を始めていいかな？」

「え！？そ、そんな、もう？さ、流石に心の準備がまだ……」

「そう？でも、話すなら早い方がいいと思ったんだけど……」

「う、ううん……わかった。わたしも覚悟決めるわ！」

……ん？

はやての態度に引っ掛かるものを感じたけど、気のせいだと思いなおして話を始めた。

「えっと、今日の話は前にはやてが見せてくれた『闇の書』についてなんだけど……」

「へ！？」

そこで何故か突然素っ頓狂な声を上げたはやて。

「あれ？はやて、どうかした？」

「へ？あ、ご、ゴメン。何でもないんよ。あはは……」

そう言って笑うはやて。……本当にどうしたんだろう？

「そう？じゃあ話を戻すけど、今日はその『闇の書』についてはやてに伝えたいことがあるんだ」

「この子に何かあるんか？」

「うん。実はね……」

そうして、俺は『闇の書』に関する真実を伝えた。

初めは至極健全な魔導書だったが、長い時間の中で持ち主達によって改悪され、今では呪われた魔導書になってしまっている事。今まで『闇の書』が引き起こした事件と、それによって多くの人が犠牲になった事。

もし『闇の書』が完成してしまうと、この世界に滅亡の危機が訪れる事。

話が進むうちに、はやての顔が徐々に暗く沈んでいく。

彼女にとって辛い話なのはわかってはいるけど、どうしても伝えなくてはならない。

「そんな……まさかこの子がそんな危険なものやったなんて……」

「ごめん。でも、どうしてもはやてには話しておかなきゃダメなんだ」

「どうして？ どうして龍姫君はこんな事をわたしに話したりしたん？ こんな事、わかってたら聞きたなかった！」

イヤイヤと頭を振って、はやては俺に激しい感情をぶつける。

俺はそんなはやてに近づくと、その両肩を掴んで大きな声で彼女の名を呼んだ。

「はやて！」

突然の俺の大声にビクッと身体を震わせるはやて。

「はやて、落ち着いて。まだ僕の話には続きがあるんだ。聞いてくれないかな？」

「続き……？」

「うん」

「嫌や……あんな悲しいお話なんてもう聞きたない」

「大丈夫。ここから先はその悲しみを終わらせる為の、未来の話だよ」

「未来の、話……？」

「うん」

「……わかった。聞かせて？」

「ありがとう、はやて」

俺はそう言つて、一度ギュツとはやてを抱きしめてから離れる。

「……／／／／」

はやては顔を真っ赤にして俯いていた。

「それじゃ、話すね。実は『闇の書』って名前は改悪が繰り返された後でつけられた名前で、本来は違う名前だったんだ」

「違う名前？」

「うん。この本の本当の名前は『夜天の書』」

「『夜天の書』……」

「それで、僕はこの『闇の書』をもう一度『夜天の書』に戻そうと思ってるんだ」

「……えっ！？龍姫君、そんな事できるん？」

「うん。できるよ。実は今その為の準備を進めてるんだけど……アテナ」

そうして俺がその名前を呼ぶと、空中にモニターが開いた。

『やっとお呼びが掛かったわね。待ちくたびれたわよ？』

「ごめんごめん。……っと、紹介するね。前に話した、家に居候してるアテナだよ」

『はやてちゃん、はじめまして。アテナ・グラウクスよ。よろしくね』

「あ、はい。よろしくお願いします……って、え？ええ！？」

最初は普通に應對したはやてだったけど、すぐに驚きの声を上げた。

「た、龍姫君！こ、コレ何！？どうなってるん！？」

「えっとね、詳しく説明するとちょっとややこしいんだけど……」

という事で、次元通信について簡単に説明した。

「……はあ、すごい技術やね……」

俺の説明を聞いてしきりに感心しているはやて。

「そろそろ話を戻していいかな？」

「あ、ゴメンな。うん、ええよ」

「『闇の書』を『夜天の書』に戻す方法。それは『夜天の書』だった頃のデータを今のデータに上書きする事なんだ」

「……へ？そんだけ？」

まさにキョトン、といった様子のはやて。まさかそんな簡単な方法だとは思ってなかったらしい。

「うん。それだけだよ。で、今アテナには上書きデータのパッチを作ってもらってるんだ」

『そうなの。ちなみに進行状況は、だいたい4割くらいってところね』

「多分、あと2ヶ月もあれば完成すると思う」

「そ、そうなんや……それが完成すれば、この子は助かるん？」

「うん」

『ええ』

「……ほんなら、龍姫君、アテナさん。どうかよろしく願います」

「大切な友達の為だからね、もちろん全力を尽くすよ」

『任せておいて!』

「2人とも、ありがとうございます……」

はやてはそう言っ頭を下げた。……はやての気持ちに応える為にも、頑張らないとな!

「それから、最後にもう1つ。実は『夜天の書』には管制人格、つていうのがあるんだ。シグナム達みたい人なんだよ」

「シグナム、ほんまなんか?」

「はい」

「へえ」

「で、その人には名前がないんだ。だから、はやてがつけてあげてよ」

「……そっか。そういう事なら素敵な名前を考えてあげなアカンね。責任重大や」

「うん。よろしく」

と、これで話も纏まってめでたしめでたし……と思っていたところ

で――

「そつえば龍姫君、何でそんなに色々詳しいん？」

はやてがそこに触れてしまった。

こりゃ話さないとダメ、だよなあ．．．あ、いや、別に秘密にしておく気はなかったぞ？聞かれたらちゃんと答えようと思ってたし。

「……えつと、はやては魔法の事は知ってるんだよね？」

「せや。シグナム達から一応説明されたからな」

「実はね……僕も魔導師なんだ」

「……え？ええええつ！？」

八神家に響き渡る家主の驚きはやての声。

「う、嘘……龍姫君、それほんま？」

「うん。本当だよ。その証拠に……ほら」

そう言つて、俺は空中に魔力スフィアを作り出した。

「は……ほんまや……」

それを見て、はやては納得してくれたようだ。

「それから、時空管理局つてところに勤めてる」

さらに俺はそう言つて局員証を見せた。

「え！？龍姫君、もうお仕事もしとるんか！？」

「うん。あ、ちなみにさつきアテナがいたのが僕の執務室だよ」

「ふん」

それから管理局についても説明する事になった。

もちろん裏の黒い部分については一切触れず、極めて表層的なところしか話さなかった。

その後も結局はやての家で夕飯をご馳走になり、終始和やかムードで時間を過ごした。

以前に比べてシグナム達の態度がだいぶ軟化していたので、気になつてこつそり聞いてみたところ、

「主はやてがいつもお前の事を楽しそうに話すのでな。主がそのままで信を置く人物なら、我らも信用するに足ると思つたのだ」

との答えが返つてきた。

そっか。はやてが俺とシグナム達の架け橋になつてくれたんだ・・・

それがわかつて、ちょっと嬉しくなつた俺だった。

第21話 『明かされた真実と、向き合う勇氣』（後書き）

あとがき

作者 「はやてに全部説明しちゃったな」

龍姫 「全部？……違うな。まだ話してない事があるだろう？」

作者 「あれ？あつたか？」

龍姫 「お前が忘れてどうするんだよ！ほら、アレだって！」

作者 「アレ？はて、何だったかな……」

龍姫 「もういい。耳を貸せ。いいか？……」

作者 「ああ！ソレか！」

龍姫 「つたく……何で作者のお前が忘れるかなあ……」

作者 「いやあ、めんごめんご」

龍姫 「……本当に反省してるか？」

作者 「してる！もう心の底から反省してます！」

龍姫 「……ならいい」

作者 「それで次回なんだけど」

龍姫 「どうするんだ？」

作者 「最近放って置かれ気味のあの人達が帰ってきます！」

龍姫 「誰だ？」

作者 「ふっふっふ……それはお楽しみという事で。それでは次回予告！」

次回、第22話『俺と魔王と夜叉の囑託試験（仮）』

を」

龍姫 「よろしくな！……って、何だその不吉なタイトルは！」

作者 「それでは皆さん、さようならー！」

龍姫 「あ、こら、テメエ逃げるな！」

第22話 『俺と魔王と夜叉の囑託試験』

「たつくん！覚悟、なの！」

「龍姫！そこを動かないで！」

「そんな事できるかああああっ！」

何故か今、俺はなのはとフェイトの2人に追い回されている。

「フェイトちゃん！」

「なのは！」

「いくよ！ディバイ——ン」

「サンダア——」

なっ！？ここで同時砲撃だって！？あれはやばい！

「ハイペリオン！」

『All right, master』

「『アイギス？』！」

『Aegis?』

急いで盾を展開し、ありったけの魔力を込める。

「バスタア——！」

「スマツシャア——！」

「うおおおおおっ！？来たああああっ！？」

——ズガアアンツ！

ものすごい轟音と共に2人の砲撃が盾に刺さる。

「……ところで、なんで俺がこんな目に遭ってるかって？それは遡る事数日……」

「は？囑託試験の試験官？」

今日は7月某日。

突然アースラに呼び出された俺は、そんな仕事を言い渡された。

「ああ。実は受験者が出たんだが、実技試験の試験官をできる局員がいなくてね」

「そんな高ランクのヤツなのか？」

「こちらの見立てではAAAランクという事だ」

「へえ……なかなか優秀だな。……待てよ？それならクロノ、別にお前でもいいだろ」

そう言つて向かいに座っているクロノに返す。一応コイツのランクはAAA+だからな。

「僕はちょうどその試験の日に別の任務が入っているから無理なんだ」

「……俺も別に暇つてわけじゃないぞ？」

なんせ『闇の書』の修正プログラム作りがあるからな。

「だが君はその日、特に任務を受けているわけではないだろう？」

「う……それはそうだが……」

「ならいいじゃないか。文句を言うな」

「へいへい。わかったよ」

「それじゃ、これが正式な辞令だ。よろしく頼んだぞ」

そう言つて席を立つたクロノ。

……あ、受験者の名前聞き忘れた。

そして囑託試験当日。

実技試験の開始時間が近づき、転送ポートで待つ俺。すると――

『龍姫君、お待たせ！これから試験会場に送るけど、準備はいい？』

「ああ……って、その声はエイミィか？」

『当たたり！……それじゃ、いづくよ！』

聞き慣れた声が聞こえたと思ったら、その正体はエイミィだった。そして特に会話をする間もなく、俺は転送された。

『試験官って誰なんだろうね？』

『うーん……誰だろう？』

『まあ誰が相手でもアタシらの敵じゃないさ！』

転送先に着いたと思しきその時、そんな会話が聞こえてきた。声からして女性……しかも3人だな。

……よし、ここは試験官としての威厳ってヤツを見せてやるか。

「俺が試験官だ」

無駄に堂々とした声で受験者に告げる俺。

「え！」

「あ！」

「アンタ！」

はっはっは。驚いてる驚いてる……って、んなっ!?

「受験者ってお前らの事かああああっ！」

「はわっ!？」

「ひゃうっ!？」

「うわっ!？」

突然大声を出した俺に驚きの声を上げた受験者3人。それは――

「そ、それはこっちの台詞なの！」

「た、龍姫が私達の試験官だったんだ……」

「まさかアンタだとは思わなかったよ……」

なのは、フェイト、アルフの3人だった。

「……ジーザス！クロノからAAAランクと聞いた時に気付くべきだったぜ！よく考えたらコイツらもそうじゃん！」

『龍姫く〜ん？帰つといで〜』

あまりのショックに愕然としていたところに、エイミィの通信が入った。

「ハッ！？」

それを聞いて復活する俺。……いかにいかに。

「……それにしても、フェイトが受験する事は知ってたけど、まさかなのはちゃんまで受験するとは思わなかったよ」

なのはが嘱託資格を取る事は知ってたんだが、原作では試験を受けたなんて情報はなかったからな……

「私もこの前の事件が終わってから考えたんだ。悲しい思いをしている人を助ける為にできる事って何かなあって」

「それで行き着いた結論が管理局の嘱託魔導師って事？」

「そうなの！」

「……なるほどね。なのはらしいっちゃらしいな。」

「そつえば先月くらいからあまり龍姫の姿を見てなかったけど、何してたの？」

「あ、それ私も気になる！ たつくんってば放課後になるとすぐ教室からいなくなっちゃうんだもん」

「あー、それね。 実は5月の終わりに図書館に行った時に友達になった子がいてね。 その子のところに遊びに行ってたんだ」

「へえ〜。 それってどんな子なの？」

「私にも教えて欲しいな」

「そうだね。 近いうちに紹介しようとは思ってたんだけど、実は僕達と同じ年の女の子なんだ。 名前は八神はやてって言っただけ……」

——ピシッ

そういつた瞬間、空気が凍った。 . . . あれ？

「……そっか。 そうだったんだ…… たつくんってばいつの間にか新しい女の子とお友達になってたんだね……」

「最近全然龍姫に会えなかったからちょっと心配してたのに、まさか他に女の子ができてたんだ……」

さらに全身から真っ黒なオーラを発し始める2人。

「なのは？ フェイト？ 2人ともどうしちゃったのさ？」

訳がわからず、俺は2人に問いかけた。

「「たつくん（龍姫）、私とO H A N A S H Iしょうか……」
」

「……バカな！？何故俺にO H A N A S H Iフラグが！？」

「ちょっと待つて！とりあえず2人とも落ち着こう？ね？」

「……ヤバい！とにかくヤバい！目の前にいる2人はもういつものなのはとフェイトじゃない！アレは「白い悪魔」と「金色の夜叉」だ！」

「大丈夫だよたつくん。私は落ち着いてるの」

「そうだよ龍姫。私はとっても冷静だよ？」

「……絶対にそうは見えん。」

「ハッ！待てよ？……確かに今の状況はヤバいかもしれないけど、試験になれば1対1だから大じよ——」

『あ、龍姫君？伝え忘れてたんだけど、今日の試験はなのはちゃん達との3対1だから』

「……ノオオオオオオツ！？」

「ちょっと待て！アレの相手を俺1人でやれと！？それは俺に対する死刑宣告か！？そうなんだな！？」

『またまた、冗談言っちゃって！龍姫君なら3人相手でも充分試験官が務まるでしょ？』

「そりゃ2人の精神状態が平常だったらな！あんなつまったら正直俺の手にもあま——」

『それじゃこっちでモニターしてるから、早く試験を始めてねー！』
そこで無情にも切れる通信。．．．．．オーマイガッ！

「たつくん……早く試験を始めるの……」

「龍姫……早くやろつよ……」

ハイライトの消えた瞳で、俺に向かってそれレイハとバルぞれの愛機を構える2人。

くっ．．．．．やるしかないか．．．．．

「……よし！それではこれより戦闘試験を開始する！3人ともかかってこい！」

こうして話は冒頭に戻る。

―Side　なのは

「むう……アレも防がれたなの……！」

「やっぱり龍姫の守りは堅い……！」

私とフェイトちゃんの同時砲撃も、たっくんの盾によって防がれてしまいました。

「（フェイトちゃん！私『SLB』を撃つの！少しの間時間を稼いでくれる？）」

「（……そうだね。確かにアレくらいやらないと、龍姫の防御は抜けないかも……うん。任せてなのは！）」

フェイトちゃんとそう念話を交わすと、私は戦場から少し距離をとります。

「いくよ、レイジングハート！」

『Starlight Breaker』

私の声に応えて、レイジングハートが魔力のチャージを始めます。

「はああああっ！」

私の眼下では、フェイトちゃんとたっくんが激しい攻防を繰り広げています。

「レイジングハート！たつくんに気付かれる前に、何としても決めるよ！」

『All right, my master』

私の目の前に展開された魔法陣に魔力が集まって、桜色の球がだんだん大きくなっていきます。

「きゃあああああつ！？」

その時、突然フェイトちゃんの悲鳴が聞こえてきました。

「フェイトちゃん！？」

下を見ると、フェイトちゃんがたつくんの攻撃にシールドを破られて吹き飛ばされていくのが見えました。

「うおっ！？アレは『SLB』……なのか！？」

そして、たつくんがこちらに気付いてしまいました。

「っ！レイジングハート！急いで！」

『Count 9, 8, 7, ……』

発射までのカウントダウンが始まります。

「くそっ！やらせるかあああああつ！」

たつくんがこっちに向かって飛んできました！

「早く……早く……っ！」

『……3、2、1』

やった！間に合うの！

『C o u n t 0』

「たつくん、これで終わりなの！スターライトお……ブレイカ——
っ！」

掛け声と共に発射される私の切り札。これならっ！

「ハイペリオン、フルドライブ！」

『D r i v e b u r s t』

だけどその時、突然たつくんから感じていたプレッシャーが膨れ上がりました。

「え！？」

「『フォースアブゾーブフィールド』、展開！」

『F o r c e A b s o r b F i e l d』

そして、たつくんの周りを覆うように防御魔法が張られます。

「それでもっ！防御の上から撃ち抜くの！」

フェイトちゃんと出会ったあの事件の後も、毎日ユーノ君と一緒に魔法の練習をしていた私。その成果を見せてあげるの！

——ズドオオンッ

たつくんが張ったフィールドに『SLB』が直撃します。．．．．．
やった、なの！

「……残念だったな」

そこに突然聞こえた、たつくんの声。

「へ！？」

だんだん勢いを失くし、収まっていった光の先には、フィールドに守られた無傷のたつくんがいました。

「なのは、さっきのは流石にちよいと俺もビビったぞ？……という訳で、お返しだ！」

『Reflect Burst Full Drive』

——キイイーン！

「え？え？」

どうしてたつくんが無事だったのかわからずに混乱する私に向けて、砲撃の準備をするたつくん。

『マスター、防御の準備を』

「ふえ！？あ、そ、そっか！」

レイジングハートの指摘に、慌ててシールドを張ろうとしたその時

——ジャキイン！

「っ！？バインド！？そんな……いつの間に！？」

突然現れたバインドに絡め取られて、身体が動かせなくなってしまいました。

「ふっふっふ……それはな、なのは。お前が『SLB』発射後に状況を見守ってきた時に仕掛けたんだよ」

私の呟きになつくんが律義に答えてくれます。

「……それになのは。この状況、どこかで見覚えはないか？」

「この状況に見覚え？うーん……あっ！？」

「覚えていたようだな。……そうだ。お前がフェイトと決闘をしたあの時と同じ状況だよ」

「た、たつくん？どうしてこんな事を！？」

「ちよっぴりおイタをした子にお仕置き、だよ」

「そ、そんなぁ……」

「と言う訳で、これで終わりだ！」

『Burst Break』

——ズドオオンっ！

次の瞬間私の『SLB』と似たような魔力砲が放たれ、ロクに防御もできない私に直撃します。

「きゃああああああっ！」

強大な光の奔流に飲み込まれ、だんだん意識が薄れていく中で私が思った事。それは――

……あの時のフェイトちゃんってこんなだったんだ。確かにやりすぎだったかも。ごめんね、フェイトちゃん……

そんな事でした。

| Side
Out

第22話 『俺と魔王と夜叉の囑託試験』（後書き）

あとがき

龍姫 「今日はいきなり次回予告だ」

作者 「次回、第23話『試験終了！その結末は……（仮）』を」

龍姫 「乞うご期待！」

第23話 『試験の結末と仲良し5人娘結成、そして新たな力』

「ふう……」

一時はどうなる事かと思ったけど、とりあえず何とかなったな。

俺は今、先程の砲撃で気絶したなのはをお姫様抱っこしながら宙に浮いている。

「（そういえばアルフ。お前はどつするよ？）」

俺は戦闘開始から完全に空気と化していたアルフに念話を送る。

「（その声は龍姫かい？……アレを見せられた後じゃ、アタシには無理だよ……）」

それもそうか。

「よし！それではこれにて試験終了！」

そうして俺は高らかにそう宣言した。

「う……うん……」

すると俺の声に反応したのか、なのはがゆっくりと目を開けた。

「……あれ？ここは……」

「目が覚めたみたいだね」

「ふえ？た、たつくん！？……ふえっ！？ええっ！？」

なのは俺に気付いて慌て、さらに自分がお姫様抱っこをされている事に気付いて驚く。

「なのはちゃん、あまり暴れないでね。落っこしちゃうよ？」

「ふにやつ！？ご、ごめんなさい……／＼／＼」

そう言って顔を真っ赤にするのは。

「自分で飛べる？」

「うゝん……ちょっとまだダメかも……」

「わかった。じゃあこのままとりあえず下に降りるね」

俺はそのままフェイト達が待つ地上に降りていった。

「合格……したかったなあ……」

「フェイト……」

地上に降りた俺達を出迎えたのは、何故かメツチャ落ち込んでるフェイトとそれを慰めるアルフの2人だった。

ちなみに、なのはは着いてすぐに俺から降りると言い出したので降りた。

これは……………

「……フェイト？まさか『負けたら不合格』とか思っ
てないか？」

「……え？」

俺がそう声を掛けると、バツと顔を上げるフェイト。
……やっぱりな。

「この試験は戦闘技術を見るだけだから、別に勝敗は試験の合否と
は関係ないよ」

「そうなの？じゃあ……！」

「ああ。今の戦闘も悪くなかった。……2人とも合格だ」

「あっ……！」

「やったね！フェイトちゃん！」

俺の合格宣言に抱き合う2人。

「でも……」

「うん。そうだね……」

と、突然2人してジト目で俺を見てきた。

「な、何だ？2人ともどうしたんだ？」

その視線にビビる俺。

「試験の前に聞いたお話……あれについてまだ何も聞いてないの」

「そうだよ。詳しく聞かせてもらわないと……」

「いや、別にそんな大したことじゃないんだけど……」

そうして『闇の書』の事には何も触れずに、はやての事を2人に話した。

「へえ……私も友達になれるかな？」

「私もはやてちゃんに会ってみたいの！」

俺が話し終わった後には、そう言ってくれた2人。……よかった。

「うん、是非2人にもはやての友達になって欲しいな。あ、2人も2週間後の週末って空いてる？」

「え？……ごめんね、週末はいつもお店のお手伝いしてるの……」

「そっか……じゃあ会場が翠屋ならどう？」

「あ……うん！それなら大丈夫なの！」

そう言って笑顔になるのは。

「フェイトも、どうかな？」

「え？……うん、一応空いてるけど……」

「よし。じゃあ決まりだ」

「……おつと。もう1つの用件も忘れないうちに伝えないと。」

「それともう1つ、試験合格のお祝いとして2人のデバイスを強化しようと思っただけど……」

恐らく今回は原作A・Sの最終決戦は起きないはずだから、今のうちに2人のデバイスにカートリッジシステムを組み込もうと決めていた。

「え？」

「ホントに？」

「ああ。これから2週間で仕上げようと思ってるから、デバイスを俺に預けてくれないか？」

「そういう事なら……はい、たっくん。レイジングハートをよろしくね」

「私も……はい。龍姫、バルディッシュをよろしく」

「確かに預かったよ。完成を楽しみにしててね」

とまあそんなわけで、なのはとフェイトの囑託試験は終わった。

そしてそれから2週間が経過し……

「皆遅いなあ……」

「うう……龍姫、どうしよう……緊張してきたよ……」

翠屋前でアリサとすずか、そしてはやてを待つ俺とフェイト。

「そんな緊張しなくても大丈夫だよ。みんないい人達だから」

「うん……そうだね」

そのまましばらく待っていると――

「龍姫、お待たせ」

「ごめんね。ちょっと遅くなっちゃったかな？」

「アリサ、すずか、来てくれてありがとう。そんなに待ってないから大丈夫だよ」

さらに――

「龍姫君、遅なってゴメンな」

「はやて！来てくれてありがとう」

これで全員揃ったな。

「それじゃ、とりあえず皆で中に入ろう」

という訳で中に入り、なのはも合流して、あらかじめ予約しておいた店の奥のテーブルに座る。

「まずは自己紹介からだね。って言っても僕の事は皆知ってるから飛ばして……」

「じゃあアタシからね。アリサ・バニングスよ。よろしく」

「次は私かな？月村すずかです。よろしくね」

「高町なのはです！よろしくね」

「えっと……フェイト・テストロッサです。よろしくお願いします……」

「わたしは八神はやてです。よろしくな」

自己紹介が済み、俺は皆にフェイトとはやて、2人との出会いについて説明する。

「フェイトとは今年の4月に知り合ったんだ。その時フェイトは偶々海鳴に来てただけで、今日からしばらくこっちに來られる事になったから、皆に紹介しようと思ってね」

「初めて来た時に困ってたところを龍姫となのはに助けられて、2人とはそれ以来の友達なんだ」

「フェイトちゃん、また会えて嬉しいの！」

「なのは、私もだよ」

そう言っただけ笑いあうのはフェイト。．．．はいそこ、自分達の世界に入らないように！

「それから、はやてとは5月に海鳴図書館で知り合っただけ友達になったんだ。家もこの近くで、何回か遊びに行った事もあるよ」

「そうなんよ。わたしも龍姫君にいろいろ助けてもらったりしてな」

「たっくん、はやてちゃんの家に行った事は聞いてないの……」

「そうだね……秘密はよくないよ？」

俺の言葉を聞いた途端、なのはとフェイトから真っ黒なオーラが吹き出す。

．．．．あれ？もしかして俺、地雷踏んだ？

「フェイトも龍姫狙いなだね……」

「大変だね……」

そんな2人を見てアリスは呆れ、すずかは俺に同情してくれる。

「むう……なのはちゃんとフェイトちゃんがわたしのライバルやね……」

「……あれ？はやて？君も何を言ってるのかな？」

はじめは何だか変な空気だったけどその後は落ち着いて、皆で和気藹々とお喋りを楽しんだ。

やっぱり皆女の子。翠屋の美味しいスイーツに舌鼓を打ちつつ、話に花を咲かせていた。

ただ、時々なのは、フェイト、はやての間に火花が散っているように見えたのは気のせいだと思っていた。

6人での楽しいお茶会も終わり、アリサとずずか、はやてが帰ったその後。

「なのは、フェイト、約束通り2人のデバイスのパワーアップが終わったよ」

「本当！？」

「どんな風変わったのかな？」

そうして、改造を終えたレイハとバルをそれぞれに渡す。

「とりあえず起動してみてよ」

「うん！」

2人は笑顔で返事をする、デバイスの起動を始める。

「レイジングハート！」

「バルディッシュ！」

「セーッ……アッ！」

「Order of the "setup" was accepted」.

「Operating check of the new system has started」.

「Exchange parts are in good condition, completely cleared from the NEURO-DYN A-IDENT alpha zero one to beta eight six five」.

「え？こ、これって……」

「The deformation mechanism confirmation is in good condition」.

「今までと……違う……」

これまでの起動とはどこか違う事に気づいた2人が戸惑っている。

『Main system, start up.』

『Haken form deformation preparation: the battle with the maximum performance is always possible.』

『An accel and a buster: the modes switching became possible. The percentage of synchronicity, ninety, are maintained.』

なおも続く起動プロセス。

「実はね、今回レイジングハートとバルディッシュには新しいシステムを積んだんだ」

「新しい……システム？」

「ああ。これから管理局の仕事に関わるからには、きっと大変な事もたくさんあると思う。でもそれはそんな困難に立ち向かう為の、新しい力なんだ」

「困難に立ち向かう為の……新しい力……」

「だから呼んであげて。その子達の新しい名前を！」

『Condition, all green. Get set.

』

『Standby, ready.』

「うん！……レイジングハート・エクセリオン！」

「バルディツシュ・アサルト！」

『Drive ignition.』』

さて、お約束の変身シーンは後ろを向いて……つと。

そうして、光が収まったところで振り返る。そこには――

『Assault form. Cartridge set.』

『Accel mode. Standby, ready.』

新しく設計されたバリアジャケットに身を包み、新しくなったそれイハとバルぞれの愛機を手立つのはとフエイトがいた。

「……ふえ？これって……？」

「何だろう……龍姫、これは？」

「今回2機に搭載したそれは『カートリッジシステム』っていうんだ。圧縮魔力を込めたカートリッジをロードする事で、瞬間的に爆

発的な魔力を得ることが出来るシステムなんだよ」

「ほえ……」

「それはすごいね……」

「さらに、新しくなった2機にはそれぞれ3つのモードがあるんだ。レイジングハートは中距離射撃のアクセルと砲撃のバスター、フルドライブのエクセリオンモード。バルディッシュは汎用のアサルト、鎌のハーケン、フルドライブはザンバーフォームって言う」

「そっか。使う魔法によってそれぞれのモードを使い分けるんだね？」

「なるほど」

「うん。ただしフルドライブは使いすぎると使用者への負担が大き
いから、あまり頻繁に使わない事。特になのはちゃんはすぐ無茶を
しようとするから、気をつけるように」

「うん。わかった」

「うう……なんで私にだけそんな……」

「幼なじみとして心配なんだよ。無茶をし過ぎて怪我をした、なん
て目も当てられないでしょ？」

「っ／／／……うん、そうだね。たっくんの言う事だもん、私
ちゃんと聞くよー」

．．．よし。これで『あの事故』が起きる可能性を少しでも下げることができれば御の字だ。

さあ、次はいよいよ俺の『計画』の最終ステップ、『闇の書』の修復だ！

．．．あ、その前になのは達ヴォルケンズにシグナム達を紹介するか。って
いつかその場で修復もやればいいな。

第23話 『試験の結末と仲良し5人娘結成、そして新たな力』（後書き）

あとがき

龍姫 「何だか色々と一気に進んだな」

作者 「……気にしないでくれ」

龍姫 「わかった。……しかし、なのは達3人娘はどうにかならないもんか……」

作者 「無理だ。もう3人ともバツチリフラグが立ってるからな」

龍姫 「……嘘だっ！」

作者 「いや、嘘じゃないから。っていうか。ぐらしネタだよ」

龍姫 「それなら、せめてこれ以上増えない事を祈る」

作者 「うーん……どうだろう？もしかしたら増えるかも……」

龍姫 「やめてくれ！正直もう充分だ！」

作者 「まあまだどうするか決めてないからな。もうちょい待ってろ」

龍姫 「……全く期待が持てない……」

作者 「えゝ、それでは次回予告！

次回、第24話『ついに現れた最強(?)の助っ人(仮)』

へ……」

龍姫 「ドライブ・イグニッション！」

第24話 『ついに現れた最強(?)の助っ人』

なのはとフェイトの囑託試験も終わり、世間は夏休み真っ只中な8月某日。

「こっちのシステムチェックは全部終わったぞ！アテナ、そっちはどうだ？」

「ちょっと待って。後もう少しだから……っと、終わったわ」

「よし。リーゼ姉妹！そっちは？」

「もうちょっと掛かるかも……っていうか、龍姫は人使いが荒いんだよ」

「そうね……ここ2ヶ月、まともに休んでないもの」

「黙れ。協力すると言ったからにはキリキリ働いてもらっただからな」

「鬼ーっ！悪魔ーっ！」

「……まさか俺が悪魔と呼ばれるとは思わなかったな。」

「それに全く休ませてないわけじゃないだろ。ついこの間もマッサージしてやったじゃないか」

「……確かにアレは気持ちよかったわね。またやってくれる？」

「作業が全部終わったらな」

「やったー！だったらアタシ、頑張っちゃうよー！」

「それなら私も頑張るわ」

．．．．．まったく、現金なヤツらだ。

以前あまりに疲労が蓄積した結果ダウンした2人に、マッサージをしてやった事があった。それが2人に好評で、今までに何回かやっているのだ。

「俺とアテナも手伝うから、少しこっちに回せ」

「ありがとう」

「助かるわ」

そうして4人で作業する事およそ1時間――

「これで……終わりっ！」

――パチンっ！

俺が最後のキーを叩く音が室内に響く。

「いやったあーっ！」

「終わったわね！」

「ええ。これでようやく準備が整ったわね龍姫。ロツテとアリアもお疲れさま」

「おう！アテナも本当にお疲れさま。リーゼ姉妹も、よくやってくれた」

「うん。お疲れ」

「お疲れさま」

その瞬間訪れた達成感を皆で分かち合う。うん、よかったよかった。

「これではこの修正パッチを今の『闇の書』に上書きすれば、万事解決だな」

「そうね」

アテナと2人で笑いあう。するとそこへ――

「たっつきー！約束のマッサージー！」

「おわっ！？ロツテ、いきなり飛びついてくるな！」

突然ロツテが抱きついてきた。

「そうね。終わって早速で悪いけど、お願いできるかしら？」

さらにアリアがそんな事を言う。

「アリアまで……わかった。やってやるから用意しろ」

「「はい!」「」

そう返事をする、2人はネコ形態^{モード}になる。そして――

「ほぐれ。この辺とかどうだ?気持ちいいか?」

「ふにゃあああ……やっぱり龍姫のマッサージは最高だ」

「ふ、ううん、そうね……あ、そこもう少し強く……」

「はいはい。……っと、こんなもんでどうだ?」

「あふう……そ、それいいわ……続けて……」

「うにやつ、はふう……あゝ、極楽極楽……」

「ついでに今日はブラッシングもやってやるよ」

「おつ、流石龍姫!気が利くね」

「ありがとう。よろしくね」

「んじゃ、多少くすぐったくても我慢しろよ?」

「「はい!」「」

そのまま1時間くらいかけてマッサージとブラッシングを行い、終

わった後は満足した様子で2人は帰っていった。

「これで全ての準備が整ったな」

「ええ。これでもう『呪われた魔導書』は救われるわね」

「ああ」

アテナと2人、執務室で話をする。

「でもこれが終わったら終わったで、今度は10年後に備えた準備を始めないといけないんだよね……」

「それは確かにそうだけど、今はとにかく目の前の事をしっかり済ませないと」

「それもそうだ。それじゃなのはとテストロッサ家、ファミリそれにはやてとヴォルケンスに連絡を入れないと」

「ハラオウン家は呼ばないのね」

「アイツら、特にKYが介入してくるとまた色々面倒だからな」

「……そうね」

「わかってくれたようで何よりだ」

そうして執務室を後にしようとしたその時、

『タツキ、外部からこの部屋に移移してくる者がいます』

突然ハイペリオンが警告^{アラート}を発した。

「な！？バカな！ここは時空管理局の総本山で、しかもこの部屋には結界を張ってあるんだぞ！？」

『ですが間違いありません。……来ます』

俺はありえない事態に動揺するが、そんな事はお構いなく侵入者はやって来た。

——パシュッ！

そこにいたのは——

「あ！パパっ！」

「はあっ！？って、うわぁ！？」

俺の執務室に移移してきた『ソイツ』は、突然そんな事を口にすると同時に俺に飛びついてきた。

俺は突然の出来事に面食らって、その場で固まる。

「パパ！パパ！やっと会えたです♪」

「????」

いまだ混乱から覚めない俺を置いて、『ソイツ』——ちっこい少女は俺に頬擦りしている。

「龍姫……あなたいつの間に……」

「なっ！ちよつと待てアテナ！何で俺から距離をとるんだ！」

その一部始終を横で見ていたアテナが、ススッと俺から離れる。

「まさか龍姫が犯罪者になってたなんてね……」

「いや、なつてないから！それに俺は何もしてない！」

「えっ？でも……」

何だか壮絶な誤解を生んでいる様子。……くそっ！一体誰の仕業——

「はっはっは！どうやら大成功のようだな！」

そこに突然聞こえてきた声。この声は——

「……ゼウス！これはお前の仕業か！」

「いかにも。いや、しかしおかげで面白いものが見られた。よくやった『イリス』」

俺が叫んだその時、ゼウスが姿を現した。

「ありがとうございます、マイスター」

すると、俺に頬擦りしていた少女がそう言ってゼウスに一礼した。

．．．ん？

「マイスター？……どういう事だ？」

「簡単な話だ。イリスは俺が作った。……お前のユニゾンデバイスだ」

「何だって？……じゃあ、この子が？」

そう言つて、イリスと呼ばれたちっこい少女を指差す。

「はい！イリスがパパのユニゾンデバイス、イリスです！」

「そ、そうか……えっと、イリス？とりあえず俺の事をパパって呼ぶのはやめないか？」

このままイリスを紹介すると、きっと俺はごく一部の人間とOH
ANASHIしなければならなくなる。

「でもでも、イリスにとってパパはパパなんです！」

「そこを何とかお願いできないかな？せめて名前で呼んで欲しいんだけど……」

「む……わかったです。……パパの名前は何て言うですか？」

「龍姫だよ。氷護龍姫、それが俺の名前だ」

「タツキ……わかったです、タツキパパ！」

「……何だか余計後に引けない感じになってしまった気がする。

「うう……仕方ない……こればかりは気長に矯正するか……」

もう色々と諦めた俺だった。

「……というかゼウス。もうちょっと何とかできなかったのか？」

いや待てよ？むしろコイツの性格を考えると――

「ふっふっふ、よくわかってるな。その通りだ。この方が俺にとっては面白いと思ったから、今以上の調整をしなかったのだ！」

「んな偉そうに宣言すんじゃない！結局またお前の道楽の為か！」

「当たり前だ。言っただろう、これは俺の暇潰しだと。俺が楽しめればそれでいいんだ」

マジでコイツはいつかクロス……！！

「殺^やれるものなら殺ってみろ」

「俺の心を読むな！」

「今日の用事はこれだけだ。届け物^{イリス}は確かに渡したぞ。……さらばだ！」

「この野郎っ！出るのも唐突なら帰るのも唐突だなっ！」

「はっはっは！神とはそういうものだ！」

高笑いを残して消えるゼウス。まったく……いつもいつも人騒がせなヤツめ。

「タツキパパ、マイスターとのお話は終わったですか？」

と、そこにイリスが話し掛けてきた。

「ああ、終わったよ」

「ではですね、早速イリスとユニゾンしてくださいです！」

俺はイリスの提案について考える。確かに、今ここで試してみるのもいいな。ここなら結界があるから、局のヤツらにもバレないし。

「……ん、そうだな。ハイペリオン！」

『Standby, ready』

俺の声にハイペリオンが答え、俺は一瞬でバリアジャケットを纏う。

「よし、いくぞイリス！」

「はいです！」

「ユニゾン・イン！」

2人の声が重なり、イリスが俺の身体の中に消える。

——ピカッ！

それと同時に、俺の両腕に装着されているハイペリオンの箆手が輝く。……何だ？

——バシユウウン

そうして光が収まってから、俺は室内にある姿見を見た。そこには

「おおっ？」

まず初めに気がついた事は、瞳が虹色に輝いている事だった。

「虹の名は伊達^{イリス}じゃないって事だな」

『えっへんです！』

俺の言葉を聞いたイリスが、俺の中で胸を張っているのがわかった。

「あとは……ん？これは……」

次に俺が気がついたのは、先程輝いていた箆手パーツだった。

「……『カートリッジシステム』か。しかも両手に6連装のスロットが1つずつ、合計12発ってどうなんだよ……」

『あ、忘れてたです！初めてイリスとユニゾンした時に、ハイペリオンもアップデートされるようになってるです！』

俺の中からイリスが説明してくれた。ちょっと遅かったけどな。

「ああ。今確認したよ。ありがとうイリス」

『はいです』ちなみに、アップロード後の名前は“ハイペリオン・セイヴァー・Saviour”です！』

Saviour:『救世主』か……。ゼウスのヤツもなかなか味な真似をする。

「わかった。……という訳で、改めてよろしくな『ハイペリオン・セイヴァー』」

『はい。これからもよろしくお願いします、タツキ』

生まれ変わった相棒と改めて言葉を交わした。

「よし。それじゃ、とりあえず今日はこのまま装備の確認をしたら帰ろう」

『はいです！』

『了解です』

そうして他の変更箇所を確認してから、俺達は帰途に着いた。

第24話 『ついに現れた最強(?)の助っ人』(後書き)

あとがき

作者 「本日のゲスト、ユニゾンデバイスのイリスだ!」

イリス 「よろしくお願いしますです!」

龍姫 「イリス、いい子にしてるんだぞ?」

イリス 「はいです、タツキパパ!」

作者 「ププっ……『タツキパパ』だって……ププっ」

龍姫 「……余計な事を言ったらコロス」

作者 「ごめんなさいもう何も言いません」

イリス 「あははっ、作者さん面白いです!」

作者 「……いやあ、それにしても可愛いなイリス」

龍姫 「まあな」

イリス 「わーい!イリス褒められました!」

作者 「という訳で次回は新キャラと新デバイスの紹介と、ついでに主人公についての補足説明をしようと思う」

龍姫 「確かに、ここでやるのがベストだな」

イリス 「イリスを皆さんに紹介してくれますか？」

龍姫 「ああ。そうどうぞ」

イリス 「イリス楽しみです！」

作者 「それでは次回に向かって——」

龍&イ 「「ドライブ・イグニッション」です（「！」「」

主人公設定その2

作者 「前回の予告通り、今回は新キャラ及び新デバイスの紹介と主人公に関する補足説明をします」

龍姫 「それじゃ、まずはイリスからか？」

作者 「そうだな。……それではどうぞ！」

名前：イリス

性別：女

身長：約30センチ（アウトフレーム時：111センチ）

体重：乙女の秘密です！（本人談）

容姿：龍姫と同じ蒼銀の髪を腰まで伸ばしていて、瞳は虹色。

アウトフレーム時は7〜8歳くらいの子供。

性格：甘えたがりで、龍姫にべったり。割と独占欲が強い。
いつも笑顔で明るく元気いっぱい。

自分の事は「イリス」、龍姫は「タツキパパ」、アテナは「お姉ちゃん」、それ以外の人物は「名前で呼び捨て」か「名前＋さ

ん」と呼ぶ。

【スペック】

筋力：B 魔力：EX

気力：EX 耐久：A

敏捷：A A 幸運：B

【保有スキル】

魔力変換資質：風

自身の魔力を風に変換する事ができる。

攻撃魔法適正付与：EX

攻撃魔法への適正をほとんど持たない龍姫の為のスキル。

龍姫はイリスとユニゾンする事で集束魔法以外の攻撃魔法も使う事ができるようになる。

なので、今後基本的に戦闘時はユニゾン状態にいる事が多くなる。

作者 「……つとまあ、ざっとこんな感じだな」

龍姫 「なるほど」

作者 「後は龍姫とユニゾンした時だが、外見の変化は瞳が虹色になるくらいだな」

龍姫 「ああ。この前確認したから間違いない」

作者 「能力的には上記のイリスのスキルが追加される他に、演算処理速度が向上する」

龍姫 「そりゃ便利だな」

作者 「そして次は生まれ変わった龍姫のデバイス、ハイペリオン・Sだ」

インテリジェントデバイス『ハイペリオン・S』

性格：相変わらず真面目。

耐久性：フレームを再強化された事により、さらに向上。

セットアップ時：BJのデザインには変更なし。

両腕の籠手にそれぞれ6連装のボルトアクション式カートリッジシステムを搭載。

またシールドビットが両肩に1基ずつ、腰に2基
装備されるようになった。

新戦カイリスの加入に併せてアップデートされたハイペリオン。末
尾のSは『Saviour（救世主）』の略である。
フレームが再強化されて今まで以上に魔力伝導率が向上した為、よ
りスムーズな魔力運用が可能になった。

龍姫 「……シールドビットって何だ？」

作者 「誘導操作ができる盾の事だ。ちなみにBランク程度の砲撃
を撃つ事もできる」

龍姫 「……末恐ろしい武装だな」

作者 「まあ使い勝手は非常にいいと思う」

龍姫 「そうか。……ところで、相変わらず剣の類は持たせてもら
えないんだな」

作者 「仕様だ。諦めろ」

龍姫 「くっ……」

作者 「後は主人公・龍姫に関する補足説明だな」

容姿：聖祥大附属小学校への入学を期に、髪を後ろで束ねるようになった。（A・s 6年後以降のユーノと同じ髪型）

【スペック】（第24話時点）

筋力：A + 魔力：EX

気力：EX 耐久：AAA

敏捷：AA 幸運：B

【（隠れ）保有スキル】

フラグメイク
無償の愛（対女性専用）：A

ゼウスによって密かに付与されていたスキル。

龍姫の気遣いから出る行動や言動が、女性にのみ即自分に向けられた好意へと変換される能力。

今のところこれが恋愛感情にまで昇華しているのはなのは、フェイト、はやての3人だけだが、今後増える可能性がない……とは断言できない。

龍姫 「……アイツはいつか絶対にクロス……！」

作者 「そのゼウス曰く、『いつでもかかってこい』だとさ」

龍姫 「上等だ！首を洗って待つてろよ！」

作者 「……そういえば作中全く触れなかったんだが、髪結ってたんだな」

龍姫 「ああ。俺が髪切りバサミを手にすると母さんが泣き出すから仕方なく、だけどな……」

作者 「お前も苦労してるんだな」

龍姫 「母さん曰く、『そんな綺麗な髪を切るなんてバチ当たり』なんだと」

作者 「……個人の趣向は人それぞれだしな」

龍姫 「少しは付き合わされる方の身にもなって欲しいんだけどな」

作者 「まあ頑張れ。……という訳で次回予告にいくぞ！」

龍姫 「はいはい……っと、次回、第25話『終わりの始まり（仮）』へ」

作者 「ドライブ・イグニッション！」

第25話 『終わりの始まり』

修正プログラム完成の翌日・夜。

「……という訳で明日『闇の書』の修復をしようと思っただけど、
どうかな？」

『うん。明日は皆家におるから大丈夫や』

「よかった。あ、それから修復のついでに僕の知り合いの魔法関係
者を紹介したいんだけど、いいかな？」

『え？ 龍姫君のお仕事仲間の人？』

「うん、まあそういう事になるのかな？ はやて、そっちの知り合
いもいた方がいいと思ってさ」

『せやね。龍姫君の知り合いなら良い人達だと思うし……うん。お
願いや』

「うん。……それじゃ、明日の午後2時に海鳴臨海公園に来てくれ
る？」

『わかった。ふふつ、今から明日が楽しみや』

「そうだね。それじゃ、おやすみはやて」

『龍姫君も、おやすみな』

そう言っではやてとの電話を切った。次はなのはとテストロッサ家に連絡を入れないとな。

そして夜が明けた次の日。

時刻は午後1時30分。場所は海鳴臨海公園。

「ねえねえたつくん。私達に紹介したい魔導師の人達って？」

「龍姫、聞いても全然教えてくれないし……少しくらいいいでしょう？」

「たつきー、私も知りたーい！」

「そうね。私も気になるわ。まさか龍姫の身近にまだ魔導師がいたなんて」

現在、俺はアテナと先に呼び出しておいたなのは（withユーノ）とテストロッサ家（フェイト、プレシア、アリシア、アルフ）と一緒ににはやて達の到着を待っている。

ちなみに今日は俺が同伴という事で、フェイト達の監視は解けている。まさに絶好の機会だ。

さらに、今海鳴市全域には俺が張った様々な効果の結界が20枚くらい掛かっている。外からの介入はまずありえない。

「んー、そうだな……とりあえず1人は僕やなのはちゃん、フェイ

トと同じ年だよ」

「ふえ！？」

「龍姫、それ本当！？」

俺のその発言に、その場にいた全員が驚いた。

「こんな事で嘘を言ってもしょうがないと思うんだけど……」

「た、確かにそうね……」

「この小さな島国に魔導師が3人……凄い事だよ……」

「ああ……アタシも驚きだ」

そつして話しているうちに、時刻は約束の時間の10分前になった。
……そろそろ来るかな？

「龍姫く〜ん！お待たせや〜！」

と、そこに聞こえてくる待ち人の声。

「あ！来たみたいだね」

「えっ！？」

「あ、あれって……！？」

なのはとフェイトがこの場に現れた人物を見て驚いている。

「いらつしゃいはやて。シグナム達も」

「……って、あれ？どうしてなのはちゃんとフェイトちゃんにここに？……も、もしかして……」

「そうだよ。僕の知り合いの魔導師、なのはちゃんとフェイト、それからなのは使い魔のユーノとフェイトの家族のプレシアさんにアリシア、アルフだよ」

「ちよっ！？龍姫、僕は別になのはの使い魔じゃないよ！？」

「はじめまして。フェイトの母のプレシア・テストロッサよ」

「はじめまして、私アリシア。……あ、私は魔法は使えないんだ。えへへ……」

「アタシはアルフってんだ。フェイトの使い魔さ！」

「あ、ど、どうも……八神はやてです。よろしくお願いします……」

まさかの事態に動揺しながらも、はやてが何とか挨拶を返す。

「シグナム達も自己紹介してくれ（『闇の書』の名前はまだ出すなよ？）」

「（わかった）シグナムだ。よろしく頼む」

「シヤマルです。よろしくお願いします」

「ヴィータです。よろしく……」

「ザフィーラだ」

「え？」

「い、今……」

「わー！ワンちゃんが喋ったー！」

ザフィーラが喋った事に驚くのはとフェイト。アリシアは嬉しそうにはしゃぐ。

「ザフィーラは犬じゃなくて狼なんだよ」

「へえ〜。じゃあアタシと同じだね」

「ああ。アルフみたいに人型にもなれるんだよ。な、ザフィーラ？」

「うむ」

そう言って人型に変わるザフィーラ。

「ホントだ。よろしくな！」

「ああ」

そう言って握手を交わすアルフとザフィーラ。

ヴォルケンスの他のメンバーもプレシアさんやユーノと話していた。

……うん、よかったよかった。

「龍姫君！」

「たつくん！」

「龍姫！」

「うわぁっ!？」

1人で皆の様子を見回していたら、はやて、なのは、フェイトの3人がすぐ傍に来ていた。

「な、何かな……?」

3人の剣幕に思わず後ずさる俺。

「わたし、なのはちゃんとフェイトちゃんが魔導師だって聞いてびっくりしたんよ？」

「私もなの！」

「私だって！」

「あー、ごめん。サプライズの方が面白くなって思ったから……」

「「「そんなの心臓に悪いだけや（なの/だよ）」」「」」

思いっきり怒鳴られてしまった。

「すみませんでした……」

そんな3人に、俺は謝るしかない。

それからしばらく皆でわいわい騒いだ後で――

「さて、それじゃそろそろ今日集まってもらった本題に移るよ。はやて」

「うん。これやね」

俺の呼び掛けに、はやてが『闇の書』を取り出す。

「っ！そ、それは……！？」

流石は元・技術者。プレシアさんは見た瞬間その正体に気がついたようだ。

「ええ。プレシアさんの思った通りのものですよ」

「そう……」

俺の返答に短くそう答えたプレシアさん。

「たっくん、その本って？」

「何か特別なものの？」

なのはとフェイトは本の正体を聞いてくる。

「これはね——『闇の書』ロストロギアっていう古代遺産なんだよ」

「えっ!？」

「ロストロギア!？」

またしてもはやてとヴォルケンス以外の全員が驚いた。

「この『闇の書』は管理局で指定危険物とされているものなんだけど、これは本来の姿じゃないんだ。っていうのは……」

そうして俺はなのはやフェイト達に『闇の書』のあれこれを話して聞かせた。

「……つまり龍姫はこの『闇の書』を本来の姿、『夜天の書』へ戻そうっていうのね?」

話を聞いたメンバーを代表してプレシアさんがそう聞いてきた。

「そうです。流石はプレシアさん、理解が早くて助かります。……という事なんです、わかってもらえたかな?」

「うん。そういう事なら、私にできる事があれば協力するの!」

「そうだね。私達でできる事があるなら、はやての力になってあげたいな」

「なのはちゃん、フェイトちゃん、おおきにな……」

2人の嬉しい申し出に、ちよっぴり涙ぐむはやて。

「よし。それじゃまずは管制人格を起こさないといけないんだけど、それには400ページ埋めるだけの魔力が必要なんだ」

「えっ！？そうなん？」

「そうなんだ。……で、大半は僕の魔力でいいんだけど、できればなのはちゃんとフェイトにもちよつと魔力を分けてもらいたいなあ、なんて……」

「うん。いいよ」

「私も大丈夫だよ」

俺の言葉に、2人は即答してくれた。

「ありがとう。それじゃ、まずは2人から魔力をもらうね……」
『リ
ンカーコア表出』

「あう……」

「ひゃ……」

自分の胸からリンカーコアが浮いて出る時に声を漏らす2人。……
・くすぐつたいのか？

「それでここから魔力をちよつと削り取って……っと、これでよし」

そう言つて2人の身体にリンカーコアを戻した。

「じゃあこれを『闇の書』に蒐集させて……」

『Samm lung・(蒐集)』

俺が2人から抽出した魔力を『闇の書』にかざすと、その中へと吸い込まれていった。……2人で70ページか。

「あとは僕の魔力を……んっ……意外とくすぐったいんだな、コレ」

リンカーコアを表に出して、残り330ページ分の魔力を削る。．．

．．これでも全体の10分の1もいつてないな。

そこからさらにその魔力を加工して余計な情報（俺の知っている魔法）を消す。流石にこれらを覚えられたらヤバいしな。．．．．

「……よし。さあ、蒐集していいぞ」

『Samm lung』

そうして俺の魔力も『闇の書』の中に消えていく。

「これで準備完了つと。はやて、呼んでみて」

「う、うん……おいで……」

——ピカッ！

はやてが呼んだ瞬間強い閃光が走り、それが収まった後には――

「また、全てが終わってしまふ……一体いく度、こんな悲しみを繰り返せばいいんだ……」

長い銀髪と真紅の瞳が印象的な1人の女性がそこに立っていた。
・
・
・ やつと会えたな。

「出てきたな。『闇の書』……いや、『夜天の書』の管制人格」

「これはまた懐かしい名を聞いたな……お前は誰だ？」

「俺か？俺は氷護龍姫だ。お前を悲しみの連鎖から救う者だよ」

「そうか……だがそれは無理な話だ。私が『そう』だった頃の記録など、もうどこにも残ってはいない」

「残念だったな。実は『それ』があるんだよ。ここにこうして」

そこで俺は修正プログラムの一部を見せる。

「これは……バカなっ！何故お前がこれを知っている！」

「ん……ちょっとした裏技、かな。それよりはやて、この子に名前を」

俺は管制人格との話を切り、はやてに振る。

「あ、うん。えっと……はじめまして……て言うんは変かな？ずつと一緒にあったんやし」

「そう、ですね……我が主……」

「わたしがあなたに名前をあげる……もう『闇の書』とか『呪いの魔導書』なんて言わせへん。わたしが呼ばせへん。……わたしは管理者や。わたしにはそれができる」

「っ！……ですが私は……」

はやての言葉を聞いて、目に涙を浮かべる管制人格。

「大丈夫や。安心してな？……夜天の主の名において、汝に新たな名を贈る。……強く支える者、幸運の追い風……祝福のエール……リイン、フォース……」

「リイン、フォース……」

「そうや。おいで、リインフォース」

「はい、我が主」

そう言って抱き合う2人。まずはめでたしめでたし、だな。

……さあ、ここからが本当の俺の定番だ！

第25話 『終わりの始まり』（後書き）

あとがき

作者 「今回はいきなり次回予告！」

龍姫 「次回、第26話『永遠とわの間を撃ち払う光（仮）』へ」

作者 「ドライブ・イグニッション！」

第26話 『永遠(とわ)の間を撃ち払う光』

はやてとリインフォース、2人の抱擁を見守る事およそ10分。

「……2人とも、そろそろいいか？」

「へ？あっ／＼／＼うん。ええよ……」

「主？どうかされ……っ／＼／＼し、失礼した……」

俺が声を掛けると、2人は顔を真っ赤にして凄い勢いで離れた。

「まずは確認させてくれ。リインフォース、はやては管理者権限を
使えるようになったのか？」

「ああ。問題ない」

「よし。それじゃはやて、管理者権限でアクセスしてみってくれるか
？」

「了解や。……管理者権限、発動」

「はい、我が主」

はやての指示にリインフォースが答え、書へのアクセスを始める。

「こっちもモニターを開いて——っ」と

俺もモニターを開き、すぐに修正プログラムが起動できるよう準備する。

「……アクセス、完了しました」

「ありがとう、リインフォース。……龍姫君、こっちは準備できたで」

「こっちもオッケーだ。……それじゃ、始めるぞ」

「うん」

俺のモニターと『闇の書』をリンクさせ、修正プログラムを流し込んでいく。

——2 2、3 6、4 8、5 9

順調にデータの上書きが進んでいく。

——6 4、6 9、7 3、7 7

よしっ！このまま最後までいけっ！俺が心の中でそう叫んだその時、

——ビーー！ビーー！

突然警報が鳴り出し、モニターが赤に染まった。

「な、何だ!？」

俺が突然の事態に慌てていると、

「我が主、大変です!修正プログラムに防御プログラムが反発しています!」

「何やって!？」

どうやら防御プログラムが修正を受け入れまいと抵抗しているらしい。

「リインフォース、その防御プログラムを無力化する事はできないのか?」

「……1つだけ、方法がない事もない。防御プログラムを書から切り離し、破壊すればいいのだが……」

くそっ!つまり原作と同じって事か!

「仕方がないか……はやて!防御プログラムを切り離して、表に出してくれ!」

「龍姫君……うんっ!リインフォース、やるよ!」

「はい、我が主」

それから2人が作業を終えると、

「切り離しに成功した。ここの沖に防御プログラムが姿を現すだろう」

リインフォースが海を指しながらそんな事を言った。

「よし。魔導師勢は全員沖へ出るぞ!」

『『『了解!』』』

俺の言葉に、その場にいたほぼ全員（プレシア、アリシアを除く）が返事をした。

「よし、それじゃいくぞ!」

『『『セーット、アープ!』』』

そして全員がバリアジャケットを装備して海鳴の沖に向かって飛んだ。

「……. そうですね今回はまったく蒐集をしてないんだけど、これから出るのは原作の『アレ』なのか？」

俺は現場へ急行しながら、ふとそんな事を思った…….

俺達が海の上を飛んでいくと、目の前に突如黒い澱みが出現した。

「……あれかつ！」

「はやて！アレが暴走するまでの時間はわかるか？」

「うん。あと10分くらいやな」

「ありがとう」

「……原作通りだな。それなら……」

「よし、全員集まってくれ！これから作戦を説明する！」

そうして集まってきた皆に作戦を説明する。といっても原作とほぼ同じものだけだな。違うのは最後だけだ。

ちなみになのはとフェイトには既にフルドライブ使用の許可を出しており、それぞれのデバイスがエクセリオンモードとザンバーフォームになっている。

「防御プログラムのバリアは魔力と物理の複合4層式。まずはそれを破る」

「バリアを抜けたら本体に向けて、私達の一斉砲撃でコアを露出」

「そうしたら、最後はたつくんがトドメの一撃！」

「そうして防御プログラムを消した後で、新しいプログラムを上書きすれば終わりだ」

「ここにいるメンバーなら、必ずやれる！」

——ザバアッ！

と、そこで澱みの周囲の海中から無数の触手が姿を現した。これは
．．．．．やっぱり相手はヤツか。

「防御プログラムの暴走臨界点まで、あと2分や！」

よし、そろそろだな。．．．．．っと、忘れてた。

「シャル。なのはとフェイトの治療を頼む」

「はい」

俺の要請に応えて、シャルが2人の前に出る。

「クラールヴィント、本領発揮よ」

『Ja．（はい）』

「静かなる風よ、癒しの恵みを運んで」

すると緑色の風が2人を包み、先程削られた2人の魔力を回復する。

「『湖の騎士』シャルと、『風のリング』クラールヴィント。癒しと補助が本領です」

「凄いです！」

「ありがとうございます、シャルさん！」

その効果に、フェイトとなのはが賞賛を贈った。

「アタシ達はサポート班だ。あのウザいバリケードを上手く止めるよ」

「うん」

「ああ」

アルフの言葉にユーノとザフィーラが頷く。この3人に任せておけば、背中では安心だな。

そして――

――バシュウウン！バシュウウン！

海中から黒い柱が何本も噴き上がる。

「始まったな……」

「うん。夜天の魔導書を、呪われた闇の書と呼ばせたプログラム……闇の書の、闇……」

「ああ……俺達の手で終わらせるんだ。新しい未来を生きる為に！」

「うん！」

俺とはやてが互いに頷きあつたその時、

——ドパアァン！

黒い澱みがその色をいつそう深くした直後に弾けるように膜が解けて、異形の怪物がその姿を見せる。

「アアアアッ！ラアアアアッ！」

怪物の上部についていた上半身だけの女性が声を上げる。

「チェーンバインド！」

「ストラグルバインド！」

「縛れ！鋼の軛はがねくびき！でえええやああつ！」

まずは周囲の触手をアルフとユーノがバインドで縛って引きちぎり、ザフィーラが薙ぎ払う。

これで触手のバリエードは消えた！ここからはスーパーフルボツコタイムずつと俺達のターンだ！

「よし！第一陣、ヴィータとなのは！行つてこい！」

「おつよー！」

「うん！」

俺の指示に合わせて2人が飛び出していく。

「『鉄槌の騎士』 ヴィータと、『鉄の伯爵^{くわがね}』 グラーファイゼン！」

『G i g a n t f o r m .（ギガントフォーム）』

カートリッジを1発ロードして、グラーファイゼンがその姿を巨大なヘッドを持ったハンマーへと変える。

「轟天、爆碎！」

それをヴィータが振りかぶると、そのサイズがさらに増大する。

．．．．生で見るとメチャクチャデカいな。

「ギガント、シュラーク！」

掛け声と共に振り下ろされたハンマーは、バリアにぶつかった瞬間凄まじい衝撃波を生み、そのまま粉碎した。

「高町なのはとレイジングハート・エクセリオン、行きますっ！」

『L o a d c a r t r i d g e .』

カートリッジ4発がロードされ、レイジングハートから大きな桜色の羽が広がる。

「エクセリオン、バスタ——！」

声に併せて杖の先に魔力が集中する。

それを察知したのか、怪物から触手が伸びてくる。しかし――

『Barrel shot.』

レイジングハートから放たれた不可視の衝撃波が触手を寄せ付けない。そして4本の桜色の流星がバリアに直撃し、

「ブレイク……シューート！」

掛け声で1本に纏まると、易々とバリアを撃ち碎いた。

「第2陣！シグナムとフェイト！やれっ！」

「ああ！」

「うん！」

既に俺より上空の別々の場所に陣取っていた2人が答える。

「『剣の騎士』、シグナムが魂。『炎の魔剣』レヴァンティン。刃と連結刃に続く、もう1つの姿」

ここでカートリッジを1発ロード。合わせた剣と鞘が形を変え、弓になる。

『Bogen form.（ボーゲンフォルム）』

弓に魔力の弦が張られ、さらにカートリッジ2発をロード。弓に矢がつかえられる。

あの矢、凄まじい魔力の塊だな……

「翔けよ、隼！」

『Sturm fal ken・（シュツルムファルケン）』

ヒュン、と空気を切り裂く音を響かせながら矢がバリアにぶつかって、大爆発を起こす。その衝撃で、バリアは粉々に碎けた。

「フェイト・テストロッサ、バルディツシュ・ザンバー。行きますっ！」

カートリッジを3発ロードしたバルディツシュ。

ザンバーから不可視の斬撃が放たれ、触手のバリケードを斬り散らす。

「撃ち抜け、雷神！」

『Jet Zamber』

振りぬかれた光刃がバリアへと伸び、そのままバリアごと防御プログラムを斬り伏せた。

と、ここへ来て今まで攻撃らしい攻撃をしてこなかった防御プログラムが、初めて牙を剥いた。砲撃の目標は——やっぱりはやてか！

「ザフィーラ！」

「おう！『盾の守護獣』ザフィーラ！砲撃など、撃たせん！」

その瞬間、砲撃を放とうとしていた触手群を鋼の軀で突き刺して無力化した。

「はやて！」

俺の声に小さく頷いて返し、はやては『夜天の書』を開いた。

「彼方より来たれ、ヤドリギの枝。銀月の槍となりて、撃ち貫け！」
詠唱を終えると、はやての周囲に無数の光点が現れる。

「石化の槍、ミストルティン！」

はやてが防御プログラムに向かって杖を振り下ろすと光点から槍が撃ち出され、それが刺さったところから防御プログラムは石に変わった。

しかしそれも一瞬の事。すぐに回復して、一層おぞましい姿になって活動を再開する。

この時戦場にいた者は、程度の差はあれど全員こう思った事だろう。
「……気持ち悪い、とな。」

「よし！俺達もいくぞ、ハイペリオン！」

『All right, master. Cartridge load.』

左右2発ずつ、合計4発のカートリッジをロードする。

「大氷河の内にて、彼の者を永久の眠りへ誘え！」

『Freezing Coffin』

周囲の海面ごと、防御プログラムを巨大な氷の棺に封じ込める。さらに――

「ギガインパクト！」

氷の棺の上に手を置き、左右1発ずつ2発のカートリッジをロードして、棺ごと防御プログラムを粉碎した。
しかし、それでも凄まじいスピードで再生してくる。

「なのは、フェイト、はやて！――斉砲撃だ！」

「うん！」「」

3人が防御プログラムを取り囲むように、それぞれの位置に着いて

――

「全力全開！スターライトオ――」

「雷光一閃！プラズマザンバ――」

「響け終焉の笛！ラグナロク――」

「（ハイペリオン、魔力チャージスタート）」

『All right, master』

3人娘が同時砲撃の構えを取ると同時に、俺はその後の為の準備

に入る。

「――ブレイカ――!!!!」

3方向から伸びた3つの砲撃が防御プログラムに直撃し、大爆発を起こした。

最後は俺が決める！

「待たせたな！出番だ、イリス！」

「はいです！」

「ユニゾン・イン！」

そこで俺はここまで隠してきたイリスとユニゾンし、最後の仕上げに入る。

『防御プログラムのコアを補足しました！』

『Charge complete』

イリスとハイペリオンから同時に届いた合図。

「効果範囲を防御プログラムのコア周辺に確定！」

『確定……しました！』

「よし！……数多の犠牲者を生み、悲しみを繰り返した暗き闇よ。今ここでその因果を断ち切る！」

『Drive burst』

俺は残り6発のカートリッジも全てロードし、その魔力をハイペリオンに集束させていた魔力に上乘せして解放する。

「灰燼に帰せ！——アルテマ・カタストロフ！」

極大威力の範囲固定型殲滅魔法『アルテマ・カタストロフ』。今の俺が持ち得る最強の魔法だ。

——ズドオオン！ドゴオオン！

指定効果範囲内でのみ巻き起こる大爆発。故に範囲外にいる人間には何の影響もない。

やがて範囲空間が収縮し、完全に消える。

『効果範囲内の生命反応、完全にロストしたです！再生反応……ありません！』

「了解。ご苦労だったな、イリス」

『はいです！』

こうして暴走した防御プログラムは完全に消滅し、俺達の戦いは終わった。

第26話 『永遠（とわ）の闇を撃ち払う光』（後書き）

あとがき

龍姫 「対暴走プログラム戦終了！」

作者 「何度見ても容赦ないフルボッコだよな」

龍姫 「確かに。この作品で一番敵に優しくない戦闘シーンかもしれない」
れん

作者 「これだけの攻撃を繰り返されて生きてられるヤツっているのか？」

龍姫 「さあ？いないんじゃない？」

作者 「お前はどんなんだよ」

龍姫 「あゝ……方法がないわけじゃない。魔力消費がとんでもないけど」

作者 「そして次回は『闇の書事件』解決編！」

龍姫 「ついに終わるんだな。この事件が」

作者 「それでは次回予告！

次回、第27話『悲しみを越えた先にある未来（仮）』

に

龍姫

「ドライブ・イグニッション！」

第27話 『闇の終焉と、打ち明けられた秘密』

防御プログラムは破壊した。．．．よし！

「はやて、もう少しいける？」

「うん。大丈夫や」

「ならここで作業を終わらせるよ」

「うん！……リインフォース！」

「はい、我が主」

はやてのユニゾンが解除されて、リインフォースが姿を現す。

「そういえば龍姫君、その目……」

「ん？ああこれ？……実は僕もユニゾンデバイス持ちなんだ。後で紹介するよ」

「……なんや、龍姫君には驚かされてばかりやな」

「そうかな？」

「せや。……まあ話は後やね。今はリインフォースを助けてあげな」

「そうだね。……修正プログラム、スタート！」

もう一度最初から修正プログラムのインストールを始める。

——25、37、49、54……

順調にデータの上書きが進んでいく。

——63、68、75、80……

……いいぞ、エラーも出ない！

——85、89、94、99、100

「修正プログラムのインストール、全て完了しました」

「「いやったあー！」」

リインフォースのその言葉を聞いて、俺とはやては手を取り合って喜ぶ。

「……つと、そうだった。リインフォース、どこかシステムに異常があったりするか？」

「……ないな。新たに組み込まれた防御プログラムが暴走する様子

もない」

俺の問いにそう返してくれるリインフォース。

「ほんなら……」

「うん。これでリインフォースはもう大丈夫だよ」

「よかった！リインフォース！」

「わ、我が主っ！？」

いきなりはやてに抱きつかれたリインフォースが慌てる。

「よかった……ほんまによかった……リインフォース……！」

はやてはリインフォースに抱きついたまま、大粒の涙を流す。

「わ、我が主……な、なあ、こんな時私はどうすればいいんだ……」

困ったリインフォースが俺に助けを求めてきた。

「どうするも何も、そのままはやてを抱きしめてあげればいいんだよ」

「わ、わかった……」

俺にそう言われて、はやてをゆっくり抱きしめ返すリインフォース。

「あ……ほんまよかったわ……んん……なんや安心したら眠く……」

…」

「わ、我が主!？」

「落ち着けリインフォース。目覚めてから初めての实战で、魔力を使い過ぎただけだ」

「そ、そうか……」

取り乱したリインフォースが俺の言葉を聞いて落ち着く。

「とりあえず病院へ運ぼう。シャル、石田先生に連絡してくれるか？」

「はい」

シャルに石田先生への連絡を任せ、俺は皆を見渡して言った。

「よし！皆、お疲れさま！これにて一件落着だ！」

『『『やっ たあー!』『』』

その場にいた全員が歓喜の声を上げた。

あれから3日が過ぎた現在。

「たつくん、今日こそお話を聞かせてもらおうの！」

「そうだね。はやてももう回復したし、いいよね？」

「せやね。色々聞きたい事もあるしな」

『『『そうだそうだ！』』』

俺はなのは、フェイト、はやてを筆頭に今回の騒動に関わった全員から詰め寄られていた。

ちなみに今俺達がいるのは本局にある俺の執務室だ。本当は3人だけを連れて来るつもりだったんだけど、何故か呼んでない客が多数ついて来た。

「……え？中には一般人や局に顔を出しちゃうマズイ人間がいるだろうって？……細かい事は気にしない方向で。」

「話を聞かせてと言われても、具体的に何を話せばいいんだ？」

「ならば、まずは私から聞こう。龍姫、お前は何故失われたはずの『オリジナル夜天の書』の構成データを知っていたんだ？」

そう言っただけ俺の前に出てきたのはリインフォースだった。プログラムの暴走の危険がなくなった今、彼女もはやてや守護騎士達と共に穏やかな日々を送っている。

「……いきなり核心だな……」

しかしどうする？これを話すとなると、俺が転生者である事も明かす必要があるんだよね……

「むう……」

いつか話さなければならぬ日が来るとは思っていた。それが今日という事なのだろうか？

「うん……」

……潮時、か。

「少し長い話になるが、聞いてくれるか？」

その問いに、全員が頷いた。

「……わかった。ただ先に断っておくと、今から俺がする話は皆にとってかなり突拍子のない内容だと思う。だから、信じる信じないは個人の裁量に任せる」

そう前置きをして、俺は話を始めた。

「まずはじめに、俺は元々この世界にいた人間じゃない。別の世界から転生してきたんだよ」

『『『っ！？』『』』

いきなりのトンデモ話に、全員が驚愕の表情を浮かべる。

「俺は前いた世界で、ある日突然足元に開いた穴に落ちた。そして落ちた先で神に会い、取引を持ちかけられた。その結果として、俺はこの世界に転生する事になったんだ」

「……自分で言ってるけど、頭がおかしいと言われても文句は言えない話だよな。」

「ちなみに前の世界では、この世界の事が創作の物語として伝えられていた。4月の事件の事も、今回の騒動の事も、そしてこれから先の未来の事も」

「そんな……」

「わたし達の事が……？」

「嘘や……」

俺の言葉に一部が動揺する。とそこへ――

「つまり、龍姫は今の『この未来』の事を知っていたのかしら？」

プレシアさんがそんな質問を投げかけてきた。

「答えはN oだ。俺の知っていた未来は、もっと別のものだった」

「別……とは一体どういう事だ？」

そう聞いてきたのはリインフォース。

「俺が知る未来では、プレシアさんは亡くなったアリシアと共に次元の狭間に消えていたし、リインフォースはプログラムの暴走を再発させない為に消えた」

「「っ!？」」

「母さん……」

「リインフォース……」

呼ばれた本人達は驚きに目を見開き、フェイトとはやてはそれぞれ名前の拳がった自分の家族を見る。

「じゃあ、あなたはその未来を回避する為にこの世界に来たのね？」

「ああ。それが神が俺に課した取引の条件だったからな」

本当はそんな大層なものじゃないけどな。まさかこの場で最高神の暇潰しの為、とは言えない。

「ではお前が『オリジナル夜天の書』の事を知っていたのは……」

「俺が取引の条件として神に要求したからだよ」

「そうか……」

「まあそれ以外にも色々と要求したけどな。この桁外れの魔力とか、龍召喚の力とか」

「召喚魔法だど!? 龍姫、お前はそんな事も出来るのか!？」

そこで話に喰いついてきたのはシグナムだ。……何か目がキラキラしてるんだけど、これってまさか……

「ぜひ一度私と模擬せ——」

「やめとけ。俺が龍召喚なんてしたら怪我どころじゃ済まないぞ？」

「そうですよシグナム。私だってまだ龍召喚なしでしか模擬戦して——」

「そんな事よりだな！」

俺は大声を出してフェイトの爆弾発言をかき消す。 . . . 聞か
れてないよな？

——ガシっ！ガシっ！

「たつくくん？」

「龍姫くくん？」

. . . . 遅かったか

全身に黒いオーラを纏い、イイ笑顔で俺の肩を掴むのはとはやて。

「フェイトちゃんと模擬戦してたなんて知らなかったな 一体
いつから？」

「龍姫君、わたし友達に隠し事するんはアカンと思うんよ 正
直に話してな？」

「あ、あはは……」

や、ヤバい！予想はしていたけど、それを遥かに上回る危険を感じる……」

「早く答えるの（てや）！」

「は、はいっ！フェイトと模擬戦を始めたのは、『PT事件』終了の2週間後くらいですっ！」

2人の剣幕に押され、思わず丁寧語で返事をしてしまう俺。

「む、そんな前からやってたなんて……」

「あ、いや、でもはやてと友達になってからはあまりやってなかったし……」

「……そういえばそうだったね……龍姫ってばある日突然付き合が悪くなつて……」

しまったあつ！今の不用意な発言のせいでフェイトまで黒く！？

何か……何かこの状況を打破、あるいは回避する為に使えそうなのは……ハッ！そうだ！

「待て！落ち着け！お前らさっきまでの俺の荒唐無稽な話を聞いて何とも思わなかったのか！？」

俺はこんな事になる前にしていた話の事を持ち出して事態の回避を試みる。しかし――

「え？さっきのたつくんの話？私は信じるよ。だってたつくんは1人ぼっちだった私を助けてくれて、今こうしてフェイトちゃんはやてちゃん、ここにいる皆と出会わせてくれたんだから！」

「私だって龍姫の話信じるよ。龍姫は母さんとアリシアの事を知ってて助けてくれた。私の夢を応援するって言ってくれた。龍姫のおかげで、私は今とっても幸せだから！」

「わたしも同じや。龍姫君はわたしの大切な家族を助けてくれた。その龍姫君を疑うなんて、そんな事するはずない！」

『『『そうだそうだ！』』』

3人は何を当たり前な事と言わんばかりにそう返し、周りの皆も3人に同意したように頷く。

「龍姫はここにいる全員の為に、自分の知ってた悲しい未来を変えようとしてくれて、実際に変えてくれた」

「だから龍姫君はわたしらにとっての恩人や。その恩人が打ち明けてくれた大事な話を信じない人間は、ここには1人もおらんよ」

「皆……」

俺はそこで言葉に詰まってしまった。

もしかしたら拒まれるかもしれない。化け物と蔑み罵られるかもしれない。

少なからずそんな不安を抱いていた俺に、皆の言葉は心の芯まで響いた。

「ありがとう……こんな俺を受け入れてくれて、本当にありがとう……」

そう言って頭を下げる。両の目から涙が溢れては床を濡らしていく。

それから俺が落ち着くまで10分弱の時間を要した。

「うう……／＼／＼」

今更ながら、俺は皆の前で泣いた事が恥ずかしくなった。

「龍姫君、そんな恥ずかしがってないで話を続けてや。まだ何やあるんやろ？」

「あ、ああ。……前回と今回の2つの事件では、俺が考えうる限り最高の結果を出す事ができた。今回に関しては若干のイレギュラーがあったがな」

「それって、あの防御プログラムの暴走の事？」

「そうだ。俺の予測では、防御プログラムに反抗させる事なく修正を終えられたはずだったからな」

「でも、それも皆で力を合わせて何とかしちやったもんね！」

「その点に関しては、本当に皆の協力に感謝したい。改めてお礼を言わせてくれ。ありがとう」

「どういたしまして、や」

「そしてこれから先に関してだが、今回イレギュラーが発生したようにまた何かが起こるかもしれない。だから俺はその為の準備を始めようと思う。ただし、お前達をこれに関わらせる事はできない」

「ど、どうして？」

「当たり前だ。もし未来の事を話してみろ。それこそ何が起こるかわからなくなる。それに自分の未来を知るなんて面白くないだろう？」

「せやね。自分の人生は自分のもんや。わたしの歩く道はわたしが決めるんや」

「そういう事だ。だからまたしばらく皆とは別行動を取る事が多くなると思う」

「でも……龍姫がいないと寂しいよ……龍姫は私達と離れて寂しくないの？」

「そんなわけあるか。俺だって寂しくないわけじゃない。でもな、俺達はいつでも繋がってるだろう？友達や仲間っていう強い絆で」

「う、うん……／／／／」

——シュンツ！

「よくそんなクサイ台詞を恥ずかしげもなく口にできるわね龍姫」

と、そこで突然部屋に入ってきた人物が1人。

「何だアテナか……戻ってきたって事は、もう済んだのか？」

「ええ。ついさっきマリーから引き取ってきたんだけど……寝ちやったみたいね」

その人物とは、アテナだった。局の制服の胸ポケットをチラッと見たって事は、そこにアイツがいるようだ。

「そつか。……そういえば、アテナの事も説明しないといけないな。いいか？」

「龍姫が話したのならいいわよ」

「ありがとう。……というわけで改めて紹介しよう。ギリシャ神話における戦いの女神、アテナだ」

「改めまして、今は元・女神のアテナよ」

『『え、ええええええっ！？』』

衝撃の事実発覚に、全員が驚きの声を上げた。

「え？ええ！？どうしてそんな神様が！？」

「龍姫をサポートする為にお父様に遣わされたのよ」

「ん？アテナさんのお父さんって事は、もしかして龍姫君が取引したのって……」

流石はやて。その辺りの本も読んだ事があつたみたいだな。

「当たり前だよ。俺が取引したのはギリシヤ神話の最高神、ゼウスさ」

『『『えええええつ！？』『』』』

本日2度目の大合唱。っていうかちよつとうるさい。

「龍姫！お前神様と知り合いなんてスゲえな！」

ヴィータが興奮した様子で俺に話しかけてくる。

「いや、でもそんないいもんじゃないぞ？アイツ性悪だし、自己中だし」

『『『（神様を“アイツ”呼ばわりする龍姫（君）って……）』『』』』

何だ？何で皆俺に呆れたような視線を向けてるんだ？

俺がそんな皆の様子に首を捻っている——

「タツキパーっ！ただいまですーっ！」

目を覚ましたらしいイリスがアテナの胸ポケットから抜け出して俺

に飛びついてきた。

『『タツキ“パパ”！？』』』

二度ある事は三度ある。本日3回目の全員がハモった声。

あ、ヤベ．．．．．そういえば皆がいるんだった．．．．ハッ！
殺気！？

「たつくん、どういう事なのかな？カナ？」

「龍姫、流石に今回は許してあげられそうにないよ……」

「龍姫君、覚悟はええか？」

後ろを向くと、そこにはさっきよりも濃密な暗黒オーラに染まった
般若が3人。

「くっ……戦略的撤た——」

「レイジングハート！ユーノ君！」

「バルディッシュ！母さん！アルフ！」

「リインフォース！シャル！ザフィーラ！」

「なっ！？」

俺は一時その場から転移して逃亡しようと思案したが、まさかの5
重バインド+3重ケージで封殺された。

「ちよっ！？何やつちゃってるの君達！？」

なのは、フェイト、はやてと一緒にたつてこの状況を作ったヤツらに思わず叫ぶと――

『『ごめんなさい！でも、あの3人には逆らえません！』』

全員が涙目になりながらそんな言葉を返してきた。

・・・そ、そうだ！

「アテナ！俺を助けてくれ！頼む！」

「イ・ヤ」

何故かとても楽しそうな笑顔でそんな事を言ってくれたアテナ。

「ど、どうして！？」

「だって……何だかその方が面白そうだから」

「畜生！お前もやつぱりゼウスの娘だなっ！」

「頑張つてね」

無責任な応援を送るアテナ。

「な、なあ3人も？せめて穏便に話し合いで解決しようじゃないか。昔の首相も言っただろう？『話せばわかる』って」

俺は最後の望みを懸けて3人にそう提案してみる。しかし――

「『『問答無用なの（だよ／や）！』』」

「ギヤアアアアっ！」

結局最終的に誤解は解けたものの、3人の気が済むまで O H A
N A S H I させられた俺は心身共にスタボロになっていた。 F i
n .

第27話 『闇の終焉と、打ち明けられた秘密』（後書き）

あとがき

作者 「これにてA・S編、終了〜！」

龍姫 「だ、誰か……た、助け……」

作者 「おおっ！何か見るも無残な感じにやられてるな」

龍姫 「さ、流石にあれば俺でも無理……」

作者 「不意打ちで8重の捕縛魔法はな……」

龍姫 「平穩が欲しい……少しでいいから俺が安らげる時間が欲しい……」

作者 「しかーし！残念ながら、次回からは早速10年後へ向けた準備編がスタートだ！」

龍姫 「っ！って事は、だ。なのはやフェイト、はやてとは別行動だよな？」

作者 「まあ基本的にはそうなるな」

龍姫 「いよっしゃあ！よくやった作者！今はそれだけでも充分だ！」

作者 「……時々外伝的なものを入れて、3人とは定期的に絡ませ

るけどな（ボソッ）」

龍姫 「ん？何か言ったか？」

作者 「別に何も」

龍姫 「そっか。気のせいだったか」

作者 「それでは区切りの回という事で、恒例のヤツをやるぞ！」

龍姫 「恒例ってまだ1回しかやってないだろ」

作者 「まあまあ、そんな固い事言わずに」

龍姫 「わかったよ。……という訳で、ここまでこの作品を読んでくれた読者の皆に感謝を」

作者 「そして、これからも引き続き拙作をよろしくお願いします
！」

龍姫 「それじゃ次回予告だ！

次回、第28話『資格ゲッター龍姫、参上！（仮）』

に」

作者 「ドライブ・イグニッション！」

第28話 『とある管理局員の業務風景』（前書き）

作者 「読者の皆さん、お久しぶりです。天叢雲です」

龍姫 「どうも、お久しぶりです。氷護龍姫です」

作者 「この度は私の一身上の都合により、長らく更新を途絶えさせてしまい、読者の皆さんには大変なご心配をおかけしたと思います」

龍姫 「この場でお詫び申し上げます。本当にすみませんでした」

作者 「しかし、こうして何とか復活することができましたので、改めてお付き合いいただければ幸いです」

龍姫 「相変わらず更新に関しては不定期になりますが、そこは何卒ご容赦ください」

作者 「というわけで、本編スタートです」

第28話 『とある管理局員の業務風景』

あれから3ヶ月が過ぎて、今は11月も半ば。

この3ヶ月で起きた出来事といえば、氷護・高町両家への暴露会（8月末）、足のリハビリを終えたはやてが聖祥に復学したり（9月末）、フェイト達の保護監察期間が終わって海鳴に越してきたり（10月半ば）、そのフェイトが聖祥に転入してきたり（引越しの翌週）、といった感じだ。

そして俺はというと――

『……というわけだ』

「ハア……面倒くさ」

『……仮にも管理局の人間だろう、君は』

「わかってる。その任務、引き受けた」

『頼んだぞ』

クロノとの通信を終えた俺はもう一度溜息を吐くと、隣に控えていたアテナに声を掛けた。

「聞いている通りだ。……それにしてもこれで今月何回目だ？」

「4回目ね」

俺の問い掛けに即答するアテナ。

「まだ半月しか経ってないってのに……俺を過労死させる気なのか、管理局は？」

「仕方ないんじゃない？何せ龍姫は管理局最高位のSSSランク魔導師なんだし」

「俺は一応9歳のガキなんだが」

「それだけ管理局が人材不足ってことよね」

「ったく、おかげで最近はロクに学校の方に顔を出せてないっての」

「……いや。それに関して言えば、正直ありがたいと言えなくもない。

2学期に入って以降、学校は俺にとって心休まる場所ではなくなりつつあるからな。

主な原因は白い悪魔と金色の夜叉と腹黒狸にあるわけだが……

「……龍姫、どうしたの？何だか顔が青くなってきてるけど」

「……あれ？そういえば、前回あいつらに連絡入れたのいつだった？確か先月の……」

「……あ、いや、なんでもない」

世の中考えない方が幸せなこともあるよな、うん。

「そう？ならいいんだけど……」

アテナが心配そうに見てくるので、大丈夫だと伝えて、頭を切り替える。

「今回の任務は無人世界で見つかった不審な研究所の調査、か。どうせロクでもないことをしてるんだろっな」

「そうでしょうね」

無人世界での違法研究といえば、大体相場は決まっている。

「よし、さっさと行ってサクッと終わらせるぞ。イリス！」

「はーい！行き先の座標の算出は終わってるですよ、タツキパパ」

「いい子だ。それじゃ……転送！」

そうして俺達は現地へ向かった。

「あれが調査対象の研究所か」

「みたいね」

『なんだか研究所それ自体から嫌な空気を感じるです』

現地に到着した俺達は早速件の研究所を探し出し、今はそれを上空から見下ろしながら話をしている。

ちなみにイリスとは到着してすぐにユニゾンし、バリアジャケットも展開済みだ。

「まずは内部に突入して、これを制圧。それから調査を行い、最後に研究所を破壊する。これでいいな？」

「そうね。いいんじゃないかしら」

『イリスも頑張ります！』

「よし。それじゃ、ミッシェンスタート作戦開始！」

それを合図に、俺とアテナは研究所に向かって突っ込む。

「うっ！？」

「えっ！？」

突入したと同時に、俺達はそれぞれに驚きの声を上げることになった。

研究所の中に入った瞬間、急に身体が重くなったような感覚に襲われたからだ。

「……これってもしかしくなくてもAMFだよな？」

「……そうじゃない？」

『ちよっと息苦しい感じがするです……』

アンチマギックフィールド
AMFとは、魔力結合・魔力効果発生を完全に無効化するAAAラ

ンクの魔法防御だ。

フィールド内では攻撃魔法はもちろん、飛行や防御、移動や機動に関する魔法でさえも妨害される。

高ランクの魔導師であればフィールド内でも魔法を行使できるが、それも簡単な技術ではない。

「まさかこの研究所って……」

「可能性はなきにしもあらず、よね」

俺はこのようにAMFを使う人間に心当たりがある。だがしかし、本当にここは『ヤツ』の研究所^{ラボ}なのか？
もし仮にそうだとしたら、ここで接触できたならば何らかの手を打つべきだろうか？

「龍姫？」

思考の海に沈んでいた俺をアテナが呼び戻した。

「……悪い。まあ、まだ『そう』と決まったわけじゃないしな。とりあえず中枢を目指そう」

「了解」

そうして俺達は研究所の奥深くまで進んでいった。

「『コントロールルーム』、ここがそうだな」

「ええ。でも、ここまで侵入を許していてもセキュリティが働かないなんて妙ね」

「確かにな。もしかして俺達に来る前に逃げ出したか？」

「その可能性は高そうね」

「何にしろ、中に入ればわかることだよな」

「ええ」

俺達はそんな会話を交わしながら、その部屋のドアを開けた。

「時空管理局だ！大人しく……って、やっぱりもぬけの殻か」

「残念。逃げられちゃってたわね」

案の定、開いたドアの先には人っ子1人いなかった。

「いないものは仕方ないな。とりあえず何かしら研究データみたいなのが残ってないかチェックしよう。イリスも手伝ってくれるな？」

「わかったわ」

『はいです、タツキパパ』

それからしばらく、俺達は室内のコンソールを弄ってデータのサルベージ等を試みた。

「……とりあえず、『ヤツ』個人の研究所ってわけじゃなさそうだな」

一通りデータを漁った結果、俺達はその結論に至った。

「そうね。『彼』ならこんなに簡単に復元できるようなデータの残し方はしないでしょうし」

「ただ、そうなると研究所内に張ってあったAMFの出所が気になるところだが……」

「それに関してだけは何の手がかりもなかったわね」

「ああ。直接は関わっていなくても、間接的に『ヤツ』が絡んでいた可能性は捨てきれないな」

余計な心配事は作らないで欲しいもんだ。

「それにしても、この研究所って随分と地下深くまで潜ってるみたいだけど」

「そうだな。もしかして何か隠しているのか？」

「その可能性も充分考えられるわね」

「……よし。ならアテナはここに残って、もし万が一何かあったら知らせてくれ。イリスは俺とまたユニゾンだ」

「了解。まあ何もないとは思っけどね」

「わーい！タツキパパと一緒にです！」

そうして俺はイリスと再びユニゾンし、コントロールルームにアテ

ナを残して研究所の地下階層へと向かうことにした。

「イリス、この研究所つてももちろんある程度の衝撃には耐えられるように作られてるよな？」

コントロールルームを出てしばらく廊下を歩いたところで、『ある事』を思いついた俺はそうイリスに尋ねた。

『はいです。余程でない限りは大丈夫だと思うです』

「オーケー。それじゃ床抜きして一気に最下層まで降りよう。威力計算は任せる」

手っ取り早く下まで行くなら、やっぱりコレだよな。

『わかりましたです！……深度計測、完了。……施設耐久率測定、完了。……威力計算、完了。タツキパパ、いけるです！』

「『瀑龍砲』！」

——ズドオオン！

俺が拳を床に打ちつけると、そこから出た水の龍が床を次々に打ち抜いて一気に最下層まで道(?)を作った。

「これでよし、と」

『ふわぁ……タツキパパ、スゴイです!』

「それほどもないさ。それより、早く降りよう」

『はい!』

そうして俺はたった今作った穴の中に飛び込んでいった。

降下することしばらく、俺とイリスは最下層に辿り着いた。

「うーん……暗すぎて何も見えないな。ここには電気が通ってないのか?」

『ええっと……どうやらこの階への電力供給はカットされているみたいですね』

「ここにいたヤツらが意図的に切ったってことか?」

『はいです』

ってことは、ここには『何か』があった、もしくはある、ってわけか……。

『周辺の生体反応及び魔力反応をチェックしてみますか?』

「……いや。それよりもまずはここがどんな場所なのか確認しよう。フラッシュ!」

俺の声に続いて閃光が走ると、目の前の空間がその姿を見せた。

『……酷いです……』

「……クソッ！やっぱりそうか……」

俺達の視界に映ったもの、それは生体ポッドの林だった。

更にポッドの中には、電力が通っていないかったために腐敗した人間や動物の身体の一部と思われるものが培養液中に浮かんでいるものも目に入った。

「……そう。この研究所で行われていたのは生体兵器を作り出す研究だったのだ。」

「やってくれる……！連中は生命を何だと思ってやがるんだ……！」

この任務を受けたときから大方の予想はつけていたが、こつも予想を裏切らない展開が待っているとなると頭に血が上る。

『っ！タツキパパ、大変です！』

そのとき、イリスが突然強い声を出した。

「何かあったのか!？」

『はいです！研究所の更に地下深くから強大な魔力反応が突然発生しました！』

「何っ!？」

イリスの報告を聞いて反応を探ると、確かに下の方で大きな力が膨らんでいるのを察知した。

「チイツ、^{トラップ}罠か！規模は……研究所消滅レベルだと！？」

どうやら侵入者の施設最深部への到達がトリガーだったようだ。

「アテナ！そっちでも反応は捉えているな？すぐに脱出するぞ！」

「（わかったわ。龍姫は間に合うんでしょうね？）」

「俺を誰だと思ってる？」

「（……そうね。心配するだけ無駄だったわ）」

「いや、心配してくれたのは素直に嬉しいよ。ありがとう」

「（ハア……。まったく、そういう返事を無自覚にするから龍姫は……）」

「なんだ？何か変なことでも言ったか？」

「（なんでもないわ。私は先に外に出てるから、龍姫も急いでね）」

「ああ。いくぞ、イリス、ハイペリオン！」

『はいですー！』

『Yes, my master』

「『ソニック・ブースト・フルスロットル』!」

『S o n i c B o o s t f u l l t h r o t t l e』

——ズドンッ!

床を蹴り飛び上がった俺は、入ってきた穴から弾丸のようなスピードで地上を目指した。

「このまま研究所をブチ抜く! いけるな、イリス!」

『はいですっ!』

穴から抜けた先、地上への道を塞ぐ研究所の天井へ向けて俺はハイペリオンのカートリッジをロードすると

「『瀑龍砲』!」

その圧縮魔力を乗せた一撃を撃ち出した。

——ドガァァンッ!

俺の両手から放たれた水龍が行く手を遮る天井を吹き飛ばし、開いた穴の先に空が見えた。

「いよしっ、抜けた！アテナは？」

穴から無事に地上へと脱出した俺は、すぐにアテナの所在を確認した。

「ここにいるわよ」

声のした方に目を向けると、俺から少し離れたところにその姿を見つけることができた。

「研究所の地下にあった罠だが、結構ヤバイっぽい。やり過ぎから俺の後ろについてくれ」

「そんなにスゴイの？」

「とりあえず研究所が跡形も無く消えるくらいには」

「……それは確かにヤバイわね」

そうしてアテナが俺の背後に寄ってきたのを確認した俺は

「『アイギス？』！」

アイギスを球形のフィールド状に展開し、来る衝撃への備えとした。その直後、

——ズドオオオオンッ——！！

凄まじい轟音と共に研究所のあった地点を中心にして、大爆発が起きた。

しばらくして爆発によって生じた土煙も収まってくると、俺達の目の前には大地にぽっかりと開いた巨大な穴と、爆風によって消し飛んだ元・森林とが広がっていた。

「これはまたとんでもないものを隠してたもんだな」

「そうね。この任務、受けたのが龍姫じゃなかったらきつと大変な事になってたわね」

「……そうだな」

もしかしたら時空管理局が被ったであろう人的損害が一瞬頭に浮かんで気が沈んだ。

「まあ、とりあえず今回の任務はこれで完了だ。お疲れさん」

「ええ。お疲れ様」

『お疲れ様でした、タツキパパ』

「イリスもよくやってくれたな。偉かったぞ」

『えへへ。タツキパパに褒められたです』

「ハイペリオンも、サンキューな」

『いいえ。タツキの力になれたのなら幸いです』

そうして俺達の任務は終了した。

執務室帰還後――

「――っと、だいたいそんなところだ。詳しい報告書と、研究所でコピーしたデータはまた後で提出する」

『そうか……。わかった。こちらでも改めて捜査が始まるだろうな』

「頼んだ。違法な生体実験が行われていたとなると、また厄介な事件の匂いがするからな」

『ああ。とりあえずご苦労だった』

「それほどでもない。じゃあな」

『何かあったらまた頼むよ……。っと、そう言えば伝え忘れるところだった』

「どうした？まだ何かあるのか？」

『いや、仕事ではないからそんなに睨まないでくれ。突然だが、君達にはしばらく休暇を取ってもらうことになった』

「は？休暇？何でまた急に？」

『夏以降、君達のところにはだいぶ任務が集中していたらしくてね。人事部から強制的に有給を消化させるようにと苦情が来たんだ』

「あー、じゃあ何だ。俺達はしばらく仕事をしなくていいと？」

『そういうことになるな。ちなみに人事部からの通達には1ヶ月は休ませろ、と書かれていた』

「え？マジで？1ヶ月も休んでいいの？」

『……嬉しそうだね』

「そりゃ嬉しいに決まってるだろ？いやあ、しかし1ヶ月か。何しようかねえ」

『わかっていると思うが、休暇中も緊急用の回線だけは開けておいてくれよ』

「わかってる。大丈夫だって」

『せつかくの休暇だ。存分に息抜きしてくれ』

「おう」

……さて、休みか。……とりあえず学校に顔を出さないとマズいな。
(主に俺の生命的な意味で)

第28話 『とある管理局員の業務風景』（後書き）

あとがき

龍姫 「……何か久しぶりの更新にしては嫌にシリアスな話だったな。最後以外」

作者 「更新が途絶える前にちょっと書いてたのを仕上げて載せました。今は反省しています」

龍姫 「反省するくらいなら最初から載せるな！」

作者 「管理局に勤めてる龍姫の日常的なものを書こうとしてただけだなあ……どこで間違えたんだろう？」

龍姫 「知らんわ！俺に聞くな！」

作者 「久しぶりすぎて筆ボケ（？）が激しい本編ですが、今回の伏線はどこかで回収される予定です。多分」

龍姫 「お前が書いてるんだろ！無責任すぎるわ！」

作者 「次回からは龍姫が休暇中という事で、内容的には軽い話になると思います」

龍姫 「いやあゝ、久しぶりの休暇だからな。思い切り楽しませてもらうさ」

作者 「それでは今回はこの辺で。龍姫、次回予告よろしく」

龍姫 「次回、第29話『一体何時から学校は魔窟になったんだ！
？（仮）』」

を
」

作&龍 「「よろしくお願いします！」」

第29話 『久しぶりの登校、待っていたのは仏か閻魔か』

KY^{クロ}から1ヶ月の有給を言い渡された翌日。

「ハア……なんで今日は月曜日なんだよ……」

俺のテンションは朝からドン底だった。

「結局昨日も連絡とれなかったし、絶対ヤバイよなあ……」

え？何がヤバイって？

「なのは達、怒ってるだろうなあ……」

当然、3人娘（なのは、フェイト、はやて）に決まってるじゃないか。

「行きたくねえな、学校……」

しかし、これで行かなかったらもつとヤバイ事になりそうなので覚悟を決めるしかない。

「大丈夫、そんなに酷い目には遭わないさ。……多分」

無理矢理自分を納得させて登校する俺だった。

「おはよーございまーす（ボソッ）」

（何故か）小声で挨拶しながら教室に入る俺。

「あつ、龍姫じゃん！超久しぶりー！」

しかし入り口のすぐ近くに居たクラスメイトには当然見つかり、声をかけられた。

「お、おう、久しぶり……」

返事をしながらキョロキョロと辺りの様子を探る。今の声で俺が来たことは教室内に伝わっただろう。……く、来るか？

「何でそんな挙動不審なんだ？」

「い、いや、何でもないよ。何でも……ハハハ」

……ふう。どうやら3人娘はまだ登校してなかっ――

「おはよう、たっくん♪」

「龍姫、おはよう♪」

「龍姫君、おはようさんや♪」

たわけがないですね、ハイ。声のした方へ振り返ると、とってもイイ笑顔の3人がいた。ああ、俺終了のお知らせか……

「や、やあ、おはよう、なのは、フェイト、はやて」

冷や汗がダラダラと背中に流れるのを感じながら、何とか挨拶を返す。

「たつくん、元気そうでよかったの！」

「ちょっと欠席が長かったから心配してたんだよ？」

「せやで。まあ、こうして顔が見れたから一安心やけど」

するとちよつと雰囲気が変わって、俺の安否を気遣ってくれる3人。

「．．．．あ、あれ？何か予想してた反応と違っぞ？もしかして俺、助かった？」

「「「（話はお昼休みにたっぷり聞かせてもらっの（からノで）」」」

「．．．．で、ですよー。ワテンポ遅れて送られてきた念話に目から汗が．．．．」

「あ、龍姫じゃない。アンタ2ヶ月近くも学校来ないなんて一体何処行つてたのよ」

「龍姫君、やっと学校来れたんだ。それでもうなのはちゃん達も大丈夫かな？」

更にそこへアリサとすずかもやって来た。．．．すずか、「なのは達も大丈夫」って何が？

「ああ、アリサとすずかもおはよう。今日からまたよろしく」

俺はすずかの不穏な発言については考えるのを止め、2人に挨拶を返した。

「欠席してた間のノートはなのは達が取ってたみたいだから、後で見せてもらいなさい」

「わかった。そうするよ」

「今日の放課後は空いてるのかな？よかったら帰りにみんなで翠屋に行かない？」

「大丈夫、空いてるよ。そうだね、久しぶりに行こうか？」

「『『『さんせーい！』『』『』」

そうして放課後の翠屋行きが決定したところで、朝は解散となった。

——キンコーンカーンコーン

そしてやってきた運命の昼休み。

俺は4時間目終了のチャイムが鳴るやいなや3人娘によって教室から連れ出され、今は屋上に正座させられている。(→は繰り返しチャイム)

「さて、まずは私達に言う事があると思うの」

「「うんうん」」

裁判官：なのは、フェイト、はやて、被告：俺という構図が出来上がっていた。

「えーっと……長らく連絡を怠って申し訳ありませんでした」

俺、土下座である。男のプライド？何それ、おいしいの？

「よろしい。では今回の罰についてやけど——」

「ええっ！？ちよつ、早くない！？」

「被告人は口を慎むように」

「うっ、はい……」

この場における俺の立場はないも同然だ。

「まあはやて、確かにちよつと早かったかも……えっと、被告人には何か理由があったのかな？」

流石に俺を不憫に思ったのだろう、フェイトが弁解の余地をくれた。やっぱりフェイトはいい子だなあ。

「うーん……クロノが次から次へと仕事を回してきたから、かなあ？」

「「よし、クロノ（君）はO H A N A S H Iの刑に決定」」

「……クロノよ、安らかに眠ってくれ。」

まあ確かに、元はと言えば今回の裁判の^{よびだし}原因を作ったのはアイツだしな。ざまあ（笑）

「コホン。では改めて被告人への罰を申し付けるで」

「お、お手柔らかにお願いします……」

「今回の罰は……」

「ゴクリ……」

「本日放課後の翠屋で全員分をオゴリ＋今週末にわたしらと模擬戦、でどうや？」

「「異議なし」」

「意義あ……」「「ギロ」「いえ、何でもありません。ハイ、すいませんでした」

こ、怖え……。マジで殺されるかと思うくらいの眼力だったぜ、今の。

「ま、龍姫君の謝罪もあったことだし、この件についてはこれでお
終いや」

「うん。そういえばたつくん、今回はどんなお仕事だったの？」

「あ、私もそれは聞きたいな」

どうやらお許しはいただけたようで、話は俺の仕事に関する質問に
移った。

「うーん、別に聞いても面白くも何ともないぞ？（あまり話したく
もないしな）」

「そんな事言わんと、龍姫君はわたしらにとってはお仕事の先輩や
からな」

「そうそう。どんなお仕事をしてるのか気になるの」

「そういうわけだからよろしくね、龍姫」

そういえば、はやてのヤツも管理局の嘱託資格を取ったらしい。な
のはとフェイトから話を聞いて決めたのだとか。

はやての持っていた『夜天の書』が、元・『闇の書』だったと聞いて
試験官だったクロノのヤツが驚いてたっけな。（はやての試験
後にクロノにアースラへ呼び出されて事の次第を話した）

「わかったよ。と言っても、次元犯罪者を逮捕したり、ロストロギ
アを封印・回収したり、管理外世界の調査に同行したりしたただけだ
よ」

「他にはないの？」

「あ、クラナガンに行った時に武装隊の教導をやらされたよ。教官資格なんて持ってないのにな」

「へえ、ミッドに行ったんか。どんなところだったん？」

「綺麗なところだったよ。街も人で溢れてたしね。あとは意外と日本文化が流入してて驚いたかな」

「例えば？」

「寿司屋があつたり、居酒屋風のだ食屋があつたりとかだね。食事の時に普通に箸を使ってる人も結構いたよ」

「そうなんだー。なんかちょっと面白いね」

その後も調査任務の時にユーノの部族のお仲間に出会った話なんかを聞かせた。

「そういえば、3人とも来年には本格的に局入りするんだっけ？希望部署とかはあるの？」

昼休みも半分が過ぎた頃に、俺は3人に対してそんな質問をぶつけた。

「うん。私は武装隊の士官からスタートして、目指すは戦技教導隊

の教導官だよ」

「私は執務官試験の合格を目指すよ。普段はどこかの艦船に所属して次元世界を回る事になるのかな」

「わたしは捜査官として働いていくつもりやけど、指揮官適応？っていうのも高いらしいから将来は未定やな」

なるほど。ここはとりあえず原作通りだな。

「そっか。僕に手伝える事があれば言ってね。できる限り力になるから」

「「「ありがとう、たつくん（龍姫／龍姫君）！」「」」

そんな感じで昼休みが終わる頃には3人ともすっかり機嫌は元通りになった。

放課後になり、アリサとすずかも加えたいつもの6人で翠屋へ。

アリサとすずかに、昼休みにどうして俺達を追ってこなかったのか聞いたところ、

「あんな鬼気迫る表情の3人を見て、後なんて追えるわけないじゃない！」（byアリサ）

「何だかお邪魔しちゃ悪い雰囲気かな、と思って……フッフ」（b

Y（すずか）

という答えが返ってきた。すずか、最後に笑ったのはどういう意味かな？

翠屋では俺のオゴリという事で、全員が普段は絶対に頼まない高級ケーキやお茶ばかりを注文し、俺の財布は結構なダメージを受けた。更に久しぶりに店にやってきた俺を見つけた桃子さんから熱烈な（女装の）お誘いをいただいたが、丁重にお断りさせてもらった。（何故か女性陣からは盛大なブーイングの嵐が来た）

そうしてこの日は解散となった。

正直色々あって疲れたけど、やっと戻ってきたという実感が湧いた、いい1日だったと思った。

第29話 『久しぶりの登校、待っていたのは仏か閻魔か』（後書き）

あとがき

作者 「龍姫、日常への帰還である」

龍姫 「正直3人の相手をしただけで腹一杯だったよ」

作者 「まあまあそう言いなさんなって。久しぶりの学校だったんだろ？」

龍姫 「確かに、かれこれ2ヶ月弱登校してなかったからな」

作者 「いくら義務教育中とはいえ、よく平気だよな」

龍姫 「その辺はちよいと裏技を使って……」

作者 「先生、ここに悪い子がいますよー！」

龍姫 「もちろん冗談だな」

作者 「本当かあ？」

龍姫 「疑うのは自由だが、本当に俺は何もしてないからな」

作者 「まあいいや。次回は今回3人娘と約束した模擬戦の模様をお送りする予定です」

龍姫 「ああ、そっぴやそんな約束したんだっけ」（遠い目）

作者 「龍姫が現実逃避に走ってしまったので今回はこの辺で。」

次回、第30話『おい待て、これは聞いてた話と違——（仮）

』

に」

作者 「ドライブ・イグニッション！」

第30話 『聞いてた話と違うんだが、説明を（以下略）』

久しぶりの登校で地獄を見た？日から6日が経過して、今日は日曜日。

——ピピピ

「うーん……」

——ピピピピピ

「……すっ……」

——ピピピピピピピピピ

「……………」

——ピピピピピピピピピピピ

「……ええい、うるさいわー！」

俺の睡眠を妨害せんとばかりに鳴り響く電子音に向かってキレた。
すると、

『『『へえ、何がうるさいって？』『』』

俺の目の前にウィンドウが開き、モニター越しにご機嫌斜めっぽい
3人娘が現れた。

「うお！？さ、3人お揃いでどうかしましたか！？」

ただならぬ空気を感じた俺は何故か敬語で返答していた。

「どうかした、じゃないの！たっくん、約束の事、忘れたの？」

「や、約束？」

するともの凄い剣幕でなのはが怒った。

はて？コイツらと何か約束なんてしてたっけ？

「月曜日、昼休み、屋上」

続いてフェイトが3つの単語を提示してくる。

うーん……月曜日ってことは俺が久しぶりに学校に行った日だよな？で、昼休みの屋上っていうと――

「あ、ああー！思い出したぞ、うん。思い出した」

やっべー。今の今まですっかり忘れてたぜ。

「むしろ、わたしらとしては忘れられてた事の方が信じられんのかなけど」

はやてが射抜くような視線で俺を咎める。

「それは本当に申し訳なかった。謝る。ごめん」

「……まあええわ。それじゃあ、わたしらは公園で待つてるから早う来てな」

「わかった。ダッシュで着替えて行くよ」

さて、久々のアイツらとの模擬戦だ。気合入れていこうか！

「……状況の説明を求める」

あの後、通信が切れてからおよそ10分。海鳴海浜公園に到着した俺は、開口一番そう口にしていた。

「あれ？言ってなかったっけ？」

「ああ」

可愛く首を傾げるなのはに対して短く答える。そして――

「どうしてユーノやアルフ、ヴォルケンスまでいるんだよ！」

3人に向かってあらん限りの大声で叫んだ。
公園を散歩中の一般人の方々が揃ってこちらに注目していたが、そんな事は今はどうでもよかった。

そうなのだ。俺はてつきりなのは達3人との模擬戦だと思っていたのだが、待っていたのは総勢10名の魔導師・騎士の皆だった。

「だって、私達3人だけじゃすぐに終わっちゃいそうだし」

「うちの子らは一度龍姫君と手合わせしたいって前から言ってたから、丁度いい機会やと思ってな」

「いや、でも、なあ？」

流石にここにいる全員を相手にするのは俺もちよつと面倒だったので、何とか抵抗しようとしたが、

「待ったはなしやで。約束した時には『わたしら3人と』とは言つてなかったやろ？」

「たっくん、一度決まった事に文句を言うのは格好悪いの」

「そうだよ。こつちの世界では、男に二言なしつて言うんでしょ？」

「うぐっ」

なのはにフェイトも痛いところをついてくる。

「……わかったよ。細かく確認しなかった僕にも責任はあるし」

「」「やったー！」「」

何か上手いこと誘導された気はしなくもないが、こうなったら素直に楽しませてもらおう。

それから俺が結界を張り、全員で沖へ移動した。

「それじゃあ5分間のチームミーティングを終えたら始めよか」

「了解」

まあチームミーティングと言っても、俺は1人なんだけどな。．．．一応シミュレーションはしておくか。

なのはとはやてに関しては大威力砲撃に注意する必要があるが、牽制を入れてチャージタイムを取らせなければ何とかなるだろう。フェイト、アルフ、シグナム、ヴィータ、ザフィーラの近接組には挟み撃ちされないよう注意しつつ、各個撃破していくのがベストだな。

後方支援組は．．．．．バインド系のトラップを仕掛けられないようにしないと。最優先で撃墜すべきだな。

ついでにちよつと仕込みもしておこう。．．．．．これを出せる状況になってくれると嬉しいんだが。

「それじゃ今日もよろしくな、相棒、イリス」

『Yes , my master .』

『はいです！タツキパパの為に頑張ります！』

セットアップと同時にユニゾンもしてあるので、準備は万端だ。

「お待たせ、龍姫君」

「お、終わったか？」

「ふっふっふ……今日は簡単にはやられへんで」

「へえ、それは楽しみだな。ところで、開始の合図はどいつする？」

「位置についてから3カウントでどうや？」

「オッケー。それでいいよ」

というわけで、双方それぞれの開始位置につく。俺の初期配置は自陣の後方だ。

『『『おかしい……』『』『』』

向こうのチームから明らかに警戒している空気が漂ってくる。よし、まずは狙い通り。

『……ほんならカウントを始めるで』

「いつでも」

『カウント3、2、1……0！』

さあ、戦闘開始だ！

—Side はやて

「……おかしい」

試合開始前、近接戦闘を主としたスタイルの龍姫君が何故か自陣後方に位置取った。一体何を狙っているのか……

「リインフォース、龍姫君はあそこからどう動いてくると思う？」

わたしはユニゾンしているリインフォースに聞いてみた。

『そうですね……先手を取っての大威力砲撃魔法、という可能性が高いと思われますが』

「せやな。確かに常識的に考えれば、それが定石なんやけど……」

『相手は“彼”だから何をしてくるかわからない、ですか？』

「そうなんよ。アレもただのブラフかもしれないし……」

もしここで読み間違えたら、初手から大損害を受ける可能性が高い。それなら——

「みんな、聞こえてるか？龍姫君があゝの位置から何をしてくるか、正直予想ができへん。せやから、とりあえず防御魔法をいつでも発

動できるようにだけスタンバイしておいてや」

『『『了解!』『』』』

あとは状況を見ながら臨機応変にいくしかないかな。

「……ほんならカウントを始めるで」

『いつでも』

『カウント3、2、1……0!』

龍姫君はどう動く………?」

——ヒュンッ

「なっ!?!」

『主はやて、龍姫の魔力反応をロストしました!』

消えた? そんなバカな!?!」

みんなも異変に気づき、それぞれに警戒を強める。

「とにかく結界内にはいるはずやから、サーチ急いで!」

『は、はいっ!』

——ビーツ、ビーツ!

「今度は何や!」

『我が陣の最後方に転移反応……彼です!』

「つしもた! 龍姫君の狙いは……シャル、ユーノ君!」

いきなりの敵陣最深部への転移魔法。その意味するところは……

『ハイドロカノン!』

「きゃああああっ!?!」

「うわああああっ!?!」

気づいて声をあげた時には、既に勝負が決まっていた。

龍姫君によって吹き飛ばされた2人の悲鳴が聞こえた。

『シャル、ユーノ・スクライア2名の意識レベル低下! 今の一撃で気絶したようです!』

2人を一撃で撃墜するなんて、相変わらず規格外な力の持ち主だ。

「やられたっ…… 龍姫君は最初から2人を狙ってたんや!」

『どういふことでしょうか？』

「2人はわたしらの支援要員や。こっちのブーストや治癒、龍姫君の妨害を任せとったメンバーを真っ先に墜とされたっちゅう事は……」

『……なるほど。こちらは補給線を断たれ、あちらは行動制限が軽減されるわけですね？』

「せや。初手は完全に向こうにしてやられたってわけやな」

『そこまで考えた上での戦略ですか。本当に末恐ろしいですね、彼は』

本当、こういうところはまだまだ敵わない。でも、試合はまだまだこれからだ！

「こうなったらこっちも役割分担を変えなアカン。ザフィーラとアルフさんで龍姫君の牽制、頼みます！」

『『了解！』』

「ヴィータ、シグナム、フェイトちゃんは1対1にならないように気を付けつつ龍姫君に仕掛けて！わたしとなのはちゃんて火砲支援します！」

『『『了解！』』』

今日こそは絶対に負けへんで！

—Side Out

—Side 龍姫

「ハイドロカノン！」

「きゃああああっ!？」

「うわああああっ!？」

開始早々の敵陣最深部への転移から繰り出した攻撃で、相手チームのシャマルとユーノを一発KOする。

1対多数の戦闘においては、敵方のFBを早い段階で撃墜することによって、以降の動きやすさが段違いにようになる。

「さて、次は——」

「『チェーンバインド』！」

「縛れ、『鋼の軛』！」

「——うおっ!？」

敵陣を見回していた俺の両横から飛んできたそれらをかわす。

「まあ、当然そう来るよな」

視線を向けた先には、思った通りの人物 アルフとザフィーラがいた。更に、

「撃ち抜け、雷神!」

『Jet Zamber.』

「いくよ、レイジングハート!」

『Divine Buster.』

フェイトとなのはによる同時攻撃が来た。さて、どうするか。

「シールドビット起動。『ミラーリフレクション』!」

——パキイン!

両肩と腰から射出されたビットが2基1セットになって反射鏡を作り、それぞれの魔法を相手を入れ替えて撃ち返す。

「うわわっ!？」

「あ、危なかった……」

反射された相手の魔法に驚きつつも、何とか避ける2人。

「そして追撃の……『ファントムブリザード』！」

そこに間髪入れずに砲撃を加えた。

「レイジングハート！」「バルディッシュ！」

『Protection Powered.』『Defenser Plus.』

——ギイイン！

バリアに当たった瞬間、甲高い音が響いた。

「こつちを忘れてもらっちゃ困るぜ！」

『Todlichschlag.』

「行くぞ、『紫電一閃』！」

そこへ、先程の応酬の間に距離を詰めていたヴィータとシグナムが斬りかかって来る。

「なんの！」

——ガキイン！

2方向から来た攻撃を両手にそれぞれ展開したシールドで受け止める。

「クッ……！」

「か、堅エ……！」

ぶつかったシールドから先に通そうと眉間にしわを寄せるシグナムとヴィータ。

「2人とも、そのまま龍姫君を抑えといて！」

上空から聞こえた声に顔を上げると、砲撃のチャージをしているはやての姿が目に入った。

「そうはさせるか！シールドビット、『ゲイルブラスター』！」

チャージが完了する前に妨害しようと速射性能の高い砲撃ではやてを狙う。

「主には指1本触れさせん！」

しかし、はやてに届くかと思った寸前でザフィーラがインターセプトした。

「ならば、防御を崩して墜とすまで！」

『Boost Break.』

——ガシュン、ガシュン！

ビットの砲撃にロードしたカートリッジ2発の魔力を加算して威力を底上げする。

「ぐ、ぐおおおおっ！」

増した圧力に苦しげな声をあげるザフィーラ。それでも通すまいと必死に砲撃を押し留める。

——ドゴオオン！

拮抗していた力が限界を超えたところで大爆発が起きた。

爆発の煙が晴れた先には、主を守ったまま魔力切れで気絶したザフィーラと無傷のはやてがいた。

「ありがとな、ザフィーラ。おかげで反撃の準備は万端や」

『封縛』

——サッ

——バシユッ

「おおっ!?!」

攻撃を止められていたシグナムとヴィータが俺から離れて距離を取った瞬間、闇色の縄のようなものに身体を縛られた。

（さて、どうするか。1発くらいならもらっても大丈夫だと思うし、アレを出すならここで喰らっておいた方が面白くなるだろうし……）
掴まった瞬間から、俺は今後の展開について考えを巡らせる。

（かと言って、真正直に喰らうのもそれはそれで嫌だしなあ……直撃の寸前で威力を減衰させればいいか。ということで、壊れる寸前までバインドを解除して——）

「いくで、龍姫君!『クラウド・ソラス』!」

バインドの解除作業の途中で、はやてからの砲撃がこちらに近づいてきた。

（よし。後はタイミングを合わせてバインドを解除した上で防御すれば問題な——）

「『レストリクトロック』!」

「『ライトニングバインド』!」

——パシィイン

「——って、何いっ!?!」

バインド解除の最後の一押しまで行ったところで、なのは&フェイトによるダブルバインドが俺の身体を縛った。

『クラウド・ソラス』は既に俺の目と鼻の先にまで迫ってきていた。

(ヤバい、この状況は予想してなかった!……間に合えっ!)

「『ディフェンスゲイン』!」

『Defence Gain』

——ズドオオン!

こちらの魔法発動と着弾はほぼ同時だった。その結果——

「げほっ、げほっ……クソッ、肩の装甲は持っていかれたか」

俺のBは両肩の部分が吹き飛ばされ、そこから肌が露出していた。

「……多少手加減してはいたが、ちよいとセーブしすぎてたみたいだな」

上手いこと俺に砲撃を当てられた事を喜んでか、ハイタッチなんぞをしている3人娘を見ると、ふつつつと静かに怒りが込み上げ

てきた。

『タツキパパ、どうするですか？』

「あいつらにはもう少し本気を出しても大丈夫そうだからな。リミッターを外す」

『了解です！何処まで外すですか？』

「今がA A Aだから…… S S + までいくか」

『わかりましたです！魔力リミッター、S S + ランクまで解除です！』

その瞬間、身体に先程までよりも多くの魔力が流れているのが感じられた。

『J a c k e t R e c o v e r y .』

——パシュン

ハイペリオンの一言でB J の欠損部分が元通りになる。

「本当の試合はここからだという事をあいつらに教えてやらないとな」

獲物に狙いを定めた狩人^{ハンター}の目をして、俺はそう宣言した。

第30話 『聞いてた話と違うんだが、説明を（以下略）（後書き）』

あとがき

作者 「今回はあとがきなしで、次回に続きます！

次回、第31話『これは模擬戦という名のワンサイドゲーム

（仮）』

に」

龍姫 「ドライブ・イグニッション！」

第31話 『切り札はこころという時に出すもの』

「さてと、まずは誰を墜とすかね」

まあ別に誰でもいいっちゃいいんだが……

「龍姫、行くよ!」

「ザフィーラの敵はアタシが取る!」

「フェイトとアルフか……よし」

アルフを狙おう。またバインドとかされると面倒だし。

残りの4人にはビットを差し向けておけば、こっちにちょっかいは出せないだろう。

「『フォトンランサー』、ファイア!」

「はあああつ!」

ふむ、フェイトが後方から射砲撃で支援しつつアルフが突っ込んでくるか。好都合だな。

「受けて立つぜ!」

『Acceler & power Boost』

自己強化の魔法をかけてアルフに向かってこちらからも突撃する。

途中こちらの進路を阻むように飛んでくるランサーは全て拳で叩き落とした。

——ガイイン！

「くあっ！？」

双方が繰り出した拳が衝突するも、殴りつけた勢いそのままにアルフは吹き飛ばされる。

「まだまだあっ！」

『Blitz Acceler.』

——ヒュンッ

——ズガガガガッ

「ガハッ！？」

高速移動魔法で吹き飛ばアルフの背後に回り、追い討ちのラッシュをかける。

「これで決める！『コキユートスバレット』！」

——パキパキパキッ

「グ、クッ！」

最後に拳を打ち込んだ場所からアルフの身体が凍り付いていく。

「終わりだ、『インパクト——』」

「させないっ！雷光一閃！」

『Plasma Zamber』

——ズガアアン

「うおっと！」

上空から来たフェイトの攻撃を避けたおかげでアルフとの距離が開く。だが、この距離ならまだいける！

「『ゲイルブラスター』！」

——ヒュゴオッ

——ドカアアン

「グフッ！」

「アルフ！」

身動きの取れないところに直射砲の直撃だ。アルフは今のでダウンしただろう。

それにフェイト、この状況で俺に背を向けるなんていただけないなあ。

「戦場で余所見するのは命取りだぜ？」

『Freezing Bind.』

——キーンッ

「あっ!？」

「残念ながら、フェイトにはここで退場してもらおう。『ハイドロプレッシャー——』」

「そうはさせないの!」

『Accel Shooter.』

「——つたく、今日はいいところで邪魔が入ってばかりだな!」

『Ice Bullet.』

——ドオオンッ

なのはと俺がそれぞれに放った誘導操作弾がぶつかり、相殺される。

「これで5対1。そろそろいいか……おい、ここまで残ったお前らにいいものを見せてやるよ」

『『『???』』』』

さて、それじゃあ試合前に仕込んだアレを使いますかね。

「ハイペリオン、召喚魔法陣展開」

『All right, master.』

——キイイイン

『『『あ、あれは!?!』』』』

「イリス、周辺空域の魔力密度は?」

『90%を越えてるです!』

「よし、いけるな。……我、氷護龍姫の名にて求む。氷結の世界を

統べる1柱、盟約に従いその姿を現し、我と共に敵を討て！出でよ
『氷結界の龍 ブリューナク』！」

——グガアアッ！

召喚陣から姿を現したのは、その身に冷気を纏った氷の龍。

『氷結界の龍 ブリューナク』

「本来ならば神龍クラスに属する龍である為、今の俺では喚べないはずなのだが、ゼウス曰く俺との親和率が異常に高いので特別に喚ぶ事ができるらしい。」

「（我を喚ぶとはまた珍しい事もあったものだな。何があった？）」

「いや、別にデカイ事件とかってわけじゃないんだが、たまには思い切り暴れてもらおうと思ってな」

そう言いながら、離れたところで呆けた顔をしている5人を指した。

「（なるほど、理解した。そういう事情であれば、この力存分に振るわせてもらおうでしょう）」

「それじゃ、よろしく頼む」

「（任された）」

それだけ会話を交わすと、俺とブリューナクは散開して5人に向かっていった。

— Side Out

— Side はやて

『ここまで残ったお前らにいいものを見せてやるよ』

突然そんな事を言い出した龍姫君を警戒して、わたしら5人は一度集合する事にした。

とりあえず全員が何をするのか見てみたいと言っているので、攻撃はせずに状況を見守っている。

「何が来ると思っ？」

「うーん、何だろう？」

「とりあえず何が来てもいいように備えておくのがよいかと」

「そうですね」

「まあ、何が来てもアタシが叩き潰すけどな！」

——キイイン

そんな話をしていると、龍姫君の背後に巨大な魔法陣が浮かび上がった。

「あ、あれは!？」

「お、何やフェイトちゃん。答えがわかったん？」

「う、うん。でもあれは……かなりマズいかも」

「ど、どういうこと？」

「あれは召喚魔法陣なんだ。龍姫は召喚をする気だよ」

「何っ、あれがそうなのか!」

「シグナム、とりあえず目をキラキラさせるのは止めてくれ」

「龍姫がアレを出すって事は、割と本気で私達を墜としに来るって事で——」

——グガアアアツ!

召喚陣から現れた龍の雄叫びが、フェイトちゃんの台詞を遮って周囲の空気を震わせた。

「こ、これは何と言つか……」

「せやね……」

「はい……」

「ああ……」

「やっぱり……」

『『『かなりマズいんじゃないか!?!?!』』』

その瞬間、わたしらの心は1つになった。

「ど、どうしよう!?!? あんなのとたくくん、両方の相手なんて絶対無理だよ（涙目）」

「わ、私も無理…… シグナム、何とかありませんか?」

「い、いや、私でも流石にアレと戦えばタダではすまないだろう…… ヴィータはどうだ?」

「アタシも同感。アレはアタシらの手に負える相手じゃないよ…… どうする、はやて?」

「う、うーん。まさかあんなのが来るなんて考えてへんかったからなあ……」

『我が主、あちらの打ち合わせが終わったようです。こちらへ向かってきます!』

ああでもない、こうでもない迷っているうちに、龍姫君達は動き出してしまったようだ。

「こうなってもた以上は仕方ない。とにかく皆、全力全開でぶつかっていくで!」

『『『はい!』』』

わたしらは迫ってくる敵に向かって勢いよく飛び立って行った。

— Side Out

— Side 龍姫

「まあ、こんなもんだろっ」

そう言ってハイペリオンを待機状態に戻す。

『『『お、終わったー!』』』

俺以外の全員、疲労困憊といった様子だ。

「（なかなか楽しめた。機会があれば、また喚んでもらいたいものだ）」

『『『もう勘弁して下さい！！』』』

「……だ、そうだ。次はあいつらがもっとレベルアップしてからだな」

「（それも致し方なし、か。では、その時が来るのを楽しみに待っているでしょう。さらばだ）」

「おう。ありがとな」

ブリューナクも召喚陣の中へと帰って行った。

「最終結果はミッド&ベル力混成チーム全員撃墜により、俺の勝ちってことで」

そしてお約束の勝利宣言である。

「むー、また勝てなかったの」

「まだまだ鍛錬が足りないのか……」

「前半戦は結構いい勝負できてたと思ったんやけどなあ……」

なのは、フェイト、はやての3人は最後の最後まで粘ってたよな。

それに前半は意外と苦戦させられたからな。次にやる時は開始から

リミッターを緩めてもよさそうだ。

「試合に負けたのは悔しかっただろうけど、僕がいなかった間もちやんと訓練してたみたいだね。前に見たときよりも動きが格段によくなってたよ」

「……ほんと（ホンマ）！？」「」

「こんな事で嘘は言わないよ。思ってたよりも動けてたから、正直驚いたよ」

「……（たつくん（龍姫／龍姫君）に褒められちゃった／／／／）」「」

何故か3人はそこで赤くなっていたが、どうかしたのか？

「まあその調子で鍛錬を続ければ、いつかは僕を追い抜けるかもね」

「……（ほわぁ……）」「」

……聞いてなさそうだな。まあ皆が訓練を積んだ以上に俺も鍛えるから、そんな日は来ないと思うが。

「それじゃあ今日は解散！お疲れ様でした！」

「……ハッ！？お、お疲れ様でした！」「」

今日は気持ちよく眠れそうだ。

第31話 『切り札はこゝぞという時に出すもの』（後書き）

あとがき

龍姫 「おい作者」

作者 「何、どしたん？」

龍姫 「一番いいシーンがごっそりと抜け落ちてるんだが？」

作者 「やべ、やっぱりバレたか」

龍姫 「これを読んで気づかない人間がいる方がおかしいだろ！？」

作者 「そりゃそうだ。まあ何というかな……」

龍姫 「何だよ？」

作者 「これだけの人数を同時に動かしての戦闘シーンを書ける程の文才が自分にはまだなかつ——」

龍姫 「こんの、アホ作者がー！！」

——スパアアアンツ！

作者 「あべしっ！」

龍姫 「だったら最初から書くなよ！もっと修行してからにしろよ！」

作者 「へへー。仰る通りで」

龍姫 「今後はこんな無謀な挑戦はするなよ？」

作者 「善処します」

龍姫 「まったく本当に反省してるんだか……読者の皆様には、なんだ駄文を見せてしまい申し訳なかった」

作者 「本当にすいませんでした」

龍姫 「これに懲りず、次回以降もこの作品に付き合ってくれとありがたい」

作者 「それでは次回予告。

次回、第32話『始まりはいつもここから（仮）』

を」

龍・作 「「よろしくお願いします！」」

第32話 『始まりはいつもここから』

先週末の模擬戦からはや2週間。俺は少々騒がしくも穏やかな毎日を満喫していた。

そんなある日の事。

「んー。今日も天気がいいし、絶好の散歩日和だな」

休暇に入ってからというもの、俺は暇さえあれば海鳴のあちこちを散歩して回っていた。

「今日はどうするかな。この前は山の方に行っだし、海の方にも行くか」

今日の目的地を定め、歩く事しばし。

——テクテクテク

——テクテクテクテク

——ヒュオンッ

——テクテ

「……あれ？」

平坦な道を歩いていたはずの身体が、突然浮遊感に襲われる。

足元を見ると、そこには暗く深い闇が大きな口を開けていた。

「何の、『アクセル——』」

しかし、素早く周囲を見渡して他に人が居ない事を確認した俺は、魔法を発動してそこから離れようとした。

のだが、

——パシュウウン

「な、どうして!？」

何故か練った魔法が強制的にキャンセルされた。

当然、状況が認識できずに思考がフリーズした俺は成す術なく穴の中へと急降下なわけ。

「なんじゃこりゃあああああつ!!!」

落ちていく俺はそう叫ぶしかなかった。

——ヒュウウウウン

——どちゃっ

「あ痛っ！」

無限に続くかに思われた自由落下だったが、強かに背中を打ったところで終わりを迎えた。

……ところで、これとよく似た現象に以前巻き込まれた覚えがあるのだが、まさか犯人は——

「その通り！いやはや理解が早くて助かる」

急に視界が白に染まると同時に聞こえてくる声。そちらを向いた俺の前にいたのは——

「ゼウス！またテメエの仕業か！」

「最高神であるこの俺をテメエ呼ばわりとは相変わらずだな、龍姫」

口の端を歪めてキザっぽく笑う最高神^{バカ}だった。

「せつかくの休暇を満喫していた俺を呼び出すとはいい度胸だな、おい！」

「ふむ。俺としてはその休暇を有意義なものにしてやろうと思ってここに呼んだのだが」

「俺がその言葉をバカ正直に信用すると思うか？」

「まあありえないだろうな。だが、話くらいは聞いても損はしないと思うぞ？」

「ほう……」

ゼウスの奴め、一体何を考えているのか。

「……いいだろう。聞くだけは聞いてやるから、さっさと話せ」

「実はだな、先日神界の秘宝庫が——」

「帰らせてもらう」

明らかにヤバそうな単語が出てきたところで回れ右をする俺。

「まあ待て。とりあえず最後まで話を聞いていけ」

「断る。既に嫌な予感しかしないからな」

「……ついだから教えておいてやるが、お前の力では絶対にこの空間からは抜け出せないぞ」

「ハアツ!？」

今、コイツは何て言った？

「何だ、聞こえなかったのか？お前ではこの空間から脱出する事はできないと言ったんだ」

「どういう事だよ？」

「この空間はな、お前がさっきまでいた世界とは“階”が違うんだよ。いくらお前が魔法に関して万能に近いとはいえ、『人間は世界の“階”を越える事ができない』という大原則には逆らえない」

「……それをできるのが“神”ってことか」

「そうだ。つまり、この空間に落ちた時点でお前の選択肢はなくなっていたわけだ」

やっぱりムカつくわ、コイツ。

「……続きを話せよ」

「わかればよろしい。先日神界の秘宝庫が何者かによって破られたらしくてな。秘宝の幾つかが“とある世界”に流れてしまったそう
だ」

「『らしい』とか『そうだ』とか、お前は見てないのか？」

「ああ。『神界新聞』の記事を読んだただけだからな」

「そんなんでいいのか、最高神？」

「アマテラスやオーディンが実地検分したらしいからいいんだよ。面倒だし」

おい、サラツと本音を漏らしてんじゃねえよ。

「犯人は？」

「絶賛捜査中だ。神界の秘宝庫を破ったヤツだからな。慎重にならざるを得ないんだろっよ」

「なるほどな」

神界の秘宝庫を襲うなんて、喧嘩を売ってるんだろっかソイツは。

「まあ犯人探しは専門部署に任せておけばいい。問題は流出した秘宝の方だ」

「何だ、そんなにヤバいものがなくなったのか？」

「流出したもののリストには『グングニル』、『草薙の剣』、『ヴァジユラ』なんて名前があったな」

「どれも最高位の秘宝じゃねえか！」

「だから問題だ、と言っただろっ」

また聞いてなかったのかコイツは、みたいな目で俺を見るな。

「どうやって回収するんだ？」

「秘宝が流された現地に捜査員を派遣し、ソイツに一任する予定だ」

「……読めたぞ。その捜査員とやらを俺にやらせるつもりだな？」

「うむ。お前が頭のよく働くヤツで助かるなあ」

「ハッ、お断りだ！誰がそんな——」

——パチンッ

——ヒュオンッ

「んなっ！？」

ゼウスが指を鳴らした瞬間、俺の足元に穴が開く。

「言っただろう、お前に選択肢はないと」

落下する直前に見えたのは、ニヤニヤとイヤらしい笑みを浮かべたゼウスだった。

「ちつくしょう！覚えてろよおおおっ！」

そうして俺は再び何処かへと落ちていった。

— Side Out

— Side ゼウス

「これでよし、と。まあ龍姫なら問題はあるまい。アレも一緒に送ったことだしな」

後はこの事をアテナに伝えるだけだな。

「……アテナ、私だ。お前に伝えておかねばならぬことがある」

念話を使って最愛の娘にコンタクトを取る。

「（……お父様？一体何の御用でしょうか？）」

「うむ。用件というのは龍姫の事なのだがな、しばらくアイツはそちらの世界を留守にする事になった」

「（……今度は何事ですか？）」

うん？心なしかアテナの雰囲気グゲグゲしくなったような……

「実はな、先日神界の秘宝庫が——」

とりあえず私は簡単な事情を話して聞かせたのだが、

「（お父様！何という事をしてしまったんですか！）」

何故か娘に叱られてしまった。

「ど、どうしたアテナ。何をそんなに怒っているのだ？」

「（どうした、ではありません！神界の事件に人間を関与させるなど、本来あつてはならない事なのですよ！？）」

「し、しかしだな、今回は内密に事態を収拾しなければならないわけだな……」

「（しかしもかかしもありません！それでお父様、龍姫は今何処に？）」

「つい先程、件の世界へ向けて送り出したところだ」

「（ハア……）」

あれ？なんか娘に呆れられてる？

「（わかりました。既に事態が進行してしまっているのであれば仕方ありません。ところで、あちらとの通信はできるのでしょうか？）」

「できないことはないが、面倒くさ——」

「（お父様？）」

「うむ、何とかしよう。ただし1回だけだぞ?」

一瞬本気で殺されるかと思った。嫌な汗が背中を伝う。

「(いいでしょう。……今回は特別に不問としますが、次はありま
せんよ?)」

「いや、それは……」

「(い・い・で・す・ね?)」

「はい、わかりました……」

くすん……。娘は反抗期になってしまったようだ。

「……仕方がない。龍姫には『星が鍛えた聖剣』を授けておいてやる
か」

アテナとの通信を終えた私はそんな事を呟くのだった。

— Side Out

第32話 『始まりはいつもここから』（後書き）

あとがき

龍姫 「またアイツのせいでえええ！」

作者 「うおう、荒れてますなあ」

龍姫 「アイツと関わっていると本当にロクな目に遭わないな、畜生っ！」

作者 「どうどう。とりあえず落ち着け」

龍姫 「フーツ、フーツ！」

作者 「……落ち着いた？」

龍姫 「フーツ………ん、まあ何とか」

作者 「よろしい。まあ今回の話を見てもらえれば分かる通り、次回から新章に突入します」

龍姫 「今度は何だ？」

作者 「うむ。実はクロスオーバーものにしてみようかと」

龍姫 「……大丈夫なのか？」

作者 「大丈夫だ、多分」

龍姫 「多分じゃ安心できないだろうが！」

作者 「ちなみに、クロスオーバーする作品については次回までのお楽しみという事で」

龍姫 「（コイツ、スルーしやがった！）」

作者 「キャラ及び設定に独自解釈を含む為、原作を重視する方の中には不快に思う方もいらっしゃるかと思えます。その点は留意して下さい」

龍姫 「それでも読むよっていう人は、このまま次の話に進んでくれ」

作者 「そういうのはちょっと……という方は、第33話までしはしのお別れです」

龍姫 「それじゃ、次回予告だな。

次回、異聞録第1話『やって来ました新世界、そこは……（仮）』

を」

作者 「お楽しみに〜ノシ」

異聞録第1話 『やって来ました新世界！そこは……』

——ヒュウウウウウ

「あー、しまった。そういえば何の情報も聞き出せてなかったな」

何時終わるとも知れない自由落下の最中、ふとそんな事に思い至る。

「せめて行き先くらいは吐かせるべきだったか」

ゼウスの気まぐれで厄介事に首を突っ込まされる事については考えるだけ無駄だと判断した。

「……それにしても、何時まで落ちてればいいんだ？」

——ヒュウウウウウン

——パカッ

「……はい？」

——スポッ

突然落下していた先の空間に亀裂が入り、俺の身体は勢いそのままにそこへ吸い込まれてしまった。

しかも亀裂に入った途端に落下のスピードが急激に上がった。

「何じゃこりゃあああああ！」

.....

.....

.....

.....

——ペッ

「ノオオオオオオ！」

途中で突然視界が明るくなった。どうやら外に放り出されたらしい。しかしめくるめく事態に混乱しきった頭ではまともに飛行魔法を発動させる事もできず、ただただ凄まじいスピードで落ち続ける俺。

そんな俺の眼前に大きな湖が見えた。

「うおおおお、間に合ええええつ！」

このまま突っ込むのはヤバいと思った俺は、咄嗟に片手を前に伸ばして体全体をラグビーボール状のバリアで覆った。

その数秒後、

——ドッパアアアン！

湖から特大の水柱が上がった。

「ゼハー、ゼハー……し、死ぬかと思った……」

湖に突っ込んでから数分後、俺は湖畔に膝をついて息を整えていた。

「バリアが間に合わなかったら、水面と衝突した瞬間グチャツといってたかも……」

っていうか、何であんな加速がついたんだ？

「むう、わからん。……しかし、ここは一体何処なんだ？」

呼吸が落ち着いてきたところで、改めて状況を確認することにした。

まずは身体に異常がないかどうか確認を――

「って、何じゃこりゃあああああつ!?!」

て、手が……あ、足が……

「大きくなってるううっ!?!っていうか俺、身体が成長してるううっ!?!」

あまりの変わり様に思わず叫んでしまった。

湖に映して確認した俺の外見は、推定年齢十七〜八歳くらいの背格好になっていたのだ。

「な、何で、どうしてこうなった!?!」

ヤバい。初っ端から意味不明すぎて理解が追いつかない。

「と、とりあえず冷静に……そうだ、おつち……じゃない、落ち着いて考える」

こうなった原因は……原因……原因……原因……

「……って、^{ゼウス}アイツの仕業に決まってるだろうがあつ!」

再びの絶叫。

「はあ、はあ、はあ……ふう……」

何とか気を静めて、今度は周囲を見渡す。

不時着？した湖の周りは鬱蒼とした森で囲まれていた。

「ハイペリオン、現在位置の特定はできるか？」

『お待ち下さい……エラー発生、エラー発生。現在位置、特定できません』

「……他に何かわからないか？」

『少なくともこの世界はマスターのいた世界とは別の次元にあるのではないかと』

「まあそうだろうな。……とりあえずこの世界の人間と接触したい。サーチを頼めるか？」

『お任せ下さい。……見つけました。ここから南に一キロの地点に反応があります』

「サンキュー、相棒」

さて、それじゃあ移動しようかと思ったその時、

『（——姫、龍姫！）』

どこかで聞いたような声が頭の中に響いてきた。

「うん？この声は……アテナか？」

『（龍姫！よかった。無事に繋がったみたいね）』

「おう、そうだな。それで、こうして連絡してきたってことは――」

『（ええ、話はお父様から聞いているわ。……ごめんなさい、龍姫）』

「いきなり謝るなんてどうした？」

『（今回はお父様のせいで龍姫を神界のゴタゴタに巻き込んでしまったからよ。本来ならこんなこと、あつてはならないのに）』

「あー、まあそれについてはあまり気にするな。少なくとも俺は怒ってないし」

『（でも……）』

「いいんだ。それより、多分これが最初で最後の通信なんだろう？何か伝言があるんじゃないか？」

『（ハア、相変わらずよく働く頭ね。その通りよ。早速だけいいかしら？）』

「ああ、頼む」

『（一つ目は今の貴方の身体のことよ。お父様曰く、今の龍姫はイリスと『フルコンタクト』している状態らしいの）』

「『フルコンタクト』？」

アテナの台詞の中に出てきた聞き慣れない単語をそのままオウム返しした。

『（何でも、融合騎と完全に一体化することによって、通常のユニゾン時の二倍以上の演算速度と処理速度を誇るのだとか）』

「へえ……ってアイツ何時の間にそんなことを」

俺が知らないうちに勝手な事をしやがって。

『（それからもう一点、『フルコンタクト』中は龍姫のリンカーコアが二つになるんですって）』

「ちょっ……それマジか？」

『（本当よ。これによって龍姫の魔力運用効率はこれまでの二乗以上になると言っていたわ）』

何だそのアホみたいにチートな力は。

「そういえば何故か俺の身体が成長してるんだが、それと関係あったりしないか？」

『（身体の成長？いいえ、そんな話は聞いてないわね。もしかしたらお父様も知らなかった副作用なのかもしれないわ）』

アイツでも知らない事とかあったんだな。……あれ？じゃあリアルに原因不明？

「オツケー、とりあえず一つ目は了解した。次は？」

『（二つ目は貴方に授けられた力について。龍姫、ちょっと右手に魔力を集めてみて？）』

「わかった……ふんっ！」

言われた通りに右手に魔力を集中する。確かに、以前よりも遥かに効率は上がったらしい。一瞬でフルチャージできた。

「あれ？何だコレ？」

すると、右手の甲に何やら剣の形をした紋章が浮かび上がった。

『（龍姫の右手には『星が鍛えた聖剣』が宿っているの。今みたいに魔力を溜めた後に真名を解放すれば使えるわ）』

「『星が鍛えた聖剣』って、まさかアーサー王の……」

『（ええ、そう。とても強力な力だから、無闇に使わないようにね）』

「あ、ああ。わかった」

なんか俺、だいぶ人間離れた感じになったんじゃないか？

『（最後は今貴方がいる場所について。そこは――ザザッ――）』

肝心の単語をアテナが喋ったところで雑音が入った。

「どうした？何かあったのか？」

『（こめーザザッーい、こちらーザザッー回線ーザザッー強制ーザザッー気をつけて——）』

その言葉を最後に通信は途切れてしまった。

「……結局ここが何処かは分からず終いか」

向こうで何があったのか気にならないわけではないが、アテナなら大丈夫だと信じよう。

それに何より――

「おい、いい加減出てきたらどうだ？さっきから俺を見ているのはわかってるんだ」

まずはこの場にやって来た不審者の顔を拝ませてもらわないとな。

―Side Out

―Side ???

「おい、いい加減出てきたらどうだ？さっきから俺を見ているのは

わかってるんだ」

私が影から監視をしていた青年がこちらに目を向けながら、突然そんな言葉を口にしました。

—そんな、どうしてわかったのでしょうか？

少なくとも、私は完璧に気配を消していたはずですが。

—ならば何故？そもそも彼は何者？

様々な疑問が私の中に浮かんできます。

「どうした、出てこないのか？それとも、俺が引きずり出してやるのか？」

——ゾクッ

青年がそう言った瞬間、彼から発せられるプレッシャーが一層大きくなりました。

—この人、強い………！

私も自分の力に関してはそれなりの自信を持っていましたが、彼は私に比肩する以上の力を持っている事をヒシヒシと感じました。

—相手の力が未知数である以上、ここで無理をする必要はありませんね。

私は素直に姿を見せた方が良かったらうという結論に達しました。

「わかりました。今そちらに行きますので、少々お待ちいただけますか？」

そう言つて、私は隠れていた場所を離れて彼の前に姿を現します。

「……あれ？もしかしてアンタ……」

彼の視界に入つた途端にその目が大きく見開かれ、何やら驚いている様子。

——もしかして、彼は私の事を知っている？

私は彼の様子からそんな推測を思い浮かべました。

—Side Out

—Side 龍姫

「わかりました。今そちらに行きますので、少々お待ちいただけますか？」

俺が目を向けていた先からそんな声が返ってきた。

今の声は明らかに女性のものだったな。

一体どんなヤツが俺を監視していたのか、その顔を拝ませてもらおうとしよう。

——ガサガサッ

しばらくの後、森の中から出てきたのは一人の少女だった。

．．．．．つて、

「あれ？もしかしてアンタ……」

俺はその少女に見覚えがあった。それも『今の俺』になる前の世界での事だ。

その少女は鮮やかな緑の髪に蛙と蛇を模した髪留めを付け、袖の上腕部だけがない特徴的な巫女服を着ていた。

本当に俺の知っている人物かどうかは聞けば分かるだろうと思って、俺は彼女の名前を口にした。

「東風谷早苗さん、かい？」

「はい、その通りです。やはり、貴方は私の事をご存知だったんですね」

問うと、彼女はニコツと笑いながら首を縦に振った。

「ああ、一応な。……ところで、キミがいるって事はここは幻想郷なのか？」

「ええ、そうですよ。そう言う貴方は最近増えていると噂の外来人の方ですよね？」

うーん。今の俺を幻想郷における“外来人”の定義に当てはめてもいいものか……

「あー、まあそういう事になる、のかな。俺の場合はかなり事情が特殊なんだけど」

「そうなんですか？……とりあえずこんな所で立ち話もなんですから、神社にいらっしゃいませんか？」

早苗さんの言う神社って事は、守矢神社だよな。あそこの二柱なら事情を話せば協力してくれるかもしれないし、行ってみるか。

「そうだな。それじゃあ、お言葉に甘えさせてもらおうかな」

「はい。それでは、私に付いて来て下さいね」

「ああ。よろしく頼むよ」

そんなわけで俺、幻想入りしました。

異聞録第1話 『やって来ました新世界！そこは……』（後書き）

あとがき

龍姫 「今回のクロスオーバー作品って……」

作者 「そう！すでにお分かりの通り、“上海アリス幻樂團”さん
原作の『東方Project』だ！」

龍姫 「この作品も登場人物って結構な数だったよな？」

作者 「まあそうだな」

龍姫 「お前の手に負えるのか？」

作者 「何とかなるさ！」

龍姫 「……で、どうしてこのコラボを考えた？」

作者 「実はこの作品（『蒼銀の護り手』）を書き始めた頃に作
業BGMとして東方の楽曲を聴いてたのがきっかけなんだが」

龍姫 「なるほど。それで？」

作者 「それからキャラクターや世界観について調べてみたら、ど
んどんハマっちゃって」

龍姫 「ふむ」

作者 「いつかこれ（『東方Project』）を題材に作品を作ってみたと思ってたんだ！」

龍姫 「それが今回のコレか」

作者 「そういうことだ」

龍姫 「まあお前なりに思い入れがあるのはわかったよ。不安はあるが、応援はしてやる。頑張れ」

作者 「おうよ！」

龍姫 「それじゃ次回予告だ。」

次回、異聞録第2話『神様の日常って一体……（仮）』
を」

作者 「よろしく願います！」

異聞録第2話 『神様達の日常って……』

湖の畔から場所を移してやってきたのは、大きな鳥居のある社だ。

「……そういえば俺、まだ自己紹介してなかったよな？」

「……あれ？言われてみると確かにそうですね」

その鳥居をくぐった所で大事な事を思い出した。

「俺の名前は氷護龍姫だ。よろしく」

「私も改めましてご挨拶を。東風谷早苗といいます。こちらこそよろしく願いますね」

「えっと、呼び方は早苗さん、でいいのかな？」

「はい。お好きなように呼んで下さって結構ですよ。では私は……龍姫さん、でいいですか？」

「ああ、それでいいよ」

というわけで、ようやく名乗りも終わったところで、

「おかえり、早苗。……おや、そちらはお客かな？」

「神奈子様、ただ今戻りました。こちらはお客様の氷護龍姫さんです」

「どうも、氷護龍姫といえます。貴女は八坂神奈子様ですよね？」

「おや、私の事を知っているのかい。という事は、君は外来人かな？」

「いやあ、自分の場合は事情がかなり特殊でして。まあ一応そういう事になると思いますが」

「ほう、そうかいそうかい。……………で、本当のところアンタは一体何者なんだい？」

「か、神奈子様！？」

その瞬間、神奈子の纏っていた空気が研ぎ澄まされた刃のように鋭くなった。

急に場の空気が剣呑なものに変わった事で慌てる早苗さん。

「はっはっは、一体何の事ですかね？」

「惚けるんじゃないよ。一見アンタは普通の人間のように見えるが、『普通の人間』から神気を感じるなんてのは本来ありえない事だからね」

「あー、何か空気に違和感があると思ったら神^{ソレ}気のせいかな。まあ事情を話すと長くなるんですけど……………」

「おや、話をする気があるって事は、少なくとも今ここで争う気はないって事かい？」

「ええ。むしろ自分としては、事情を話して協力を仰ぐつもりで来ましたから」

「……ふむ。どうやら今の言葉に嘘はないようだね。他にも何か考えてはいるようだけど」

「そちらに危害を加えるような真似をするつもりはありませんよ」

何もしないという意味を込めて、両手を上に挙げてヒラヒラさせる。

「いいだろう。……早苗、すまないが先に戻っていてくれないか。私は少しコイツと話があるんでな」

「わ、わかりました神奈子様。それでは龍姫さん、失礼いたします」

「ああ。何事もなければ、また後で会おう」

「——クスツ、はい。また後ほど」

俺の返答が可笑しかったのか、早苗さんは吹き出した笑いを堪えながら笑顔で去っていった。

早苗さんの姿が完全に見えなくなったところで俺は話を切り出した。

「それでは話しますか……あ、でもその前に。いるのは分かっていますから出てきてくれませんか、洩矢諏訪子様？」

「ありやりや、気づかれてたのか。まいったねえ」

「俺は気配を感知するのが割と得意でしてね。それではお二人が揃

ったところで、改めて話を聞いてもらえますか？」

「ああ。聞かせてくれ」

「えつとですね……」

——青年説明中……

「——っとまあ、そんな感じです」

途中幾つか二柱からの質問に答えながら、説明を終えた。

「なるほど、神界の秘宝庫が破られたとはねえ」

「しかもお宝が持ち出されて、この幻想郷にバラ撒かれたと」

「ええ。それで個人的に繋がりのあったゼウスから搜索を依頼されて、つい先程幻想郷^ニに到着しました」

「それじゃあ、早苗に確認に行かせた湖の水柱の原因はやっぱりア
ンタか」

「そうなります」

「それにしても、あの気分屋が気に入った人間か。興味深いね」

「あ、やっぱりお二人はゼウスの事を知ってるんですか？」

「まあね。一応アイツも一つの神話の最高神だからね。神界じゃ有名な人さ」

「交流はあったんですか？」

「んー、まあボチボチかな。偶に声掛けて一緒に麻雀打ったりしたよ」

「へ？麻雀？」

「ああ。神界じゃ結構メジャーな遊びだよ。他に、スポーツなんかも人気があったね」

「あー、そうそう。野球とかサッカーには神界リーグがあったよね」

「そんなのもあったなあ。最近は何処が強いんだろうねえ」

「それから、神界じゃ二日に一回は宴会が開かれてたっけ」

「そうだったそうだった。幻想郷に来てからもそれなりの回数やってるけど、あの頃はもっと多かったな」

昔が懐かしくなったのか、俺を置いて思い出話に花を咲かせる目の前の神様達。

俺は俺で、

「（不真面目なゼウスが特殊なのかと思ってたが、神様って意外と適当に暮らしてるんだな）」

と軽くショックを受けていた。

「……っと、すまない。話がかなり逸れてしまったな」

「いやあ、ゴメンね」

ようやく一区切りついたのか、二柱が俺の方に向き直る。

「いえ、お気になさらず。それで、できればお二方には搜索にご助力いただきたいのですが……」

「ああ、構わないよ。故郷の一大事なんだ。こちらからお願いしたいくらいさ」

「私らでよければ、いくらでも力になるよー」

「ありがとうございます。それではよろしく願いします」

快く賛同してくれた二柱に頭を下げる。

「お前さん、確か名前は……」

「氷護龍姫です」

「おお、そつだそつだ。それじゃ龍姫、でいいな？」

「はい」

「龍姫、今日はウチに泊まっていきな。どうせ宿無しなんだろう？」

「ええまあ……って、いいんですか？」

「いいのいいの。それに龍姫がいた世界の話とかも聞いてみたいしね」

「……それじゃあ、お言葉に甘えさせていただきます」

「よし、そうと決まれば今日は宴会だ！早苗に言っつてすぐに準備させよう」

「今日は久しぶりに美味しい酒が飲めそうだねえ」

というわけで、本日の宿は守矢神社に決定した。

それから時間は過ぎ、今は夜。

「おつ龍姫、お前さん意外とイケる口だねえ」

「いえいえ、それほどでも……っと、ささ、お返しです」

「いやあ、こりゃどうも」

「龍姫さん、お酒強いですね。私なんて全然ダメなのに」

「そうなんだ？」

「はい。……ところで、龍姫さんってお幾つですか？見たところ私と同じくらいかなと思うんですが」

「えっと……」

今はこんなだけど、実際の俺はまだ九歳なんだよな。まあそんな事をここで言っても信じてもらえないだろうし、とりあえずは身体に合わせた年齢で答えればいいか。

「十八だ」

「やっぱり……って、未成年じゃないですか！」

「あ、そうか。でも俺がいた世界だと十八歳から飲んでもよかったから大丈夫だって」

「それならいい……のでしょうか？」

「些細な事は気にしちゃダメだよ、早苗。龍姫は酒が飲める、今はそれだけわかってれば充分さ」

「は、はあ……」

「早苗ー、悪いけどお酒とおつまみの追加を頼むよ」

「はい、ただいまお持ちします。それでは龍姫さん、私は少し席を外しますね」

「ああ……つと、そういえば忘れてた」

「……?どうかしましたか?」

俺が突然呼び止めたので、立ち止まって首を傾げる早苗さん。

「いや、そんなに大した事じゃないんだけど、早苗さんの料理がすごく美味しいから、お礼が言いたかったんだ。ありがとう」

「あ、いえ、そんな……でも、そう言っていただけで私も嬉しいです。ありがとうございます」

そ、それでは失礼しますね、と言って早苗さんは足早に台所の方へ。

何か顔が赤かったような気がしたんだけど、気のせいだよな?

「おう、龍姫。ウチの早苗に手を出そうってのかい?」

「か、神奈子様?」

「確かに早苗は今時珍しいくらいの器量良しだけどね……」

「す、諏訪子様?」

な、何だ!?!どうしてこの二柱の空気がトゲトゲしくなってるんだ!?!

「「ウチの娘はやらんからな!!」」

「どうしてこうなった!？」

その後は執拗に絡んでくる二柱をひたすらに宥め続けるハメになった。

「ふいー、それにしてもまさか幻想郷に来る事になるとは……」

夜も更けてきたという事で宴会もお開きになり、あてがわれた客間に戻ってから数刻。

なかなか眠りに就けないでいた俺は、縁側で一人今日の出来事を思い返していた。

「フフツ、眠れないんですか？」

「ん？って何だ、早苗さんか。……悪い、もしかして起こしちゃったのか？」

突然背後から掛かった声にそちらを向くと、そこには夜着に着替えた早苗さんが立っていた。

「いいえ。私も偶々目が覚めてしまっただけですよ。隣、いいですか？」

「どうぞどうぞ。……それにしても、ここは星がよく見えるんだな」

「ええ。私もこちらに来たばかりの頃は驚きましたよ」

「そっか。早苗さんも、前は“外”にいたんだっけ」

「はい。始めのうちは色々と苦労しました。“外”と比べると、ここはないものばかりでしたから」

「そっだよなあ」

などと他愛のない事を話していると、ふと早苗さんの雰囲気が変わった。

「あの、龍姫さんの事情は神奈子様から教えていただきました。それで、その……私にも手伝わせていただけませんか？」

「え？ いや、まあ手伝ってくれる人が増えるのはありがたいんだけど……」

「危険、なんですよね？」

「ああ。何せ探すのは神界の秘宝だからな。相応の危険が伴うのは間違いない」

「で、でも……それでも、龍姫さんの力になりたいんです！……つて、わわっ、ごめんなさい。急に大きな声を出して」

驚いた。恐らく、今の俺はさぞマヌケな表情をしているに違いない。

「わかった。流石に、そこまで言うてくれるのを無碍にはできないからな。よろしく、早苗さん」

「あ……はいっ！よろしくお願いします！」

「早苗さん、声、声」

「あ、す、すいません……」

口の前に人差し指を立てるジェスチャーをすると、慌てて口を噤む早苗さん。……可愛いな、この人。

「まあ安心してくれ。万が一危険に陥ったとしても」

「陥ったとしても？」

「早苗さんは絶対に俺が護るから」

「つつっ！？」

——ボンッ！

その瞬間、まさに爆発したという表現がピッタリくるかの如く、早苗さんの全身が真っ赤に染まった。

「ん？」

「あ、あう、あうあう……」

——フラッ

——パタリ

まるで魚のように数度口をパクつかせた後、突然早苗さんが倒れた。

「あ、あれ、早苗さん！？早苗さん！？」

「きゅう……」

倒れた本人は目を回していた。

「ど、どうしてこうなったーっ！？」

本日何度目かの台詞と共に、幻想郷での初日は終わりを迎えたのだ。
った。

異聞録第2話 『神様達の日常って……』（後書き）

あとがき

龍姫 「どうしてこうなった!？」

作者 「その台詞、もうええわっ!」

龍姫 「何で毎度毎度こんな展開になるんだよ!？」

作者 「受け入れる。これがお前の運命だ」

龍姫 「ふざけるな!こんな運命、俺がブチ壊してやる!」

作者 「フツ、残念だがそれは無理ってもんだ」

龍姫 「何故だ!？」

作者 「だって、そう仕向けなくてもお前の能力が勝手に軌道修正するからな」
チカラ

龍姫 「俺の能力？」

作者 「ほら、あれだよあれ。設定その2の時に話した無償の愛」
フラグメイク

龍姫 「アレのせいか!」

作者 「そう、だから無理なの。ユーアングダスタン？」

龍姫 「クッ…… 本当にどこまでもムカつくヤツだな、ゼウス」

作者 「まあそんなわけだから、諦めんしゃい」

龍姫 「…… イツカ殺ス、イツカ殺ス、イツカ殺ス…… (ブツブツ
ブツ)」

作者 「あ、龍姫が壊れた。…… というわけで次回予告です。

(仮) 次回、異聞録第3話『さあ、宝探しに出発！のその前に……
』

をお楽しみに！」

異聞録第3話 『いざ、宝探しへ！のちょっとその前に……』

明くる朝。

「ふあゝあ……眠い……」

神社の境内をのろのろと歩きながら大欠伸する。

早苗さんが倒れた後、とにかく彼女を移動させようとしたのだが部屋がどこかわからなかったので、仕方なく客間に運んで自分用に敷いておいた布団に寝かしつけ、俺は廊下に腰を下ろして休んでいた為、思ったほど疲れが取れなかったからだ。

ところで、先程彼女が起きた事を確認して部屋の戸を開けた時に、顔を真っ赤にした彼女から枕を投げられたんだが、何故だろうか？

——バッチーン！

「いつ！？」

「何だ何だ、朝から辛気臭い顔をして？もつとシャキツとしなよ」

突然背中を思いきり叩かれ何事かとそちらを向くと、そこには二柱の姿が。

「痛てて……神奈子様、諏訪子様、おはようございます」

「ああ、おはよう」

「おっはよう！……って、あれ？昨日は眠れなかったのかな？」

「ええ、まあ……」

何となく昨夜の早苗さんとのやりとりについては話さない方がいいような気がしたので曖昧に濁した。

「慣れない環境で変に緊張でもしたのかな？」

「はい。多分そんな感じだと思います」

「ふーん。とてもそんな繊細な人間には見えなかったけどなあ」

「諏訪子様、それはどういう意味ですかねえ？」

「おっと、ちよいと口が滑ったよ」

「ふむ、龍姫がその調子では今日のところは搜索は止めておいた方がよさそうだね」

「そうですね。それに搜索に出る前にお見せしたいものもありますし」

「そっか。それは今日でも大丈夫なのかな？」

「ええ、問題ありません。昼までには完全に復調すると思いますから」

「ようし。それならまずは朝飯を食べて英気を養つとしよう」

そうして朝食を摂る為、3人で居間へ向かった。

「「じいー」」

「た、龍姫さん、遠慮せずにドンドン食べて下さいね」

「ああ。それじゃご飯おかわりで」

「は、はい。それではお茶碗をこちらに……ひゃうっ」

茶碗を持った俺の手が伸ばしていた彼女の手と触れてしまい、驚いた彼女が手を引っ込めた拍子に茶碗が宙に浮いた。

「おっと、大丈夫か？」

「だ、大丈夫です。すみません……」

「いやいや、謝る必要はないだろ」

「「じいー」」

「はい、おかわりです。……と、ところで料理の方はいかがですか？お口に合わないものとかありませんか？」

「口に合わないだなんてとんでもない。どれもこれも美味しいよ。」

早苗さんは本当にいいお嫁さんになりそうだ」

「お、お嫁さんだなんてそんな……はう」

「「じいじい」」

「……もうそろそろツツコンでもいいよな？ いいんだよな？」

「あー、神奈子様に諏訪子様？ どうかされましたか？」

「なあ、龍姫よ。お前、昨夜早苗と何かあったんじゃないか？」

射抜くような視線で俺を見てくる神奈子様。

「何か、とは？」

「あー、神奈子？ どうやら質問すべきは早苗の方みたいだよ？」

俺の返答に何か思ったのか、諏訪様様が神奈子様にそんな事を言う。

「む、そうか。……コホン。早苗、昨夜龍姫との間に何かあった？」

「べ、別に何もありませんよ、神奈子様」

「早苗、ダウト」

「す、諏訪子様！？ ほ、本当に何もありませんってば！」

「いやいや、さっきまでのやりとりを見てれば誰でも何かあったってわかるよ」

「そういう事だ。さあ早苗、さつさと白状しちやいな」

「えっと、その……」

「さあさあ、早く早く」

「……わ、わかりました。お話ししますので、申し訳ありませんがこちらへ来てお耳を貸していただけますか？」

「ああ、いいよ」

「はいはい」

そうして部屋の隅に移動して何やらぼそと話を始める3人。

しばらくして、

「なるほどねえ。まあそんな事を言われちゃあコロッといくのも無理はないか」

「そうだねえ。まあ龍姫ならいいんじゃない？見たところフリーっばいし」

「うう……は、恥ずかしい……」

納得顔でうんうん頷いている神奈子様と楽しそうな笑顔の諏訪子様、顔を真っ赤にした早苗さんが戻ってきた。

「いや、すまなかったね。私の早とちりだったみたいだ」

「は、はあ……」

「話は聞いたよ。搜索には早苗と二人で行くといい。私達は神社で待機してるから」

「あ、はい。わかりました」

「つつ／＼／／」

話ってその事だったのか。……あれ？じゃあ何で早苗さんは顔を赤くしてたんだ？

あれから時間は過ぎ、今はおよそ午後二時。場所は神社の裏にある風神の湖。

「それでは、搜索にご協力いただく皆さんに俺の能力^{チカラ}について説明したいと思います」

「「「おー」」」パチパチパチ

「あ、別に拍手とかいりませんから。まずは俺がどういう存在か、というある意味能力の根幹についてです。……ハイペリオン、セツトアップ」

『Standby, ready.』

——パシュンッ

「「「おおっ!?!」」」

俺が着ていた服が一瞬で変わった事に驚きの声をあげる3人。

「龍姫、お前さん一体……」

「うーん……魔法使い、なのかな?」

「当たらずとも遠からず、です。括り的には魔法使いに分類されると思います。より詳しく言うと魔導師ですね」

「魔導師、ですか?」

「ああ。ところで、幻想郷の魔法使いは普通の人間が修行を極めた末に辿り着く後天的なものですよね?」

「ああ、そうだな」

「魔法使いと魔導師の違いはそこにあります。魔導師は先天的に“ある素質”を持った者になる事ができるんです」

「「「ある素質」?」」」

3人の声がハモった。

「今からそれをお見せします。……リンカーコア、表出」

——ポウ

俺の言葉に合わせて、胸の辺りからリンカーコアが一つ出てくる。

「これはリンカーコアと言って、大気中の魔力を体内に取り込んで蓄積したり、体内の魔力を外部へ放出するのに必要な器官です」

「……つまり、これがないと魔法が使えないってこと？」

「そうですね。後は俺の相棒も紹介しておきましょう」

『ハイペリオン・Sといます。異世界の協力者の皆様、どうぞお見知りおきを』

「『き、機械が喋った!?!?!』」

再びハモる声。

「ハイペリオンは『デバイス』と呼ばれる魔法補助装置です。人工知能を搭載しているので会話をする事もできます」

「はあ、龍姫のいた世界ってのは随分進んだ技術を持つてるんだね」

「進んだ科学技術と魔法が融合した文化を持つ世界か。興味深いね」

「まあその辺の話はおいおいという事で。とりあえず、能力の説明からいきましょう」

「おっ、こいつは楽しみだね」

「まずは能力の大枠について。俺の能力は幻想郷流に表現すると^{□ま}護を司る程度の能力^{もり}になります」

「『護を司る程度の能力』……？」「」

「実際に見てもらったほうが早いですね。……『プロテクトウォール』！」

——キーンッ

「誰でもいいので、弾幕を撃ってもらえますか？」

「あ、はい。それでは私がいきます」

「いつでもどうぞ」

「……いきます。奇跡『神の風』！」

——ゴオオオオッ！

スペルカードの宣言に合わせて、強烈な風がこちらに向かって吹い

てくる。

——ドドーンッ！

そして着弾。凄まじい衝撃にバリアがビリビリ震える。

「……ふう」

そして風が止んだ後には、何一つ変わった様子もなく立っている俺の姿。

「まさか避ける素振りも見せずに、早苗の『神の風』を防ぎきるとはねえ……」

「あの『盾』、相当頑丈みたいだね」

「『神の風』は私の持っているカードの中でも上位に位置するものなのに、あれ程簡単に防がれてしまうなんて……ちょっとショックです」

三人はそれぞれに驚いている。早苗さんはちょっとショックだったようだ。フォローしておくか。

「早苗さん、そんなに落ち込まないで。実際に弾幕を見たのは初めてだけど、さっきのはかなり凄かったよ」

「えっ、そ、そうですか？あ、ありがとうございます……／＼／＼／」

うん、笑顔に戻った。もう大丈夫かな。

「（しかし……）」

『（タツキも気づきましたか）』

ふと零した囁きにハイペリオンが反応した。

「（ああ。どうやら幻想郷は空気中の魔力素が少ないらしいな）」

『（はい。外界からの魔力補給はやや困難かと思われます）』

外界からの補給が難しいとなれば、体内で魔力を練る必要がある。魔法の無駄撃ちは避けておくべきだろう。

「（よし。ならば、今後は魔力の使用を戦闘中に限定する。まあ、平常時は気力だけでも充分だろう）」

『（わかりました。しかし、こちらで危険と判断した場合は魔力を使用して対処します）』

「（ああ。そうしてくれると助かる）」

ここまでの会話に要した時間、およそ五秒。超高速思考が可能な今だからこそできた芸当である。

「しかし龍姫よ。お前さん、相手の弾幕を防ぐだけなのかい？」

「そうだね。守るばかりじゃなくて、時には自ら攻撃に出ないと」

「それに『スペルカードルール』はご存知ですか？ 幻想郷ではこれに則って闘わなければならないんですよ」

「ご心配なく。一応それに合わせて用意してあります。一つ試し撃ちしてみますね」

そう言つて魔力で編んだカードを取り出すと、俺は湖を正面に向き直つた。

このカードは今日ここに来る前に用意したもので、カートリッジに魔力を込める要領で魔法自体をカード状に固定したものだ。

「いきます！ 大雪崩『アヴァランチ・プレッシャー』！」

——ズドドドドオオオツ！

真つ直ぐ湖に向かつて解放された雪崩は、通過した湖面を凍らせながら向こう岸までの道を作つた。

——ヒュゴオオオツ！

——パキパキパキツ

更に、雪崩からワンテンが遅れて吹き抜けた寒波によって残る湖面全てが凍りついた。

「こ、これは……」

「そんな……」

「す、凄い……」

その様子を見て、開いた口が塞がらないといった様子の三人。

「とりあえずこんな感じなんですが、どうでしょう？」

「どうでしょう、じゃないよ。スペルカード1枚の力でこの湖一面を凍らせておいて」

「非凡な力を持つてるのはわかってたけど、まさかここまでとはねえ」

「本当に驚きました。改めて尊敬してしまいます、龍姫さん」

「いや、尊敬だなんてそんな。僕だってまだまだですよ」

「とにかく、龍姫の力を見せてもらったよ。これなら幻想郷^{こく}の連中に後れを取るような事もそうないだろう」

「そうだね。それにまだ隠しているものもありそうだし」

「そうですか。お二人にそう言っていたけると少しは安心できます」

「それじゃあ、搜索は明日からって事でいいね」

「問題ありません。早苗さん、改めてよろしく頼むよ」

「はい。こちらこそよろしく願います」

そんなわけで、今日はここまで。お疲れした！

異聞録第3話 『いざ、宝探しへ！のちょっとその前に……』（後書き）

あとがき

作者 「異聞録の始まりに合わせて一時的に成長した龍姫のステータスを載せておきます」

身長：178センチ

容姿：顔立ちは大人びたものの、相変わらず女性っぽさは抜けない。

髪は今も後ろで縛って垂らしている。

片方の瞳だけが虹色に輝き、『フルコンタクト』状態である事を表している。

【スペック】（異聞録開始時）

筋力：A A A 魔力：E X

気力：E X 耐久：S S

敏捷：S + 幸運：B

【保有スキル】

護りの力：EX

武術の心得：S

魔法技術の知識：S

龍召喚：EX

攻撃魔法適正：EX

無償の愛：S

魔力変換資質：流水、凍結、風

【発展スキル】

神魔召喚：EX

龍召喚の発展スキル。神話・伝説に語られる神や悪魔の属性を持つモノ全てを召喚できる。

フラグメイク・2nd
夢幻の愛（対女性専用）：S

無償の愛の発展スキル。女性に対して口説き文句のような台詞を無

自覚に口にするようになる。もはや天然ジゴロである。

龍姫 「能力が増える余地ってまだあったんだな。っていうか、うち一つは余計以外の何物でもないんだが」

作者 「まあその辺は諦めてくれ」

龍姫 「……わかってるさ。もう文句は言わない」

作者 「おお、大人になったなあ」

龍姫 「こんな事でありたくはなかったけどな」

作者 「そんなところで、次回予告に参りましょうかね」

龍姫 「次回、異聞録第4話『物事は始めの一步が一番大事（仮）』

を」

作者 「よろしく願いします！」

異聞録第4話 『何事も最初が肝心。果たして行き先は……』

翌日。

「ところで龍姫さん、宝物の搜索に関して手がかりなどはあるんですか？」

朝の食卓で早苗さんからそんな質問をされた。

「ああ。一応幾つか心当たりがあるから、そこから回っていろいろか
思ってる」

「そうですか。ちなみに、今日はどちらに行かれる予定ですか？」

「うーん、そうだな……」

幻想郷^{こゝ}に来る前にゼウスから名前を聞いた秘宝^{モノ}を思い浮かべ、

「よし、決めた。今日は紅魔館に行こう」

——ピシッ

俺がそう口にした瞬間、食卓の空気が凍った。

「龍姫、お前さんよりもよって何故最初にそこを選んだ？」

「物事には順序ってものがあると思うんだ」

「さ、流石にそれは止めておいた方がいいと思いますよ?。」

三人の反応は何故かよろしくない。

「いやいや、何でそんなに及び腰なんですか!。」

「お前さんがいきなり難易度最高クラスの選択肢を選ぶからだよ!。」

「せめて最初はまだ少し難易度を落としたっていいと思うよ?。」

「わ、私には無理です……せめて心の準備をする時間を空けてからに……。」

神奈子様と諏訪子様が反対する理由はよくわからないが、早苗さんがマジ涙目なのでここは引き下がるか。

「わかりました。では紅魔館は次回以降という事にして、今日は命運寺に行きます」

「うむ。まあそれならいいだろう」

「そうだね。妥当なところかな」

「あ、ありがとうございます……」

「うっ……」

行き先が変わった事に安心した早苗さんが浮かべた涙混じりの笑顔に、俺は思わず顔を背けてしまった。

「ま、まあそんなわけで、この後すぐ出発するけど大丈夫か？」

「はい。大丈夫です」

予定とは外れてしまったが目的地も決まった事だし、まあ良しとしよう。

「それじゃあ早苗さん、道案内は任せた」

「はい、お任せ下さい。それでは神奈子様、諏訪子様、行ってまいります」

「ああ。気をつけて行つといで」

「あまり遅くならないうちに帰って来るんだよ」

残る二柱に見送られ、俺達は神社を後にした。

鳥居を出て石段を降りると、そこは妖怪の山。もしかしたらここに住む妖怪の誰かに出くわす事もあるかもな。

そんな事を考えながらしばし歩いていると、

——バサバサバサッ

「あやややや、朝からお出掛けとは珍しいですね？」

早速誰かやって来たようだ。

「はい。今日は里にある命蓮寺にちょっとした用事がありまして」

「そうでしたか。ところで、お隣にいる方はもしかして……」

「ええ。先日こちらにいらっしゃった外来人の方です」

「ほほう。というと、貴方が湖に水柱を立てた張本人ですか？」

「ああ、そうだが」

こちらにも会話を振ってきたので、簡単に返事をする。

「なるほど。おっと、そういえば自己紹介がまだでしたね。私は――」

「『幻想郷最速のブン屋、清く正しい射命丸文』、だろ？」

「あやや、ご存知でしたか」

言葉ではそんな事を言っているが、本人にがっかりした様子は見られない。

「まあ外の世界じゃそれなりに有名だったからな。それで、目的は俺の取材か？」

「むむ、鋭いですね。まあその通りです」

「だったら、悪いが後にしてくれ。今日は先に済ませないといけない用事があるからな」

「そうですね。今日でなければ時間を作る事は難しくありませんし、後日改めてにしませんか？」

「そうですか……わかりました。それでは、その用事とやらに私もご一緒させていただきましょう！」

「は？」

「へ？」

上手い事理由をつけて諦めさせようとしたのだが、思わぬ反撃を受けて頓狂な声をあげてしまう俺と早苗さん。

「お話は里への道中で聞かせていただければ結構ですし、用事の内容にも興味がありますので」

「……どうあってもついてくるつもりか？」

「はい。こう言っただけですが、外来の方が来る度に何かしらの異変が起こっていますからね。これを取材しない手はありません」

「龍姫さん、どうしましょう？」

「……わかった。同行を許可する。その代わり、行く先で何が起こ

つても知らないからな」

「ご心配には及びません。むしろ望むところですよ」

そう言つてニヤリと笑う文。

「こっちの自己紹介がまだだったな。俺は氷護龍姫だ。よろしくな、文」

「初対面の相手を名前で呼び捨てとは大胆な方ですね。こちらこそよろしく願います。龍姫さん、でよろしいですか？」

「ああ。好きに呼んでくれ」

——テレテレットッテッ！文が仲間に加わった！

そんな感じでパーティーメンバーを増やしつつ俺達は山を下る、はずだったのだが……

「龍姫さん」

「早苗さん？どうかし——」

「どうして文さんは呼び捨てで、私はさん付けなんですか！」

「え？」

何故か早苗さんがご機嫌ナナメでいらっしやる。

「私の方が文さんよりも龍姫さんに年が近いんですし、よ、呼び捨てにしていた方がいいんですよ？」

「いや、それは何ていうか……って、それだったら早苗さんも俺に必要以上に敬語を使うのは止めて欲しいんだけど」

「わ、わかりました！それは私も気をつけま——気をつけるので、龍姫さんも、さあ！」

「うつ……わかったよ。さ、早苗……これでいいか？」

こうして改まって相手の名前を呼ぶとなると、どこか気恥ずかしく感じるのは何故だろうか？

「どもったのもう一回お願いします」

「き、厳しいな……早苗」

「はうつ／＼／＼も、もう一回……」

「早苗」

「は、はい！こ、今後はそれをお願いしますね」

「りょーかい」

何だかよくわからなかったが、早苗の機嫌は元通りどころか絶好調っぽいからいいか。

「（あやや、これはこれは。早速面白そうなネタを見つけてしまいましたかね？）」

そんな俺達のやりとりを横で見ていた文は、手帖に何やら書き込んでいたそう。

その後、文の宣言通りに道中ひたすら質問攻めに遭いながらも俺達は無事に山を下りた。

それからまたしばらく歩き、もうすぐ人里というところまでやって来た。

「そういえば、こつちの世界ではお金はこれで通用するのか？」

ふと疑問に思ったので、俺は財布から諭吉さんを取り出して早苗に訪ねた。

「そ、それは……こちらに来てからはほとんど目にする機会はありませんでしたが、まさか諭吉さんですか！？」

「あ、ああ。そうだけど……」

目をキラキラさせて迫ってくる早苗に若干引く俺。

「本当に久しぶりに見ました。何だかちょっと感動です」

「うん、まあそれはよかったね……で、質問の答えはどうなんだ？」

「あ、そうでした。コレで大丈夫ですよ。外人の方がいらっしやるようになって以降、だいぶ浸透してきましたから」

「そっか。ありがとう」

「ところで龍姫さん。何故このタイミングでお金のお話を持ち出したのですか？」

会話の終わりを見計らったかのようなタイミングで、今度は文が質問してきた。

「ああ、里に着いたらちよつと買いたい物があつてね。その前に確認しておいた方がいいと思つたんだ」

「なるほどなるほど。……で、それだけって事はないですよね？」

む、鋭い。

「まあ、幻想郷でできた友人達と親睦を深めようとお昼をご馳走するつもりではいたが」

「流石です！貴方ならそう言つて下さると思つていましたよ」

「えっ！？い、いいんですか？」

「いいさ。せつかくの機会だから、今日は俺にオゴらせてくれ」

「は、はい。それでは楽しみにさせてもらいますね」

なんて会話をしているうちに里の入り口に辿り着いた。

「それじゃあ、ちよつと買い物を済ませてくるから一旦解散でいい

か？」

「いいですよ。集合場所はどうしますか？」

「そうだな。どこかいい場所はあるか？」

「それでしたら、里の中央にある広場がいいのではないかと。あそこは待ち合わせによく使われますからね」

「なるほど。だったらそこにしよう。まあどこだろうと、こんな美人を見間違っわけないけどな」

「あやや、面と向かって言われると照れますね……／＼／／／」

「も、もう、龍姫さんってば……／＼／／／」

何故か文は頬を掻きながら顔を背け、早苗は頬を手で覆って首を振っているのだが、何かあったのだろうか？

「四半刻もあれば終わると思うから、時間を見計らって集合な！」

と言うが早いか、俺は二人を置いて里の中へと駆けて行った。

そうしてきつちり四半刻の後、二人と合流した。

「あれ？龍姫さん、その恰好は……」

「いいですね。お似合いだと思いますよ。ね、早苗さん？」

「はい」

「そうか？ならよかった。この世界で洋服だと浮くからな。値段も手頃だったし、いい買い物をしたよ」

合流早々に早苗から指摘された通り、答える俺は服を変えていて、今は濃紺の色無地を着ている。

つていうか、“外”じゃそれなりの値段になりそうな和服が 自主規制 円とか、価格破壊も甚だしい。

「時間もちょうどよさそうだし、お寺さんに行く前に飯だな。文、お前どうせ何処の店に行くかもう決めてるだろ。案内してくれ」

「むむつ、よくわかりましたね。いいですとも、ご案内しましょう」

「文さんオススメのお店なら期待できそうですね。楽しみです」

「ええ、お任せ下さい。とっておきのお店を紹介しますよ」

そんなわけで俺達が連れて行かれたのは、

「いらっしやいませ……つて、あら？今日は珍しい組み合わせね。それにそちらの方は……」

「こんにちは、ミスティアさん。こちらの男性は先日幻想郷に来た外来人の方です」

「なるほど。確かにここはいいお店ですね。こんにちは、ミスティアさん」

「こんにちは、早苗さん」

「『夜雀の屋台』、か。店主さん、こんにちは。俺は氷護龍姫だ」

「これはご丁寧にどうも。私は『夜雀の屋台』店主のミスティア・ローレライです」

ミスティア・ローレライの営む屋台だった。どうやらちょうど人里近くで出店していたようだ。

昼時という事でそれなりに客が入っており、盛況している。

「それでは“いつもの”を三つお願いします」

「はいはい、“いつもの”ね。今日もお酒は飲むの？」

「はい。お願いし——」

「すまない。今日はこの後ちょっと寄る所があるから遠慮するよ」

「そうですか。わかりました」

文が何やら不満そうな顔をしているが無視する。TPOを弁える。

談笑しながら昼食を済ませた俺達は、ようやく本来の目的地へとやってきた。

え？文の“いつもの”が何だったかって？『ヤツメウナギの蒲焼重』だよ。スゲー美味かったさ。

「それじゃあお邪魔するでしょうか」

「はい。行きましょう」

「ふっふっふ、一体何が待っているんでしょうね」

はてさて、何が出てくるやら。

異聞録第4話 『何事も最初が肝心。果たして行き先は……』（後書き）

あとがき

作者 「すいません。何だか長くなりそうだったので分割しました」

龍姫 「そんなわけで次回予告だ。

次回、異聞録第5話『ついにお宝発見！そこで調査隊が見たものは……（仮）』

を」

作&龍 「「お楽しみに！」」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1880n/>

魔法少女リリカルなのは～蒼銀の護り手～

2011年10月7日13時57分発行